

下竹
田畑二十六町七
反七畝
八重村
田畑三十五町一
反六畝
占見新田
田畑六十六町八
反九畝
船一艘七端帆
地頭下村
田畑四十町四反
戶數五七戶
地頭上村
田畑二十二町七
反、戶數七一戶
益坂
田畑十八町九反
戶數八九戶
本庄村
田畑三十五町四
反六畝
戶數一四三戶
鴨方村
田畑五十一町九
反一畝
戶數一五六戶
深田村
田畑三十二町六
畝
戶數一〇五戶

勇崎濱 二百三十八石五升六合 同
七島村(寛文十一年開發) 字、北地、島地、濱 二千四百四十四石四斗五升 鴨方藩
上竹新田村(同元年) 二百二十四石七斗五升三合 同
道越村(同十年) 字、要害、阿原、川添 千六百八十九石六斗二升二合 同
上竹村 二千二百七十二石五斗三升八合 岡山藩(松平内藏頭)
下龜道富 竹山口 同
八重村 八重山、西 七百九十三石七斗一升 鴨方藩
占見村 千四百三十三石六斗一升四合 岡山藩(松平内藏頭)
占見新田 千四百三十三石四斗七升 鴨方藩
大谷村 百六十二石四斗五升六合 淺尾時田權佐(陣屋、井手)
須惠村 百五十三石八斗六升三合 同
佐方村 四百二十四斗 淺尾、時田數馬介(陣屋、三須)
地頭下村 六百一十一石九斗四升 岡山藩(松平内藏頭)
武 龜左衛門藏

小坂東村
田畑三十五町三
反九畝
小坂西村
田畑四十七町三
反七畝
口林村
田畑七十二町八
反五畝
戶數一六九戶
(池口)
田畑六十二町一
反三畝
西大島村
田畑三十七町三
反五畝
戶數一四四戶
大島中
田畑四十町三反
二畝
戶數二二三戶
東大島
田畑二十八町九
反四畝
戶數一四〇戶
六條院西
田畑四十七町四
反二畝
戶數一七四戶
六條院中
田畑六十一町七
反一畝
戶數一八五戶
六條院東

地頭上村 七百四十石六斗六升八合 同
益坂 同
本庄村(小口、仁蓮寺) 丸山、木之元 九百三十四石一斗四升 鴨方藩
鴨方村(西町、河手、中山、堂川、大子奥、名口) 千二百五石一斗一升 同
深田村(石井谷、中谷、西谷、上道谷) 七百二十七石一斗 同
小坂東村(宇月原、杉谷、土井谷、犬飼、宮前谷) 八百三十五石七斗五升 同
小坂西村(大内、西原、指田、德良田、谷井、引野) 千七百七十二石七斗八升 同
口林村(松尾、高岡、殿迫、大原、平井、手際、崩、岩村、殿迫、地村) 千三百二十七石一斗 同
池口 千二百二十三斗三升 同
上新庄村 二百九十五石三斗八升 攝津麻田(陣屋、川面)
下新庄村 三百二十一石八斗九升三合 同
濱中村 二百八十六石六斗七升八合 同
西大島村(前砂、おん、黒崎、鳥、江) 五百十五石四斗五升六合 鴨方藩
服部 善平
原田 邦太

田畑三十二町一
反三畝
戸數一八九戸

天保六年田畑
手覺に記せる
所左の如し

鴨方村深田字有井
組頭佐藤直平手記
地頭下村、四條原
原部、地頭明、竹
原 戸數八八戸

鴨方村 戸數一七八
小坂東村 戸數一三三
深田村 戸數一七九
口林村 戸數一七九
(池口) 戸數一三二
西大島村 戸數一三五
西大島新田 戸數一三五
大島中村 戸數一三三
東大島 戸數一五〇
宮頭 戸數一五〇
宮通 戸數一五〇
尾燒 戸數一五〇
鏡 戸數一五〇
寄島 戸數一三三

本郡に於ける天保
の飢饉

西大島新田	三百五十七石七斗七升一合	同	原田助之進 松枝新左衛門
大島中村 (はぶ、湯舟、 山代、大工、 正頭、柴木)	千三百七石二斗三合	同	原田一 竹原多郎四郎
東大島 (尾燒、青佐、 鏡、宮通、國、 頭、片本、國)	八百四十八石六斗四升八合	同	原田多吉郎 高橋平八郎
六條院西村 (井、淺倉、 土井、高、 向月、安、 倉浦)	九百四十三石一升	同	鈴木直四郎 鈴木忠太郎
六條院中村 (赤鉢、瀧ノ、 尻、四條原、 眞山、戸山)	千三百一石九斗五升	同	平井卓右門 民右門
六條院東村 (相部、四條、 竹原、犬馬、 場、赤鉢)	六百一十一石九斗四升	同	高橋平八郎 同 廉太
黒崎村	千五百七十七石九斗四升九合	直轄(陣屋、倉敷)	吉田八左衛門
(村數六十四ヶ村) 高合計五萬四千二百二十五石二斗二升三勺			

第十五章 天保の饑饉と安政の大地震

第一三節 天保六年一月より三月に至る霖雨の爲め麥作に害あり。夏五六兩月降雨、氣候不順にて植物不熟なり。秋七月下旬東北の大風起りて作物に大害あり。九月上旬

本郡に於ける安政の地震

大霜降りて稻綿に大害あり。米收穫の如きは平年の五分に至らず。十二月に至りて物價騰貴し、窮民山野に入り草根木實を探り、又米麥の糠團子を食するに至りしが、食盡きて四方に離散し、或は餓死するものあるに至れり。大塩平八郎が大阪に於て飢民の窮乏を救はんとして遂に亂を起ししも、此年の事なり。

安政二年十月二日夜四時大地震起りて田畑は破目を生じ、家屋動搖して人々皆屋外に住居したりき。(以上、明治二十年淺口郡長(窪津義忠、縣廳取調報告書)

第十六章 農民の江戸公事

一、柏島、阿賀崎村及富田村

第一四節 今より凡そ百餘年前、柏島、阿賀崎の農民重税に堪へず、相結んで課税引下げのため江戸公事を起したり。然れども文献の微すべきものなければ知るに由なし。唯口碑傳ふる所によれば、當時公事のため上京せし人に繁兵衛なるものあり云へき、其家も今は絶えて跡なし。

富田村の江戸公事

寛文十年道越・七島・八重・阿賀崎等の新開成るや。大木・増原兩貯水池の水量に不足を告げ、之が引水の議起りて吉備郡穂井田村大字大堂の水取仕事をなさんさせしに、大堂は岡田領なるより容易に交渉纏らず。遂に江戸公事となり、池田村庄屋

友澤善次兵衛代表者となりて出府す。當時の記録にして駄賃帖、旅籠帖二冊友澤家に残存せり。居るこゝ八年遂に勝訴となり、一旦歸郷し、將に起工せんとするや四十八歳にして死し、嗣子十九歳の幼年を以て工を中止し、後起工せんせしに阿賀崎庄屋より水量増加に伴ふ破堤の際を如何にすべきかの詰問に對し、倉敷の大年寄上田武衛門等の仲裁により事落着し、遂に其工を竣へたり。(大正七年、富田村誌、本尋常高等小學校調)

二、乙島村

第一一五節 乙島村海面約百二十町歩の新開築立に關しては、文化年中上成庄屋貞助立入、上郷村々へ示談し、故障なき故を以て文政年中乙島庄屋守屋彦右衛門に新開築立の事、代官大草太郎右馬より仰付けられたり。

然るに天保十年に至り(庄屋貞助、死後)、玉島村外九ヶ村より水通し故障談起り、容易に整はざる折柄、庄屋重左衛門(彦右衛門の改名)亦死亡し、息勝太郎嗣ぎて新開築立を仰付けられ、上郷村々へ談合したれど纏らず。遂に阿賀崎新田村外十七ヶ村聯合して江戸訴訟を起し、掛り役人玉島に來着し、取調中文久年中、倉敷なる植田武右衛門なるもの仲裁して双方を納得せしめ、事漸く落着す。(守屋徳太郎氏蔵の新開所、始末書及議定書に依る)

第八編 幕末維新時代

第一章 幕末政局の推移

第一 幕末志士の奔走

管内の志士(藤本
鉄石)

第一一六節 幕末尊攘論の勃興するに及び、愛國の志士起りて國事に奔走するもの少なからず。就中顯著なるを藤本鐵石とす。

鐵石は上道郡の人、京都に出で、軍學者花房義制の門に入り、傍ら天下の志士と交はる。後居を伏見に定む。時に尊王討幕論起り、輦轂の下日に騷擾を極む。文久三年同志等中山侍從忠光を奉じ、義兵を河内に擧げ天誅組と稱し、大和に入り遂に十津川に斃る。(岡山縣人物傳)

本郡内にては三宅高幸。赤松秋錦出でて國事に奔走す。

三宅高幸は西浦の人、瓦全と號す。幕末外艦渡來のこゝあるや、財を邑主に獻じて海防費に供す。亞で京師に至り、梅田源次郎・頼三樹三郎等と相交はり尊王攘夷の説を主張す。又東遊して水戸烈公に謁し、再び西下して白石正一郎を赤間關に訪ひ、平野國臣、高崎善兵衛等と相謀り、陽はりて薩産の交易場を中備に設け、陰に藩兵

本郡内の志士
一、三宅高幸

上京の路を啓く。亞で入京して朝彦親王に事ふ。時に十津川の兵起る。高幸其徒と交はり又嫌疑を以て屏居す。慶應三年岩倉公に建議し、義舉を圖り丹波に赴きて兵を募る。既にして王業中興し、開港なるや高幸攘夷を圖り、事覺はれて縛に就く。後許されて明治十五年歿す。(第四一五節 參照)

二、赤松秋錦

赤松秋錦は玉島町の内龜崎の人なり。名は三朴、秋錦は其號なり。幕末内外多事なるや志士と往來して尊攘の説を鼓吹す。水戸武田耕雲齋の死するや水戸藩は尊攘黨の名士殆んど盡き同志流離艱苦す。千波尙彦・兒嶋徳藏等作州に往き、勤王の士立石正介を訪ねて後事を謀る。是に於て正介二士を秋錦に託す。彼幕府の嫌疑を避けて備後尾道に潜る。明治の初め倉敷縣召して多年勤王の勞を賞す。(第四六二節 參照)

第一 第一回征長役と管内諸藩の態度附倉敷騒動

第一一七節 幕末尊王攘夷の論沸騰して、文久三年攘夷決行の爲車駕男山に行幸、岡山藩主松山藩主供奉す。

同年車駕大和に行幸し給ひしは長州藩の主張に係る。こは攘夷に託して討幕を實行せんが爲めなり。岡山藩主は大に憂ひて、松山藩主と策應し、大和行幸中止の運動をなせり。然るに、薩會の二藩は天下の政權長州藩に歸するを恐れて青蓮院朝彦親

討幕運動に對する岡山藩の態度

第一回長州征伐と管内諸藩の態度

王を動かし、遂に大和行幸中止の勅命下り、同時に長州藩の堺町御門の警衛を禁じたれば、政局忽ち一變し所謂七卿落となる。發するに臨み岡山池田家に使を遣はして後事を託せしに、曖昧の態度を執る。

斯くて元治元年長藩の浪士上洛して示威運動を試み、哀訴歎願して七卿の歸京を促しし結果は蛤御門の變となり、彈丸宮門を犯して遂に征長の役となる。幕府即ち令を備前津山松山以下二十一藩に下して出兵せしむ。是に於て元治元年十一月備前池田家の長臣池田出羽(手兵千餘)伊木長門(五百八餘)池田伊賀(四百九餘)等進發して廣島に駐まり、支封池田政詮は其采邑地鴨方に、藩主茂政は國境一宮村に駐まる。備中松山藩主板倉勝靜・足守藩主木下利恭・庭瀬藩主板倉勝弘・新見藩主關長克等各兵を廣島に出し、尾張大納言慶勝の指揮を俟ち居たりき。然るに毛利氏三家老を誅して謝罪しければ幕府解兵の令を發す。時に慶應元年なり。

備中倉敷騒動と荒木計之助

翌二年尊攘論者立石正介長藩の脱徒百五十餘人を率ゐて連島に上陸し、備中倉敷及淺尾を焚掠しければ、池田隼人兵を督して討伐せり。淺口郡佐方村荒木計之助(經道を以て世に仕ふ)奮戦して斃れしは此時の事なり。(第五〇四節 參照)

美作苦田郡二宮村に尊王攘夷論の志士立石正介と云ふものあり。播州佐用郡の人立石孫一郎は其親戚たる關係により正介の家に寄食し、與に國事に奔走す。

立石正介と倉敷騒動

備中倉敷大橋氏は立石家と姻族たり。依りて孫一郎は大橋氏に養はれて其氏を冒し敬之助と稱す。時に森田節齋倉敷にあり。四方の志士と往來す。孫一郎其門に學び、尊王の志益々固し。斯くて孫一郎は立石の祖先が毛利氏より拜受せし感狀を携へて長州に走り高杉晋作の麾下に屬し、擧げられて小隊長となる。會々幕府征長の師を興す。孫一郎乃ち益田主税と部下の兵を率ゐ、突然備中連島に上陸し、夜半倉敷の陣屋を襲ひ、翌日淺尾に至り蒔田廣孝の邸を襲ひて之を焼き、呼松より海に航し、後長州に歸り非戰黨の殺す所となる。

第三 第二回征長役と管内諸藩の態度

第一一八節 長州藩の謹慎謝罪に對し、藝州藩・岡山藩は内外多事の故を以て寛大に取扱ふの意見なりしが、西郷隆盛等既に決する所ありて之を許せり。然るに幕府之を喜ばず、毛利氏を嚴罰に處して服罪せしめんとして親征となる。慶應二年六月諸藩中之に反對するものあり。岡山藩の如き其一なり。津山藩・廣島藩は第一先鋒として安藝に至る。然るに幕軍利あらず。斯る間に家茂大阪に薨じければ休戦に決し、勝海舟を廣島に遣はし嚴島に於て長藩と會見して遂に撤兵す。

第二章 大政奉還と廣島・岡山・松山の三藩

岡山藩の態度一變す

藝州藩の態度

松山藩主の動靜

岡山藩の態度

王政復古の精神

小御所の會議に於ける廣島藩の英斷

第一一九節 幕府が長州藩の處分に腐心しつゝありし間に、薩長二藩の聯合を策して遂に其目的を達せしめたるは坂本龍馬なり。藝州藩之に加はり、三藩聯合して討幕出兵の準備全く成りしかば、此計畫を遂げんがために當時譴を得て洛北岩倉村に蟄居し居たる岩倉具視と氣脈を通じ、討幕密勅の降下を得たり。

土佐藩主山内容堂は兵力を以て幕府を倒すに忍びずみなし、後藤象次郎・福岡孝悌をして建白書を幕府に呈し、大英斷を以て王政復古の舉に出づべきことを勸告したりしに慶喜決する所あり。在京諸侯を二條城に集め、老中板倉勝靜(山松)に命じて大權返上の趣意書を示して其意見を徵せしむ。時に慶應三年十月十三日、岡山藩牧野權六郎は直接將軍に會見して贊辭を呈す。是に於て慶喜意を決し大政奉還を奏請す。

第三章 王政復古

第二一〇節 慶應三年十二月九日王政復古の大號令發布せらる。其精神は神武天皇創業の精神に則れり。こは岩倉具視の臣・玉松操の創見たり。是に於て、新に總裁(有栖川)議定(五藩主の中、中國より)參與(廣島藩より辻田將曹、櫻)の三職を置く。

斯くて王政復古の大號令發布の當夜、徳川氏の處分を決するため、維新史上著名なる小御所の會議開かる。席上岩倉公及列席五藩の中、薩州藝州の二藩は慶喜公に辭

官納地の建言を迫りて其主張行はる。此會議に辻將曹翰旋議を纏む。然るに辭官納地は大阪の幕府方會津藩の怒る所となりて鳥羽伏見の戦となり。更に關東奥羽蝦夷地と戦争は發展して、此事件の解決に尙二ヶ年に近き日子を費したりき。

第四章 伏見鳥羽戦と管内諸藩の向背

第一二節 明治元年正月大阪の幕軍討薩の表を捧げて京都に向ふ。薩長の二藩は伏見鳥羽街道を守る。岡山池田家は京師戒嚴のため大津を守る。既にして幕府敗れて慶喜江戸に走る。朝廷岡山藩に命じて縣下各藩の向背を糾さしむ。足守・庭瀬・淺尾・無川・新見・岡田・成羽・津山・勝山の各藩は勤王の意を表す。鶴田藩は官軍に抗したる故を以て老臣一人自殺して罪を謝す。松山藩板倉氏は佐幕黨の故を以て池田茂政に命じて之を討たしめ、特に錦旗二旗を賜ふ。是に於て長臣伊木若狭兵を督して松山に向ひしに、家宰軍門に降服し一意恭順の意を表す。是に於て兵士を松山城に置き若狭をして國中を鎮めしむ。

曩に松山藩主板倉勝靜は慶喜に従ひて江戸に走り、熊田怡に命じて藩兵を率ひて松山に歸らしむ。是に於て怡は藩兵百五十餘人を率る海路より玉島に著し、松山に向はん。池田藩兵轉じて玉島に向ひ之を圍む、怡恭順の意を表し士卒を鎮撫し他意なきを示し、從容して自殺す。時に明治元年正月二十二日。玉島の町民怡の節に死したるため兵燹を免れたるを徳とし、祠を建て遺刀を納めて之を奉祀し、熊田神社と云ふ。(松山藩老熊田君碑 銘川田剛撰並書)

熊田怡は松山の藩士なり。幼にして學を藩の有終館に受け、又劍を學び伊豫の宇和島に至り、研究三年にして其蘊奥を極めて歸る。門弟數百人、一時其盛を極む。初め身を近習より起し遂に執政の班に列す。翌明治元年伏見の變あり。玉島柚木氏邸に於て壯烈なる最期を遂ぐ。其將に死せんとするや端坐東向再拜して主恩を謝し、隊長監察をして其傍に列せしめ、中央に白木の案を設け短刀を載す。暫くして刀を握り左腹を抉るこみ深寸餘、横一字に截り以て右腹に至る。介錯炬光刀を揮ふ。首輒ち地に墜つ、時に年四十四。(松山藩老熊田君碑銘)

第五章 戊辰役と岡山藩

第一二節

徳川慶喜東走の後、朝廷熾仁親王を以て征東大總督とし、西郷隆盛參謀となり、岡山藩先鋒として東海道に進發す。大總督府は海路より駿府に着す。又東山北陸二道の軍も進發し、三道の軍進みて江戸の郊外四方の地を占據し、三月十五日を以て火を江戸に放ち、一舉に雌雄を決せんしたり。慶喜一意謹慎の意を表

し、勝安芳に全権を委ぬ。安芳時勢を達観するの明あり、平和の間に江戸城を開き慶喜の晩年を完うせしめたり。
然るに幕府麾下の士は慶喜の所爲を喜ばずして、殘黨上野彰義隊官軍に抗したれき遂に降服して關東鎮る。奥羽にありては松平容保若松城に據りしが、糧食彈藥盡きて降服せり。時に明治元年九月岡山藩は右兩役に參加せり。

第九編 現代

第一章 明治初年の地方統治と中國地方の藩別

第一二三節 王政復古明治新政府の成るや、元年大いに官制を改革し、又地方を區分して府縣藩ミなし、更に藩を石高によりて大藩(四十萬石以上)中藩(十萬石以上)小藩(一萬石以上)に分ち、府縣に知事を置き中央政府より之を任命し、藩は舊によりて其領主をして統治せしめたり。今中國に於ける藩別を示せば左の如し。

- 大藩 廣島
- 中藩 岡山・津山・鳥取・松江・福山・山口
- 小藩(縣下) 勝山・鶴田・淺尾・岡田・松山・新見・庭瀬・足守・成羽・鴨方

第二章 廢藩置縣

中國地方の八縣

第二三四節 明治四年廢藩置縣のこゝあり。中國地方に左の八縣を置く。

- 北條縣 美作
- 岡山縣 備前
- 深津縣 備中・備後ノ内 六郡
- 廣島縣 安藝・備後ノ内 八郡
- 山口縣 周防・長門
- 鳥取縣 因幡・伯耆・隱岐 (九年島根縣に併せられ、十四年再び鳥取縣を設く)
- 島根縣 出雲
- 濱田縣 石見(九年島根縣に合併)

明治五年六月、深津縣廳を備中笠岡に移して小田縣と改め、八年更に之を岡山縣に併せ、九年北條縣を岡山縣に、岡山縣所轄の備後六郡を廣島縣に併す。即ち今日の制なり。

の激戦に加はり、戦歿するもの六人を出せり。(忠烈遺芳)

第五章 明治十七年の海嘯と二十五六年の洪水(岡山縣)

明治十七年の海嘯

第二七節 明治十七年八月二十五日夜暴風あり、大海嘯起り、沿岸到る所の堤防を破壊し、家屋人畜流亡して饑餓に陥るの慘狀を呈せり。就中被害最も著るしきは、兒島郡福田新田五ヶ村、及淺口郡鶴新田・勇崎・乙島・小田郡笠岡・西濱・茂平等也。茲に於て縣令高崎五六は書を各郡に發し、窮民賑恤の爲め三萬圓の募集に着手す。而して本郡の被害大要左の如し。

- 家屋流失 八〇七戸(鶴新田村の二五を最す)
- 死亡者 九五(鶴新田の五〇を最す)
- 田畑塩田の荒地 八七一町
- 破壊船舶 三五九艘
- 受救人員 三七五〇人
- 流失家屋 五九

二十五年の洪水

明治二十五年七月二十三日暴風雨大洪水のため、縣下三大川氾濫して慘狀を極む。本郡の被害町村二十七を算す。

浸水家屋 二九四

二十六年の洪水

越つて二十六年十月十四日暴風雨大洪水は前年より一層猛威を逞うし、再び三大川氾濫し、其慘狀名狀すべからず。本郡にては、船穂村大字水江、一ノ口水門堤防、又串堤防を破壊し、長尾・乙島・玉島・池田・阿賀崎・占見等の諸村に氾濫し、瀦流一週日に及ぶ。而して高梁川の左岸は中洲村古水江堤防決潰のため、西阿知・河内・西浦龜島・連島等の諸村に氾濫し、河内村の如きは沈寢三十日に及べり。

- 溺死者 一七
- 流失家屋 七五四
- 半潰家屋 二六五
- 浸水家屋 五三〇〇

第六章 明治二十七八年戦役と北清事變

第二八節 日清役起るや出征者三百七十名、第五師團(歩兵第二十一聯隊)に屬し、成歡・牙山・平壤・蓋平等の各地に轉戦し、陣歿者二十五を算す。就中平壤包圍の正面攻撃して名高き船橋里の激戦に参加し戦死者四人を出せり。

明治三十三年北清事變起るや、廣島第五師團(歩兵第四十一聯隊)に屬し、出征者四百九十二人

船橋里戦死者
 二等卒 宗田壽吉(柏島)
 一等卒 笠原庄一(寄島)
 上等兵 鈴木惠三郎(同)
 一等卒 遠藤伊三郎
 (六條院中)

中、戦死者二十四を出せり。(忠烈遺芳)

第七章 明治三十七八年戦役

第一二九節 日露役起るや、陸海軍の出征者二千三十九人、第五師團(步兵第四十一聯隊)に屬し、遼陽(戦死) 沙河(戦死) 奉天(戦死) 黑溝臺(戦死) 大石橋(戦死) 等の各地に轉戦し、總數五十餘人の戦死者を出せり。(忠烈遺芳)

北清事變の重なる戦死者
陸軍工兵曹長 原田佐次郎(沙美)
上等兵 原田儀右衛門(柏島)
同 小幡榮太郎(玉島)
同 山本 虎一(寄島)
同 清水新吾(六條院)
同 藤原萬兵衛(里庄)
一等卒 木村葛次郎(富田)
同 西岡喜代平(黒崎)
同 頃末 與一(寄島)
同 馬場道太郎(里庄)
同 横山兼次郎(鴨方)
同 井上 軍平(同)
同 三宅五三郎(連島)
同 田邊利三郎(同)
同 三宅 芳助(同)

奉天大會戰

特務曹長 井上定三郎(金光)
曹長 遠藤志津太郎(六條院)
同 生實信次郎(里見)
伍長 野田定四郎(勇崎)
同 大橋 小助(下竹)
同 三宅辨次郎(長尾)
同 原田幸太郎(寄島)
上等兵 中野 朝一(乙島)
同 田口幸右衛門(占見)
同 仲江 末藏(道越)
同 田原 守惠(里見)
同 淺野 柁一(大島)
同 岡城 興吉(寄島)
同 唐井 政治(地頭下)
同 三宅幸太郎(連島)
一等卒 岡田 紋吉(六條院)

遼陽戰於ルケ戦

伍長 戸田富太郎(乙島)
同 仁科 多一(大島)
同 岡本要三郎(連島)
上等兵 戸田 貫一(乙島)
同 吉田才次郎(勇崎)
同 中川 龍吉(上成)
同 吉田 銀治(佐方)
同 中原 宅治(片島)
同 下村 敏雄(船越)
同 佐藤幾次郎(道越)
同 勝田壽太郎(鴨方)
同 清水駒次郎(大島)
同 村上與太郎(寄島)
同 西牧高次郎(占見)
一等卒 清水甚太郎(六條院)

二等卒 藤井豊太郎(大島)
同 佐藤 勝次(金光)
同 木山荒太郎(連島)
同 吉木 好造(同)
同 若狭 直次(黒崎)
同 甲谷政右衛門(同)
同 坂本 定吉(寄島)
同 田邊 虎藏(長尾)
同 松尾 林吉(河内)

死者

同 秋田 兼平(玉島)
同 松本順一郎(占見)
同 齋藤幸太郎(大島)
二等卒 廣瀬 長七(大島)
同 中務千鶴(占見)
同 中塚 幾三(乙島)
砲兵助卒 吉澤 美須(里見)

沙河戰於ルケ戦

曹長 加藤 徳次(新庄)
伍長 道廣瀧五郎(寄島)
同 上田常太郎(新庄)
上等兵 三宅利右衛門(西浦)
同 岡本清太郎(地頭下)
同 小野 新吉(長尾)
同 小野 序平(長尾)
同 田邊武四郎(長尾)
同 澤根 角一(道口)
同 滋口 靜太(須磨)
同 若狭 政市(黒崎村)
同 田中 雅市(寄島)
同 平井 強市(深田)
一等卒 高田武一郎(乙島)
同 守屋萬四郎(柳井原)
同 平井嘉平太(六條院)

第八章 現今の教育(第九八節)

一、學制頒布當時の教育

第一三二節 明治五年學制頒布に伴いて本郡内に創設せられたる學校數殆んど六十に達したれど、僅かに革新の緒に就きたるのみ。所謂啓蒙時代と稱すべきなり。然るに當時の施設劃一に過ぎて經濟事情に通ぜず不便多く、遂に明治十二年に至りて教育令の發布あり。之がため各町村は獨立或は聯合して一個若くは數個の小學校を設立することゝなれり。之が制に倣へるものは柏島・竹・大島・河内の四ヶ所なり(表解)

二、町村制施行當時の教育

第一三三節 明治二十二年憲法の發布あり。前年市町村制公布の結果、啓蒙時代に創設せられたる六十に近き小學校は二十六校に併合せられて基礎略定まり、且新に西浦・玉島・生石の三個の高等小學校の設立を見るに至る。(表解)

三、日清戦役後の教育

第一三四節 日清戦役後條約改正問題解決せられ、我國は一躍歐米の列強に加入す

るに至り、戦後教育の進歩亦偉大の發展を遂げ、明治三十五年頃迄には、金光町の外、郡内悉く高等科併置せられ、裁縫専修學校・實業補習學校の附設をも見るに至る。(表解参照)

(ロ)金光中學校起る
着眼一轉中等教育方面には、明治二十七年佐藤範雄の主唱に係る神道金光教會學問所の設立を見。三十一年金光中學校を改稱。翌年私立認可中學校となり、茲に中等教育機關を具備するに至れり。

四、日露戦役後の教育

(イ)小學教育の勃興
第一三四節 日露戦役後我國の教育大いに勃興し、下小學校より上大學に至るまで、各種の高等専門學校續々として建設せられしが、四十年には義務教育延長せられて六ヶ年となる。之がため本郡内の教育亦勃興し、教員及児童数の増加と共に學校の改築増築盛んに起り、同時に附設學校の隆興を見るに至る。(表解参照)
中等教育方面にありては、三十七年玉島高等小學校に新に女學校の附設せらるゝあり。四十一年鴨方に觀生女學校の起るありしが、四十四年何れも實科高等女學校を改稱せられ、茲に郡内中等女子教育機關整ひぬ。(大正五年玉島高等女學校を改稱) (同九年觀生高等女學校を改稱)

五、世界大戰亂後の教育

第一三五節 世界戦亂後、我國實業の大勃興と共に高等教育機關忽然として増加し、今や義務教育延長の機運に際し、本郡内にては附設實業補習學校の擴充を見るに至れり。(表解参照)

第九章 宗教

第一 佛 教 (第一〇六節参照)

第一三六節 佛教は維新の改革に際し寺領沒收せられ、さしも盛大なりし寺院俄かに衰頽に陥り、殘存せるもの八宗派、五十八寺を算ふ。今左に之を分類して各宗派の勢力を比較せん。(大正十二年末調)尙委しくは第二三三節を参照すべし。

天台宗(一)	福壽院 柏島	快長院 同上	本覺寺 同上	清瀧寺 玉島	圓乘院 乙島
泉勝院 占見	遙照山 同上	善城寺 須惠	大光院 方佐	寂光院 大谷	
龍城院 島寄	明王院 六條院中	圓珠院 六條院西	紫雲寺 六條院中	蓮花院 黒崎	
安養院 同上	本性院 沙美	海藏寺 浦南	常照院 乙島		

八宗五十八寺

天台宗の寺院

眞言宗の寺院

眞言宗(一)寶島寺連

聖蓮寺上

慈眼院上

阿彌陀堂上

廻向院上

寶隆寺上

西福寺上

正福寺上

圓光寺上

遍照院西阿

醫王寺上

法嚴寺片

寶滿寺船

高德寺上

雞德寺上

善昌寺尾

金剛院口

靈山寺見

不動院新

長川寺方

曹洞宗の寺院

曹洞宗(六)圓通寺柏

海德寺上

禪光寺竹

法林寺佐

長川寺方

永徳寺濱

梅雲寺上

潮音寺上

徳壽院上

興福寺上

臨濟宗の寺院

臨濟宗(六)地藏院島連

佛乘寺崎

法福寺上

妙立寺上

興福寺上

溪花院上

正傳寺方

淨光寺方

淨光寺方

淨光寺方

日蓮宗の寺院

日蓮宗(四)妙任寺片

眞宗(一)高運寺阿賀

眞宗(二)極樂寺西阿

眞宗(三)高運寺阿賀

眞宗(四)極樂寺西阿

眞宗の寺院

浄土宗の寺院

浄土宗(一)極樂寺西阿

浄土宗(二)極樂寺西阿

浄土宗(三)極樂寺西阿

浄土宗(四)極樂寺西阿

浄土宗(五)極樂寺西阿

第二 金光教

第一三七節

金光教は明治三十三年別派獨立せしより隆昌日に加はり、金光教本部大正十二年調に依れば、内地・臺灣・樺太・朝鮮・滿洲・支那に亘りて布教所八百三十

教師數一千八百、教徒信徒數六十七萬を算す。而して全國中最も信者の多き地方を擧ぐれば左の如し。(第三二節 照)

九州地方	福岡(一四萬)	大分(八萬)	長崎(二萬)
四國地方	愛媛(一〇萬)	香川(七萬)	
中國地方	岡山(一九萬)	廣島(一一萬)	山口(八萬)
近畿地方	大阪(一六萬)	京都(一〇萬)	兵庫(一六萬)
中部地方	愛知(八萬)	靜岡(七萬)	
關東地方	東京(八萬)		

地
理
門

世 野 門

例 言

- 一、本門は歴史門と共に全卷の樞軸にして、之を自然、人文の二編に分ち、系統的に分類し、兩者の關係を明らかにらしめんことに最も意を注ぎたり。
- 一、本門は我郷土を中心として四隣に着眼し、全國に及び、更に世界に及べることもあり。是れ郷土と對照して我が郡村の實相を明らかならしめんために外ならず。
- 一、自然地理の部は、編者一人の手に成りしものにて、その地質構造の如き相當の注意を拂ひたり。
- 一、人文地理の部は、元多數の人の手により調査せられ千差萬別なりしを、六十餘種の統計圖に改作して本

編の骨子とし、以て一目瞭然たらしめんことを期せり。

大正十三年八月

玉島元標より
の里程

岡山	八里
丸龜	一〇里
高梁	八里
矢掛	三里
姫路	三〇里
神戸	四一里
大阪	五三里
京都	六六里
東京	二〇〇里
福山	九里
尾道	一五里
廣島	三六里
下關	八〇里
長崎	一四三里

地理門

前編 自然地理 (原田虎平識)

第一章 位置及境域

第一三八節 本郡は岡山縣の南部海岸に位し、北は遙照山脈を以て吉備小田の二郡に接し、東は高梁川によりて都窪兒島の二郡に聯り、南は水島灘を隔て、香川縣那珂郡と相對し西は阿部山の支脈によりて小田郡に隣れり。而して、東部都窪郡の中洲村が高梁川を越えて西に突入せる外隣郡の自然境界と政治境界とは大抵一致せり。

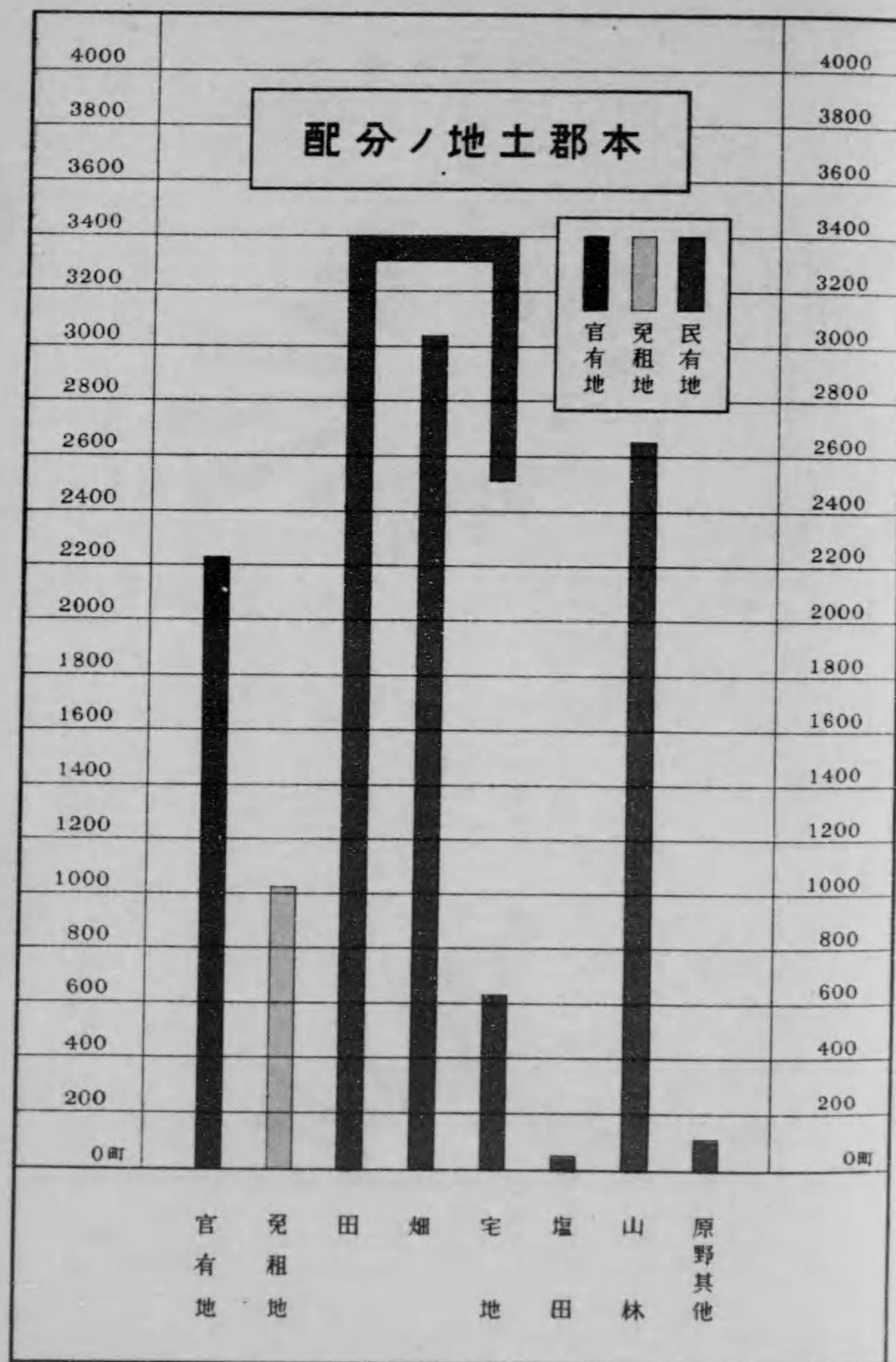
極東 東經百三十三度三十四分 (連島町)

極西 東經百三十三度四十六分 (里庄村大字濱中)

極南 北緯三十四度二十九分 (黒崎村所屬、大柄杓島)

極北 北緯三十四度三十九分 (船櫃村大字柳井原)

本郡が備中の南門として瀬戸内海を制し、本土四國聯絡上の一地點を占むるに共に

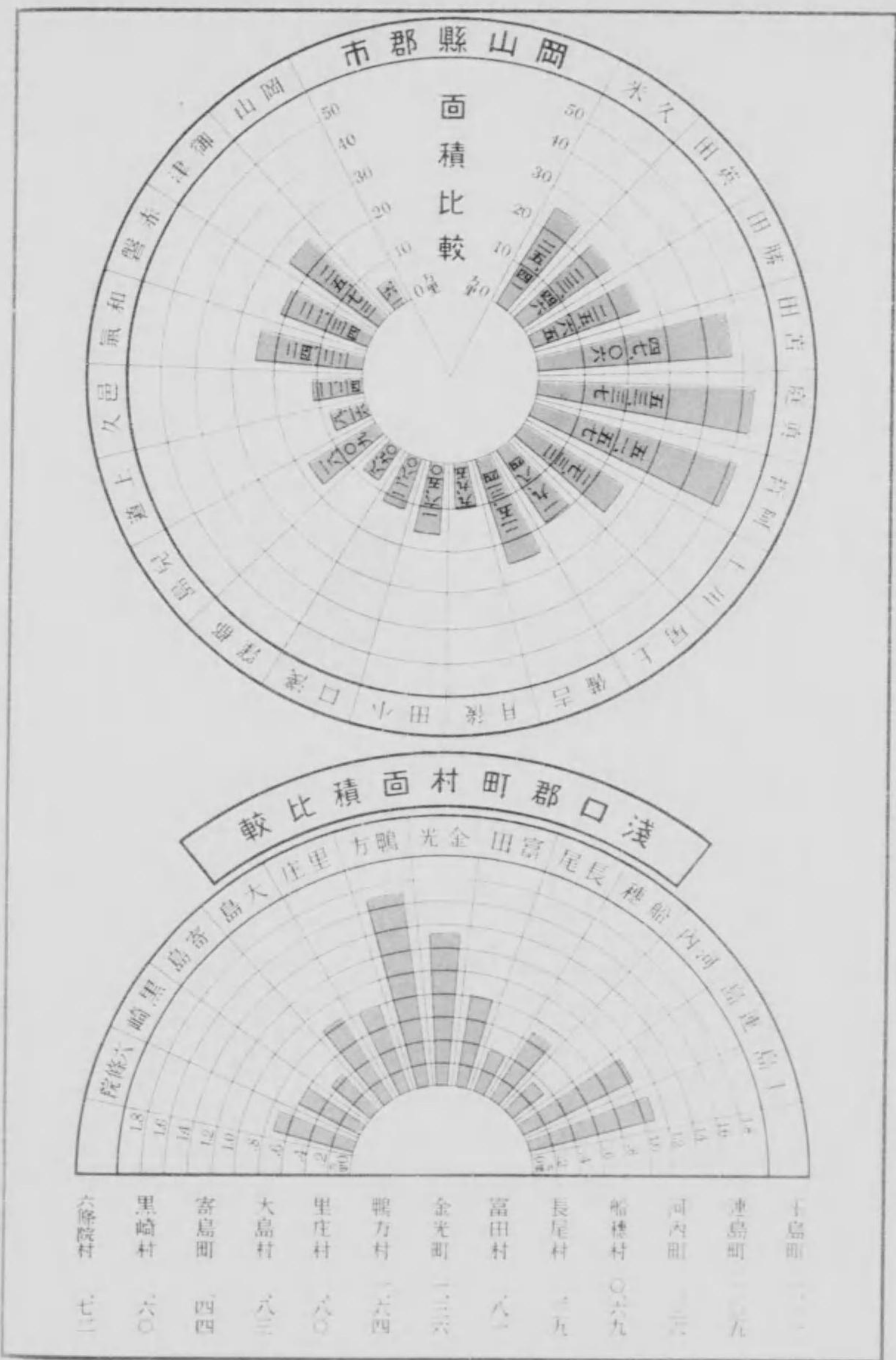


第二章 面積

第一三九節 本郡の面積は十二方里弱にして、一市十九郡中の第十五位を占め、縣下總面積の四十分の一を有し、最小なる岡山市の二倍、最大なる真庭郡の五分の一に當る。而して郡内に於て最大なるは船穂村、鴨方村にして、最小なるは河内村、長尾村なり。

郡名	面積 (方里)	東西の直徑 (里)	南北の直徑 (里)
全國面積	四三〇〇	四里三十一町	三里十五町
本縣面積	四五五	四里	三里十五町
備前	一〇九	二里餘	二里餘
備中	一七一		
美作	一七五		
淡路郡	一一		

高梁川の河口を支配せるあり。就中北海道、本州、九州及朝鮮を縦貫せる鐵道幹線は、郡の中央を貫通せるが故に、文明の機關を利用して商業の中心地ニ氣脈を通じ、本縣南部の交通産業の實權を握り得べく、今や、本郡が人文の發達地にして、縣下に冠たる所以のもの偶然にあらざるべし。



第三章 地勢

第一山誌

一、海岸山脈

總説

第一四〇節 總説 昔時、海中の島嶼たりしものにして東西に脈を延けり。而して粘板岩又は變質砂岩より成りて削磨作用を受くること少なきものは、御嶽山・青佐山・鉢山の如く、樹木繁茂して嵒然頭角を現はせるに反し、花崗岩質より成るものは、注古に測れば險峻なる火山脈をなしたらんも、激甚なる削磨作用は相貌をして、しかく一變せしめ、寄島龍王・佐方龍王の如く、僅かに急峻繩嶽たるものを存せり。總じて、花崗岩質より成る所は樹木の生育に適せず、禿山となり、雨水のために淋漓するに能はずして、忽ち川を漲らして水蝕を大ならしむ。然れども、白砂青松は内海の碧波と相映じて、一幅の活畫圖たるは、海岸山脈の一大特色たり。

西部主軸山脈

第一四一節 西部主軸山脈 西より東するに従ひて峻夷し其主軸、西は小田郡神島山脈より起り、御嶽山(三三二〇米)、四尋山(大島富士と呼ぶ、二三三〇米)、青佐山(二五〇米)、鉢山(二四〇米)、茶臼山(一九〇米)、(以上第一四一節参照)毛能無羅山(本郡第一の禿山、二〇六米)、寄島龍王山(二九〇米)、

- 御嶽山
- 御嶽登山路
- (1) 石砂より十六町
 - (2) 鳥ノ江海岸より十三町
 - (3) 正頭より十一町
 - (4) 大島中竹田經由十四町

泉山(二二〇米)、佐方龍王山(二三〇米)等を崛起し、山勢險峻なり。中には、御嶽は海岸山脈中の最高峯たり。而して此山脈は東は柏島乙島連島等の山脈に連接して、其脈遠く兒島の山脈に連れり。

- 一、御嶽山、大島村の西南方に聳ゆ、海岸山脈中の高峯たり。全山殆ど粘板岩より成る。西方、



— 御嶽山幽谷 —

二、四尋山(大島富士)御嶽山の北方に峙つ。海岸より眺むれば、其形富士に似たり、故に此稱あり。本郡の山脈中、最も噴出火山の特色を發揮せり。(全山、石英粗)

三、青佐山、寄島町の西南端に峙つ。山脈海岸に迫りて直立絶壁なる。全山花崗岩に變質砂岩より成る。樹木繁茂して頂上に城址あり。(第四一節、第四五節、第三九六節、參照)

四、鉢山、青佐山の北方に峙つ、其支脈東南に延びて尾焼山となる。山形鉢狀をなし、地質、青佐山に同じ。樹木繁茂して眺望に乏し。寄島町方面より登るを便す。(往復、約一時間)

五、毛能無羅山(毛野浦山)里庄村新庄に屹立し、全山禿山にして花崗岩質の好相貌を備ふ。山の東南麓より忍石を産す。

六、茶臼山、大島村、里庄村に跨りて、全山粘板岩より成る。樹木繁茂して、頂上に城址あり。(第四一節、參照)大内義隆の臣、大内攝津守の守りし所云ふ。東麓に孝子、下原甚介の墓あり。南方柴木の西端、東光坊より唯一の登山路あるのみ。(往復、約四十分)

七、寄島龍王山、寄島町に六條院村との境界に峙つ、頂上の城址は細川通董の據

青佐山

鉢山

毛能無羅山

茶臼山

寄島龍王山

りし所云ふ。(第四五節参照)西南及西麓に福井山及圓珠院あり。舊幕時代は老樹鬱蒼たりしが、維新の政變のため、濫伐せらる。近年、保安林となりて稍面目を改む。支脈南に延びて、鳴瀧山名く。南麓に不動瀧あり。六條院西圓珠院の境内より登るを最も便す。頂上の眺望亦佳絶なり。(往復、約一時間半)

八、泉山(城山) 六條院中にあり。山嶺は平坦なり。頂上の城址は細川通董の據りし所と傳ふ。

佐方龍王山

九、佐方龍王山 金光町と黒崎村との境界に峙つ。海岸山脈中、御嶽山に亞ぐ高峯たり。山上に城址あり。(第二八節参照)北口は佐方より、南口は沙美より登山路あり。(往復、約一時間半)

中部丘陵地

第一四二節 中部丘陵地、柏島及乙島は丘陵地と稱すべく、全山の大半開拓せられて道路蜘蛛網の如く縦横に貫通し、山相殆んご滅却せり。而して、丘陵地中、名あるを白華山(九八米)、八幡山(一九九米)、養父ヶ鼻(四五米)、宮高山(五五米)とす。其他城址を存する丘阜諸所にあり。

白華山

白華山(圓通寺山) 中部丘陵地中の最高峯たり。山上に巨利あり、圓通寺と云ふ奇岩に依る庭園の風致、眺望の絶景を以て知らる。(第三一節参照)

八幡山

八幡山 玉島灣口にあり。全山、老松矮樹を以て蔽はる。山上に柏島神社あり。亦眺瞩絶佳たるを失はず。(第三二節参照)

養父ヶ鼻

養父ヶ鼻 玉島灣口に在り。八幡山と相對せり。山上に戸島神社あり。圓通寺・八幡山と共に眺望を以て知らる。(第三三節参照)

東部連島山脈

第一四三節 東部連島山脈、其規模大にして東西一里餘に連亘し、大平山(一六二米)を主峯とす。數條の道路南北を貫通し、南麓に寶島寺・笠取神社あり。人家亦茲に集れり。山脈の南に串山(四七米)(第一四七節参照)、龜島山(九一米の)孤山あり。

一、海岸山脈の人文上に及せる影響

居住上

第一四四節 居住上、郡内の人家稠密せる村邑は、悉く山脈の南麓に集れり。蓋し、海岸山脈は東西に蜿蜒せるが故に、南側は夏時、海陸風のために涼しく、冬は朔風を遮ぎつて温く、土地乾燥して霜を見ること稀なり。然かも、眺望佳絶、四圍の風色、人をして自から心氣を爽快ならしむ。是に於てか、寄島・安倉・小原・黒崎・勇崎・阿賀崎・玉島・連島なご、人家最も稠密し、且人口の増加率、盛んなること郡中に冠たり。産業上、特種農産物の生育を速かならしむ。蓋し、山脈の南は冬季温暖にして土地乾

産業上

人質上

燥し、地味亦粗鬆なる花崗岩質より成れるが故に、麥・除蟲菊・甘藷等の特種農産物の生育發達を速かならしむ。人質上、人質風貌を一變せしむ。蓋し海岸山脈中、特に西部主軸山脈の南側は傾斜急にして海に迫り、土地乾燥して地味亦荒蕪なるが故に、農耕に勞力を費すこと著るしく、且風浪の音高き海岸、又は海上生活を續け居るが故に、民情自から剛勇活潑、輕快の風貌を帯びしむるものあるに反し、山脈の北側は濕潤にして人力を費すこと少なく、四圍の光景亦靜穩にして、民情自から悠長、不活潑にして、質實鈍重ならしむ。

統治上

統治上、行政自治の發達を阻害すること著し。蓋し、海岸山脈中、西部主軸山脈は幾多の支脈分岐して、或は海に迫るあり。其間に封建的割據の小村落を形成して交通を遮斷し、自から民情風俗生業を異ならしめ、以て動もすれば、村治の統一發達を阻害するに至る。

三、遙照阿部山脈

第一四五節

遙照阿部山脈は郡の北境及西境に横はれる山脈一帯の總稱にして、其支脈東は彌高山より、西は遠く小田郡今井村に至るまで延長數里に亘る。就中、遙

遙照山

照山阿部山の八合目以上は新火成岩(石英粗面岩)噴出のために樹木繁茂し、山勢亦高峻雄大にして、阿部山(三九八米)の如きは頂上に千町ヶ原と稱する不毛の曠野横はれり。遙照山(四〇五米)は、備中南部の高峯にして、木郡第一の高山たり。彌高山(三〇七米吉)、竹林寺山(市平山)(三八一米)、小阪龍王山(千龍山)(二九一米)虚空藏山(二六二米)、鸞尾山(龍王山)等は支脈中の高峯たり。

遙照山、養子山又は曜星山とも云へり。頂上に嚴連寺の古刹あり。(第三三三節)附近にラヂウム鑛泉湧出す。山の西南麓、鴨方村字木庄及東南麓、富田村字北川にも同様の鑛泉湧出するを見る。(第一五三節、參照)登山口は東西南北數所あり。北方矢掛口よりするものは阪路急峻なれき、南方占見口は之に反して登山に便なり。(金光驛より往復約二時間程)

阿部山

阿部山、杉谷口より登るを便す。(日原口より登るを得)山腹に千町原と稱する草原あり、建武の古戦場地と云ひ傳ふれき信じ難し。頂上に小祠あり。老樹疎生し小田川を俯瞰し眺望佳なり。それより東北方、數町の山頂に阿部晴明屋敷と稱する遺趾ありて亦小祠あり。(杉谷より往復約二時間)

竹林寺山

竹林寺山、鴨方村字本庄より登るを便す。頂上に荒廢せる佛跡あり。老樹茂生し展望の眺め良し。(往復約二時間)

虚空藏山

虚空藏山 大原の西北に峙立せり。山頂を少し下りたる所に巨岩重疊し内に虚空藏を祠る。全山松樹繁茂し頂上より眺望佳なり。大原の西部より登山路あり。

四、遙照阿部山脈の人文上に及せる影響

鑛業上

第一四六節 鑛業上 本郡數多の有望なる鑛山、又はラヂウム鑛泉の湧出せるもの、悉く遙照阿部山脈中にあり。(第一五三節末項及第二三七節参照)

工業上

工業上 本郡山脈は水源漸養に乏し。従つて水力を利用するに足るべきものなし。唯杉谷に於ける素麵及饅飩の製造は溪川水車によりて起れる唯一の工業たり。

第二地質

一、總説

岡山縣地質の特色と、淺口郡地質の特色
岩石種類と分布の大小

第一四七節 岡山縣下に最も廣く分布せる地質は、舊火成岩に屬する花崗岩(全面積の三分一)、及水成岩に屬する古成層(全面積の三分一)にして、本郡を構成せる地質の平野は沖積層にして、山地は三様に分る。即ち山地の過半を占むるものは花崗岩にして、之に亞ぐは粘板岩(又は砂岩)なり。又石英粗面岩の噴出各所に點々せり。就中連島町串山全部が一種

郡内珍すべき岩石

の安山岩より成れるは、本郡の地質中、最も珍すべきなり。

串山 串山岩石の研究 岡山第六高等學校教授八木正衛の研究によれば、一見安山岩に似て其實橄欖石を含めるものにして、地方珍らしき岩石なりと云ふ。

二、生成の年代に依る本郡の地質(卷頭地質圖参照)

第一四八節 本郡の地質を生成の年代によりて區分せば左の如し。

一、水成岩(古生代)

一、水成岩より成る地方

- (イ) 粘板岩 柳井原地方・御嶽山・宗國附近より茶臼山に至る一脈の連山。
- (ロ) 砂岩又は變質砂岩 青佐山の大部、鉢山及其東北隣の山嶺は砂岩より成る。新舊火成岩噴出のために、古生層の水成岩が接觸變質を受けて變質砂岩を形成し、山腹の凹所に轉々せるものは、風化のため表皮は灰色又は茶褐色を呈し、内部は含有鐵分の量に従ひて暗赤色・黒色・暗綠色等を帶ぶ。

同上(新生代) 洪積層(金光町大谷、六條院村宮道、長尾)、沖積層(新開地)あり。

二、火成岩

二、火成岩より成る地方

- (イ) 花崗岩 舊火成岩に屬する花崗岩は郡内山地の過半部を占む。而して、現に建築材として良材を出せるは、道口・占見・鴨方驛附近・及杉谷等の數ヶ所にて、

又寄島町字鏡には緻密の石材を産す。

(ロ) 石英粗面岩 花崗岩に接觸して、新火成岩なる石英粗面岩の噴出せる所は、遙照山及日原以北阿部山の八合目以上、西大島なる四尋山の全部、寄島町早崎海岸の一部、富田村龜山一帯に亘る。

而して、水成岩と火成岩、或は新舊火成岩の接觸部及其附近には有望の脈蘊宿るこゝあり。(第一五三節 照)

(ハ) 安山岩の一種 連島町串山全部。

三、本郡地質が産業上に及せる影響

農業上

第一四九節 農業上 花崗岩土質は排水良好にして、旱害に罹り易き恐れある代りに、乾燥すとも粘土質の如く地割少なく、土中に水分を停滞する憂なく、酸素の供給充分にして稻の生育に適し、生産検査の一等合格米を産出す、石英粗面岩及粘板岩の耕土は花崗岩に近く中の上位にあり。今産米の検査成績上、本郡の位置を示せば次の如し。(大正五年調)

赤磐	英田	邑久	和氣	上道	上房	勝田	吉備	浅口	都窪	小田	岡山	後月
九二、九	九〇、三	八八、七	八七、七	八六、九	八六、八	八六、七	八五、八	八五、一	八一、六	七八、四	七八、二	七七、五
久米	苦田	御津	兒島	川上	眞庭	阿哲						
七〇、〇	六五、一	六五、〇	六四、〇	六三、六	五五、〇	三八、九						

本郡の中鴨方・六條院・里庄・大島・金光町の内上竹・富田村の内富の如きは優良品種を産し、九〇パーセント以上の合格歩合を有せるに反し、其他は往時海底地たりし關係上、土地低くして排水充分ならず。河内連島乙島長尾富田(粘土)の如きありて質を低下し、遂に第九位を占むるに至れるなり。二毛作田の多寡は、地質のみならず、排水設備、氣候の寒暖に關係するこゝ大なる

が、本縣統計によりて二毛作水田と水田總反別との割合は左の如し。

郡市	水田百ニ對スル二毛作田
1 兒島	九〇
2 和氣	八九
3 岡山	八七
4 淺口	八五
5 邑久	八四
6 都窪	七九
7 吉備	七四
8 上道	七三
9 赤磐	六九
10 小田	六六
11 御津	六四
郡市	水田百ニ對スル二毛作田
12 後月	六一
13 英田	五六
14 勝田	五四
15 上房	四〇
16 眞庭	三九
17 苦田	三八
18 久米	三二
19 川上	二九
20 阿哲	二九

即ち我が淺口郡は第四位を占む。而して、本郡の如き花崗岩より成る土壤は、肥料吸収力強く、殊に磷酸分を吸収保存する力強きに反し、有機物に乏しく、窒素少なきが故に有機物を施し、厩肥、堆肥等、分解遅々として絶えず窒素分を供給する如き肥料を施す必要あり。

林業上

第一五〇節 林業上、花崗岩、變質砂岩、粘板岩、石英粗面岩により代表せらる、土

工業上

質は林相の面目を一變し、林地の等級を支配するあるを見る。即ち本郡大島村、全体の山は相當の林相を保てるに反し、其北方なる新庄、濱中には、本郡一の毛能無羅の禿山あり。安倉南浦沙美海岸の山亦然り。而して、遙照阿部山一帯の中腹以上に樹木繁茂せるは、石英粗面岩によりて成るが故なり。又本郡が薪炭の供給を備中北部、又は四國地方より仰ける原因の一は、水成岩の古生層より成る山地に乏しきが爲めなり。元來松は花崗岩の瘠地を好み、且つ極端に日光を要求する陽樹なるが故に、郡内の全山殆んご松樹を以て蔽はるるもの偶然にあらざるなり。

第一五一節 工業上、酒造業、本郡の地質、優良酒は杜氏の技術、其土地の氣候に左右せらるるは勿論米質水質酒桶の材質に密接の關係あり。就中酒造家が如何に水を重要視するかは兵庫縣御影町の酒造家が其用水を遠く四里餘の西宮より船にて運搬せるにても知るべし。而して、優良なる水質は花崗岩の砂層を通過せる所にある。本郡が灘酒に劣らざる良酒を産する原因の一は水質にあり。

建築用材、土工及建築用として良好なる石材は花崗岩にして、大体の生地白く薄黒き雲母の斑點を有するを最も貴しむ。明治神宮の御用材たる小田郡北木島の花崗岩は是なり。本郡中、運搬便にして此種の良材を出せる所は、道口占見鴨方驛附近及杉谷の數ヶ所にして、最も緻密にして石塔材に適する良質は、寄島町鏡に産す。

岩質稍疎なるは、本郡の山地到る所に散在せり。

第一二五節 窯業材料、煉瓦・瓦・土器・焼物類の原料たる粘土中、本部にて有名なるは第四紀沖積層の下部に炭酸カルシウムを混じ、泥炭となりて低地より採掘せる、備中の特産大原焼の原料にして、製造戸數三十六、精巧品を出せるもの二戸、年産額三萬圓に達せるを最とし、又別に鴨方村里庄村金光町黒崎村六條院村よりは瓦を産せるが、其原料は大原焼と同じ。

第一五三節 鑛業上、噴出年代を異にする岩石と岩石との接觸部には、有望の鑛脈宿るこゝあるは前述の如し。遙照山・阿部山・御嶽山等は花崗岩と石英粗面岩乃至變質砂岩と接觸せり。是等の接觸部より鑛石の發掘或は鑛泉の湧出せる所をあぐれば左表の如し。

位置	名 稱	鑛石種類	地 質	概 要	發掘年代
玉島	鑛山	銅	石英粗面岩	富田村字富崎、矢掛街道ニ沿ヘル東數町ノ所ニ在リ。山相、地質、含有量等、鑛山トシテ郡内ニ冠タリ。發掘規模亦大ナリ。	明治四、五年頃
瓜崎	炭鑛	石炭		富田村字北川ト長尾村字瓜崎トノ村境ニ在リ。炭質惡シク、寧ろ褐炭ニ近シ。炭層一尺餘中廣シ。附近一帯ハ水田ナリ。	明治四、五年頃

山嶽御	阿 部 山 脈			照 山 脈		
	金掘鑛山	杉谷鑛山	地頭鑛山	松井谷鑛山	柳井原	船穂鑛山
鳥ノ江鑛山	虚空藏山	金掘鑛山	杉谷鑛山	地頭鑛山	松井谷鑛山	柳井原
銅	水晶	銅	銅	銅	銅	銅
粘板岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	秩父古生層
大島村、御嶽山ノ西側中腹、鳥ノ江ニアリ。鑛山トシテノ名稱ヲ附スル價値ナシ。	虚空藏山、山嶽ニ露出セリ。	鴨方村、杉谷街道ノ西側山腹ニアリ。僅カニ鑛山トシテノ資格ヲ備フ。	鴨方村、東小坂、杉谷ノ街道、川ニ沿ヘル東側ニ在リ。稍鑛山トシテノ規模ヲ備フ。	鴨方村、益坂ノ東隅、地頭上ニ在リ。僅ニ鑛山トシテノ資格ヲ備フルノミ。	鴨方村、地頭下、松井谷ノ中腹ニアレド、鑛山トシテノ名稱ヲ附スル程ノ價値ナシ。	柳井原ノ山腹、池沼中ニ露出セリ。炭層二尺餘ニシテ、炭質優良ナレド、未ダ發掘スルニ至ラズ。
大正五年					大正五年	未探掘

泉		鑛	
名	稱	概	要
本庄ラヂウム鑛泉	北川鑛泉	遙照山嶺ヨリ湧出セリ。浴客常ニ絶エズ。	遙照山麓、富田村字北川ノ水田中ヨリ湧出セリ。嘗テ浴場ノ設備アリシモ、今ハ廢絶シテ冷泉ノ出ヅルアルノミ。
		鴨方村字本庄ノ水田池中ヨリ湧出セリ。微温ナリ、入浴ノ設備アレドモ盛ンナラズ。	

第三水誌

一、本郡河川と池沼との關係

本郡河川の特色

第一五四節 瀬戸内海に面せる中國筋に於て、地形上最も人目を惹くものを禿山といふ。天井川に於て、本郡の如きは最も其特色を發揮して、常に吾人の生活を脅かせり。是等の天井川は、平時は禿山のため水源涸渇して小砂河床に堆積せるも、一朝豪雨至

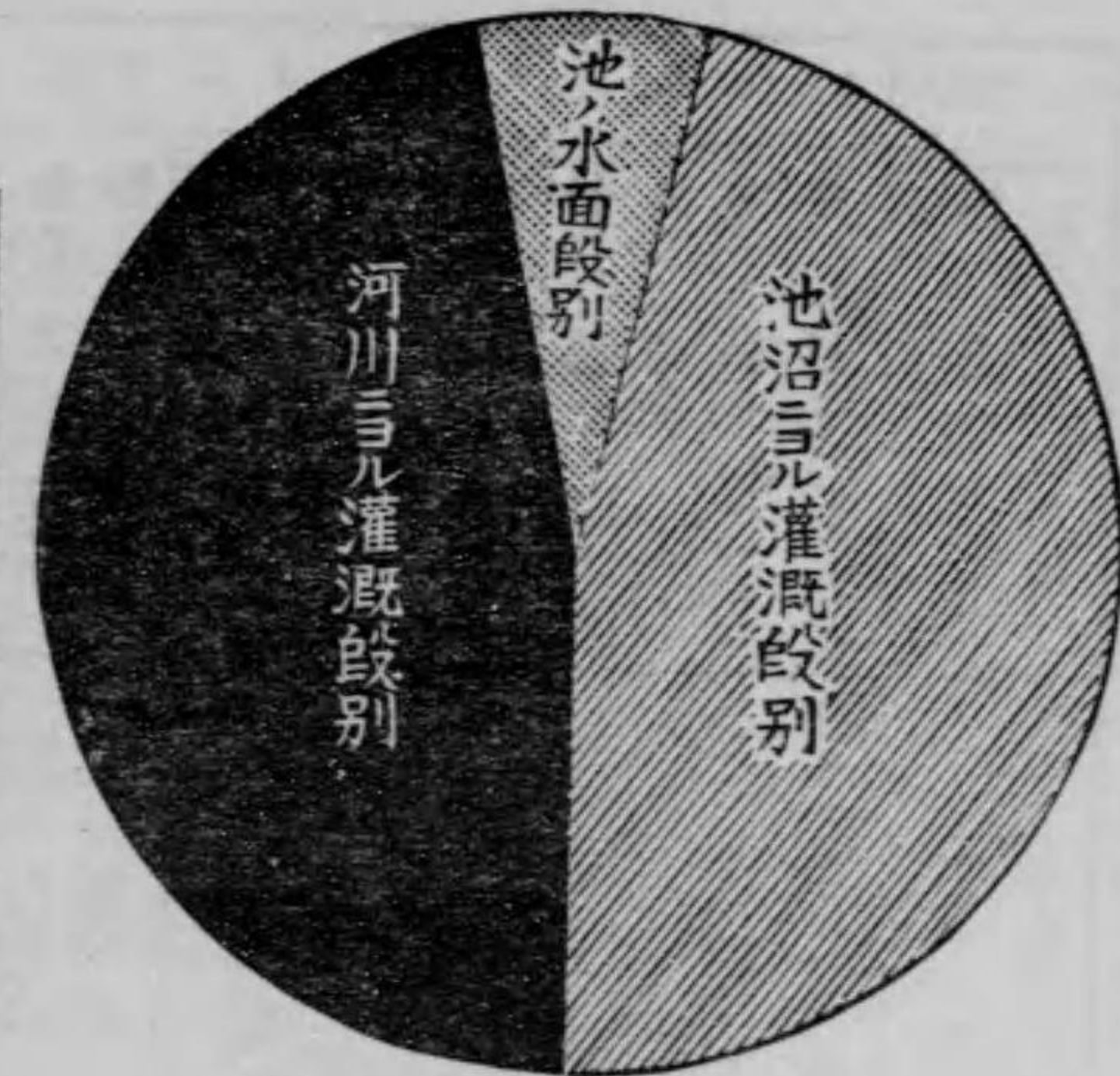
池沼面積は總水田面積の百分の六を占む

らば忽ち濁水奔溢し、堤防を決潰して被害を及ぼすこと少からず。而して、郡内幾多の河川中、灌溉の利あるは唯高梁川鴨方川及大島川のみ。爾餘の天井川は平時涸渇せるが故に、無慮壹千貳百四拾有餘の大小貯水池を設け、辛うじて灌溉の缺を補へり。是等貯水池の水面總段別は貳百七拾町歩に達し、總田面積の百分の六を占む。今各村に於ける池の數及灌溉田段別を表示せば左の如し。

注意 柳井原貯水池水面反別百三十町、灌溉總面積六千五百八十一町歩なれど特殊の池なれば本表中より除外せり

町村名	池沼數	池の水面段別	池沼ニ依ル灌溉段別	河川ニ依ル灌溉段別	灌溉田地總段別
金方光	三三〇	六五〇町	五四五、九	一一、五	五四五、九
鴨田	一七六	四七、五	三九〇、五		四〇二、〇
富田	一〇九	四二、一	四〇八、六		四〇八、六
里庄	一一三	三九、五	二九一、三		二九一、三
六條院	二〇二	二六、六	一一四、四		二一四、四
大島	一〇九	一五、五	一五三、一		一五三、一
玉島	五二	一三、六	九八、七		五七八、五
船總	八五	六、五	五六、七		三二七、七
黒崎	一七	六、三	五七、六		五七、六
寄島	三〇	四、六	四二、九		四二、九
長尾	八	一、六	一六、七		二四五、七
河内	九	五	五、七		三二七、七
連島	九	五	五、七		六四七、〇
計	二二四一	二六五、三	二二八二、一		一九五、六

池沼反別は灌漑反別の十六分の一に當る



即ち池沼水面段別は灌漑總段別の約十六分の一に當るを見る。然かも我國近年淡水漁業發達して、漁利頗る見るべきものあるに拘らず、數多の池沼が單に灌漑用以外、之が利用法に就きて組織的研究の講ぜられざるは最も惜しむべきことなり。
今参考のため、主要池沼をあぐれば左の如し。

金

道古中八幸道新樹	道木下池	地頭木	同方	佐方	同方	占見	地頭下	占見
一、五	一、六	二、〇	二、一	二、一	二、五	二、七	八、五	八、四

方 鴨

新仁大平新下熊天	新井池	大石池	深坂池	小坂池	惣良池	木庄池	鴨方池
同	同	同	同	同	同	同	同
一、〇	一、一	一、二	一、五	一、六	一、七	一、八	一、四

町 光

胎藻新宮辨新加花阿竹藏橫小	胎金池	藻池	新池	宮池	辨池	新池	加池	花池	阿池	竹池	藏池	橫池	小池
須夕上占夕佐占須同下上大佐占	須池	夕池	上池	占池	夕池	佐池	占池	須池	同池	下池	大池	上池	大池
〇、七	〇、八	〇、八	〇、九	〇、九	〇、九	一、一	一、二	一、二	一、二	一、二	一、三	一、四	一、四

村 川 富

八竹谷阿增大	八頭池	竹下池	谷底池	阿原池	增原池	大木池
池同道道道池	池	池	池	池	池	池
〇、九	〇、八	〇、八	三、二	一、三	一、四	一、四

村

梅太大藤	梅木池	太田池	大田池	藤波池
杉木指益	池	池	池	池
〇、八	〇、九	〇、九	一、〇	一、〇

村 庄 里

新高河平新迫大長廣湯	新柳池	高骨池	河下池	平田池	新田池	迫田池	大田池	長田池	廣田池	湯ノ池
高大池	大池	平池	濱池	總池	岩里池	占見口	占見口	占見口	占見口	占見口
〇、八	〇、八	〇、八	一、三	一、四	一、六	一、七	一、七	一、七	一、七	一、八

町 島 玉

中耕岡大梶新	中津池	耕地池	岡田池	大田池	梶池	新池
五宮畑乙同勇	池	池	池	池	池	池
〇、六	〇、八	一、二	一、四	一、四	一、四	四、〇

第一五五節

明治維新の政變に當りて林政弛廢し、民心亦世運の變化の著るしきた

二、天井川

町島寄	村穂船	村院條六	村島大	村崎黒
尾焼池 新池	貯水池 屋養池 田ノ内池	吉池 鷺池 連台池 佛堂池 龍王池 正原内池 中田池 二子池	阿正谷上池 同下池	深田下池 大池 深田上池 十里池
簡市 福井西平	柳井原 同穂	森迫 日暮 東 中 西 生 生 同	一町反 一、六〇	小屋原 小屋原 守原 守原
一町反 〇、八	一三〇町反 〇、六 〇、六	三町反 二、七〇 一、九 一、五 一、五 一、〇 一、〇 〇、八	一町反 一、六〇	一町反 一、一 〇、九 〇、五

今立川

里見川

めに森林の將來を顧みるものなく、その濫伐各所に起りて、山林荒廢の極、緒土暴露して一雨毎に土砂河底に埋積し、河床隆起して所謂天井川となり、水災年を逐うて臻り、明治十三年、及廿六年に於ける高梁川洪水の如き、縣民をして慄然たらしめしが、爾來民心漸く緊張し來りて、輒近水源山地の天然林を保護するに共には砂防の設備をなし、且人工植林をなしたる結果、現時は河床漸次低下しつつあれば、終には過度の低下のために、河床及河岸に却つて堤防工事を施さざるべからざるのみならず、從來の用水取入口を上流に移動せざるべからざるに共、上流地附近の田地は旱害に罹り易く、下流地方は水量益々潤澤となりて旱害を招くこと減少するに至らん。今左に天井川の主なるものを述べん。

今立川 本郡第一の天井川たる特色を發揮し、河床高く豪雨至らば忽ち氾濫して毫も灌漑に便なし、其源を小田郡今井村に發し、小田淺口兩郡を界し、新庄川を合せて神島海峡に注ぐ。

里見川 近年まで河床隆起して天井川たりしが、水源山地の保護に共に河床漸次低下しつつありしが、更に大正十一年御影橋下流の一部を一直線に改修して河幅を擴けしため、上流の河床一層低下の度を加へ、却つて河岸堤防工事を施さざるべからざる現象を呈し、今や天井川の面目を失はんとするに至れり。而して、其源を里庄

竹川
道口川

村虚空藏山に發し、阿部遙照山脈、及海岸山脈より來れる幾多の溪川支流を併せ、郡の中部盆地を東西に貫通して玉島灣に注ぐ。延長約三里半にして高梁川に亞ぐ本郡第二の長流なれど、平時涸渇して灌溉の利乏しく、僅かに支流鴨方川が溪川水力の利用あるのみ、支流の主なるものを鴨方川竹川道口川等とす。
竹川、上竹の西北遙照山脈より發し、富田村の西境を流れて里見川に合す。
道口川、富田村字富の山間より發し、玉島町に至りて里見川に合す。延長一里餘灌溉の利なし。

三、灌溉川

第一五六節 本郡幾多の小川が殆んそ其源を花崗岩層より發せるため、天井川となりて毫も灌溉の利なきに反し、鴨方川と大島川とのみは河川の面目を發揮し、稍水利の便を有するものあるは、全く水源地の地質他と異なるものあるを以てなり。左に其主なるものを述べん。

高梁川 一に川邊川とも云ふ。昔時は川島川と稱せり、延長二十九里の流域を灌溉し、河口より上流十九里の間高瀬舟を通ず、下流は柳井原に至りて東西二流に分岐し、東流は郡の東境をなして龜島の東に至りて海に入り、西流は乙島の東に至りて

高梁川

霞橋改築工費四拾
萬圓大正十六年完
成の豫定

海に入る。輒近河川改修のため、東流は廢川となりて僅に其佛を存し、西流は改修擴張せられ、河口の幅七百間に達し、霞橋(三百二)の如き中國屈指の長橋たるに至れり。柳井原附近の河岸、山迫りて斷崖をなし、河流激して獅子が淵と稱する所あり。兩岸の山、水に映じて山水の絶勝、郡内に冠たり。而して別に河内惡水川、高梁川と東西組用水、高瀬通と稱する溝渠を開鑿して灌溉に便せるを以て、下流に於ける灌溉區域は東は都窪郡より、西は道口川以東の本郡沃野の一半に及び、實に備中南部をして富源の中樞たらしむるのみならず、主なる都邑は殆んそ、其の流域に發生し、旭吉井の二大川と共に本縣文化の樞軸たり。

柳井原獅子淵の景



河内惡水川

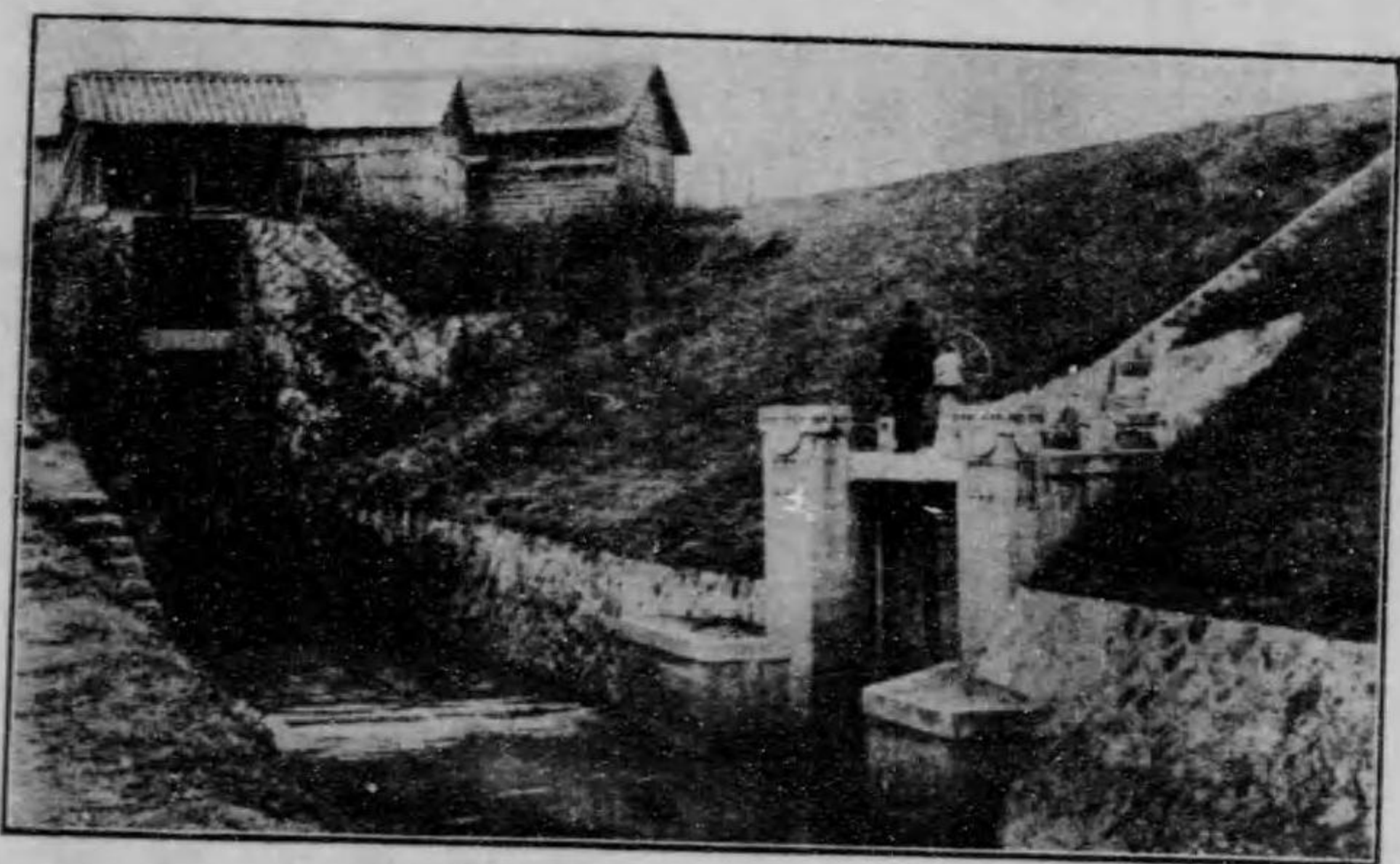
高梁川東西組合用
水

河内、惡水川、都窪郡中洲村の水江に起り、河内町を貫通し、速島平野を過ぎ、龜島の西に至りて海に入る。
高梁川、東西組合用水、都窪郡中洲村酒津に起り、高梁川の東堤に沿ひ、約二千五百有餘町歩の田面を灌溉せるものにて、延長里程一里三十一町、(西部用水、河内鶴新)敷地

又串伏樋

を除く純工費十六萬二百餘圓を要し、大正十一年起工、同十二年竣工したるものなり。

高瀬通



又串伏樋

又串伏樋(俗稱イフオン)内務省直營、東西高梁川用水組合計劃、改修工事の附帶事業の一たる伏樋は左岸中洲村大字水江に船穂村又串の河底を貫通せるものにして、長さ四百七間、高さ巾各六尺七寸、工費二十七萬三千餘圓、大正九年起工、同十二年竣工したるものにして、實に本邦一の伏樋たり。(井上正之調)

高瀬通　こは萬治二年、松山藩主水谷勝宗の開く所にして、(明治八年、更に市街三十一間を穿ち、舟を玉島灣内に通す)船穂村の水江に堰堤(一の口)を築き河水を導き、船穂長尾兩村を経て玉島灣に注ぐ。延長二里半、灌漑の外備中北部に玉島との間に舟運の便ある本郡唯一の内陸水路たり。而して毎年秋季より翌年春季まで高瀬舟を通ず。其他は舟行を禁じ灌漑用に供す。

鴨方川

大島川

鴨方川　市川又は名口川とも云ふ。源を阿部山脈より發し、鴨方に至りて小坂より發する砂川を併せ、金光町の西南隅、鐵橋附近にて里見川に合す。本郡の小川中比較的水量に富み溪川水力に利用せらる。大島川　西部主軸山脈より發し、大島平野の中央を貫通し、土手尻を経て神島入江に注ぐ。

第四 新開地

一、總説

第一五七節

本郡の沖積平野は往古悉く蒼海たりしに、高梁川の威力に依る沖積作用、寛永以後の築堤及土地の隆起作用との三者相俟ちて現状を呈するに至れり。而して如上の三作用は現に間斷なく行はれつゝあるが故に、本郡の平野は年々共に増大しつゝあるなり。今本郡新開地の主なるものをあげれば高梁川流域新開、里見川流域新開、沿岸地方新開の三にす。

連島平野



一、高梁川流域新開

連島新開 (七八〇町)	
(1) 龜島新田	二〇八町 延寶四年—文化三年
(2) 鶴新田	三二四町 文政元年—弘化二年
(3) 北面新田	五五町
(4) 西浦前新田	四〇町 寛政十年
(5) 連島新田	八〇町 萬治元年
(6) 難波新田	二二町 明治三十八年
(7) 福田新田	六五町 大正二年
乙島新開	一一〇町 天保五年—文久三年
河内新開	三三〇町 元治元年—慶應元年
玉島新開	三三〇町 寛永六年
(1) 長尾内新田	?
(2) 船穂新田	二六〇町 正保元年

(3) 玉島・上成・瓜崎新田	?	萬治二年
(4) 阿賀崎新田	二二七町	寛文十年
(5) 七島新田	?	同上

三、里見川流域新開

高梁川流域平野が高梁川によりて涵養せらるゝに反し、里見川流域平野は大小七百有餘の貯水池によりて灌漑せらるゝ、八重の丘陵東方に起伏し、東は道口川より西は新庄川の分水嶺に至る東西三里に亘れる狭長の盆地たり。主なる新田左の如し。

上竹新田	一〇五町	寛文元年
道越新田	一〇〇町	寛文十年
八重新田		同
占見新田		同
鳴方新田		同
里見新田		同
中島新田		延寶年間

四、沿岸地方新開

西大島新田	六四町	享保十六年
勇崎押山新開	一〇町	延寶三年
勇崎内新開	五〇町	正保三年
勇崎外新開	六〇町	寛文六年
黒崎濱新田	三三町	同上
柏島村新開	二二町	延寶三年
寄島新開	四八町	
(1) 古新開	一五町	天明三年
(2) 五段田		?
(3) 中新開	一二町	天保九年
(4) 東新開	九町	同十一年
(5) 早崎新開	七町	同十年
(6) 國頭新開	二町	明治二年
(7) 鳴瀧新開	三町	天保十年

第五海岸

一、總説

第一五八節 本郡の沿海を水島灘と云ふ。東は兒島郡に遮ぎられ、南に壺飽群島あり、西に白石、北木の諸島ありて、内灣の形狀をなす。現今瀬戸内海の常航路は香川縣壺飽瀬戸を通航せるも、古代の船舶は磯傳ひをなし、連島藤戸より兒島灣を往來したるを以て、本郡の沿岸は昔時航路の要衝たりしなるべし。古今に於ける海上交通の變遷如上の如し。然かも高梁川の河口は三角洲を形成し、今や千瀉一里餘に及び、本郡の沿岸を桑田に化せずんば止まざらん。源平戦争の頃には尙ほ可航の水道にして兩軍海陸の争點たりし藤戸の渡が、今や單に歴史上に其名を印るすに止まる如く、本郡の海岸の大部分が船舶交通の自由を缺くに至るの期も蓋し遠きにあらざるべし。

二、西部大島海岸

第一五九節 本郡の海岸線中最も單調にして船舶の碇泊すべき地なし。従つて村邑。漁業の發達見るべきものなし。

海岸線延長里數	兒島郡	二九里
	邑久郡	一六里
	和氣郡	九里
	淺口郡	八里
	小田郡	四里
	上道郡	二里半
	御津郡	二里

古今常航路の變遷

概説

西大島海岸

中大島海岸

根能暗礁

長濱正頭海岸

西大島沿岸は幅員僅かに二丁程なる天神の瀬戸に面し、泥土遠淺にして貝類沙蠶等の採集を見る。

中大島海岸は黒砂にして海水稍深く、根能崎(黒鼻)には黒岩海岸に點在し、又海岸を距る數町の沖に根能の暗礁あり。長濱正頭の沿岸は漁業盛んなり。

三、中部寄島黒崎海岸

寄島海岸

青佐鼻

榜示ガ鼻

安倉

第一六〇節 寄島海岸一帯は遠淺にして、西は青佐鼻より東は榜示が鼻に至る延長約一里半、干瀉の時は貝類沙蠶の採集盛なり。

西半部は堤防を築き製塩の業盛んなるに反し、東半部中、安倉は縣下屈指の漁業地にして、小原と共に大仕掛の近海漁業を營む。沿岸には寄島、三郎島横はる。是等は往時何れも陸地と接觸せしものなりしに、波浪に浸蝕せられて島嶼となりしならん。

寄島

釜ノ口

寄島 沿岸を距る約九町半、周圍二十七町、大潮の干潮時には陸地より徒行せらる。全島殆んど耕され、僅かに東方の一部分に松林あるのみ。島の東南端を釜の口と稱し、水深く夏秋茅渚鰯釣漁を以て著はる。島の南部は白砂横はりて海水浴に適し、北岸には人家(戸數二十、人口百三十)ありて多く漁業に従事す。

三郎島

寄島港

沙美海岸南浦の特徴

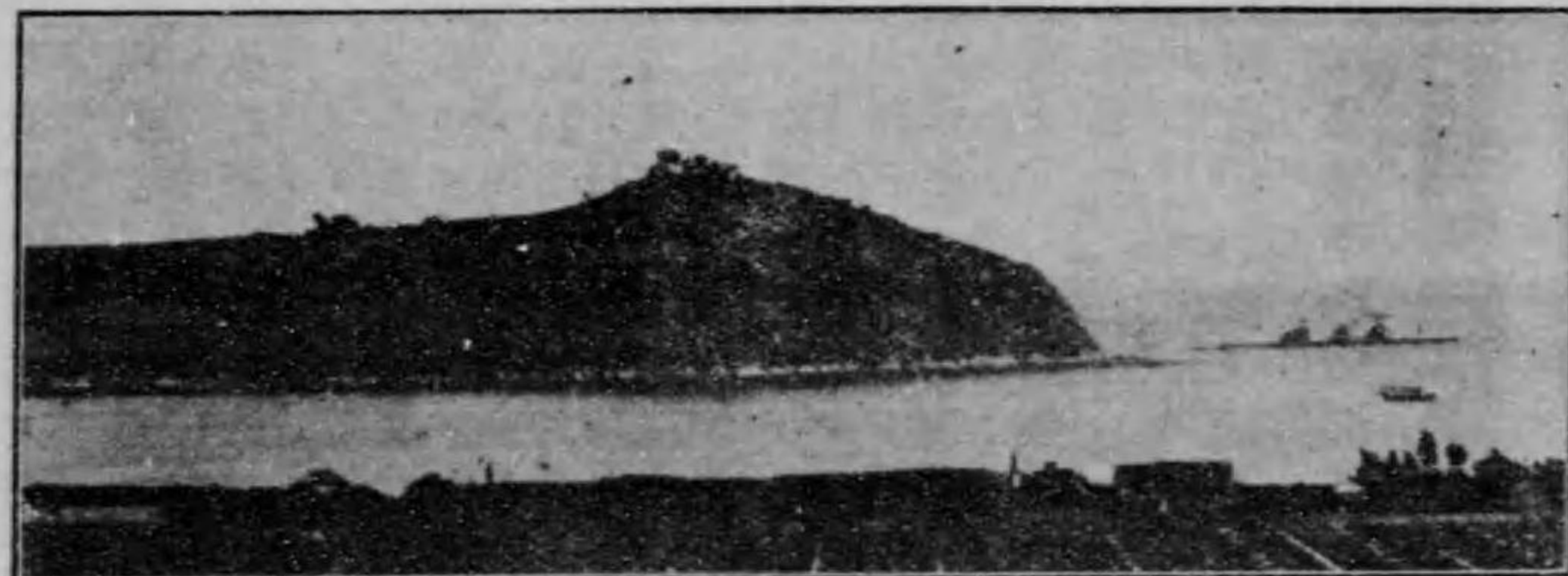
南浦海岸

帆崎鼻

岩谷

三郎島 本島の西南一町の處にあり。三峯並峙し、潮満つれば三峯分れて三島となり、潮去れば島脚一に歸す。眺望頗る雅致あり亦釣漁を以て知らる。

寄島港 一に早崎港と稱ぶ。本島の對岸にあり本郡第二の商港なれども、現今港内埋没して満潮時七、八尺、干潮時は干瀉ミなるが故に船舶の出入最も不便に



三郎島

して、僅に肥料、材木、石炭、麥稈等の輸入するあるのみ。(第二五節 照) 南浦沙美海岸 山脚海に迫り、波浪の浸蝕に耐へ得たる所、或は岬角をなして半島となり、或は島嶼となりて横はり、長汀曲浦の間、海水深く白砂青松と相映じて點綴せられ、縣下稀に見るの絶勝たり。南浦東西の兩端は榜示が鼻帆崎鼻相突出し、其間曲浦をなして白砂横はる。此地商業のみ行はれて漁撈に従事するものなし。南浦の東端には帆崎鼻と稱する岬角海中に突出して断崖絶壁をなし、其間に岩谷と稱する小狭地あり。白砂横はりて漁業稍盛んなり。大正七年断崖に沿ふて車道の開鑿さるるあり。沿道の風色佳絶

沙美海岸
壘島
番所

入瀬灣
小原海岸

水島小島
上水島

水島灘の海深

下水島

大柄杓島
小柄杓島
茶瓶島

總説 高梁川の威
力と商業の發達

にして、近くは寄島諏訪の兩島東西に横はるあり、遠くは、豫讃の島嶼髣髴の間に
隠見し、穩波白帆相映じ、宛ミして畫圖の如し。蓋し本郡沿岸中眺望の白眉たり。
岩谷鼻より矢崎の鼻に至る間を沙美ミ呼ぶ。長汀曲浦の間白砂横はりて海稍深く、
諏訪(壘島)番所の小島沿岸に孤立し、風景の雅致なるこも古來より其名を擅にせし
が、今や又海水浴場地ミして縣下に誇るに至れり。大正五年諏訪山の東側に防波堤
の築かれて船舶の碇泊に便するあり。沿岸漁業の盛んなるこも安倉ミ伯仲せり。番
所山の麓に沙美海濱院ミ稱する海水浴場の設けあり。(第四〇六節参照)番所山ミ矢崎山ミ
の間に入瀬灣稱する小灣あり。矢崎山の東なる小原は土地狹隘沿岸遠淺にして、人
家海岸に稀比し、安倉ミ共に備中屈指の漁業地の特色を發揮せり。
水島灘の中央には水島小島東西に横はり、古來、郡内唯一の釣漁場ミして其名を擅
にせしが、近年上水島(兒島郡)に精煉所の設置せらるるに至りて漁利減殺せらる。
(小原漁民は毎年三百圓宛の賠償を受く)此附近の海深大抵十五、六尋なれど、小柄杓島の東側十七尋に達す
る所あり。而して水島灘平均の深さを八、九尋ミす。
下水島(西方の三分の一は黒崎村に屬し、)は無人島にして、沿岸を距る二里半、周圍約十五
町、全島松樹繁茂し東方には砂洲横はりて干潮時には長く脚を東北に現はせり。又
島の南には海底に砂洲遠く横はりて所謂水島鯛網漁業場たり。

島の南方凡九町の所に東西に並列せる四個の小島を大柄杓島(二町餘)小柄杓島(一町餘)
網代島、茶瓶島ミ呼ぶ。網代茶瓶の二島は下
津井町に屬し、何れも鯛網漁業場及釣漁業場
として知らる。

四、東部玉島連島海岸

第一六一節 沿岸遠淺にして、到る所堤防を
築きて海水の浸入を防止し、以て新開地ミな
せるも、尙高梁川の河口より吐出する土砂は
年々海上を埋めて、乙島鶴新田沿岸の如き今
や干瀉一里餘に及び、猛雨到らば高梁川の濁
流奔注して、水島灘は忽ちにして黄海に化し、
浮游魚族は何處にか其姿を没して之が捕獲に
従事せる幾百の漁夫をして、暫らく糊口に
せしむるこも少なしミせず。實に高梁川は水
島灘を制して其命脈を締めつゝあるの外、沿岸



大柄杓島(二町餘)小柄杓島(一町餘)

乙 東部沿岸の
第二特色は、
海岸線の屈
曲最も著し
く、その複
雜せるこも
本郡稀に見
る所にして、
其結果は自
から此地の
沿岸をして

本郡否縣下屈指の商工業の中心地たらしめたり。中に就き勇崎、押山は製塩業並に之が副業たる塩化加里の製造起れるあり、玉島灣頭には紡績業を中心とする各種の商工業勃興せり。

沿岸には波浪のため浸蝕せられ、僅かに形骸を残せるもの散在して吾人の眼を喜ばす。

寶龜山
丸山島
眞名板暗礁

寶龜山(第三四節) 照丸山(沿岸を距る一町餘周り三町) 眞名板暗礁(丸山島の東一町の所にあり。干潮時は) 龜島等これなり。

勇崎灣

勇崎灣は勇崎押山の製塩業の發達を助成せる唯一の小港にして、塩業船は港口に幅濶せり。

玉島港
第七七節參照

養父鼻
琴の浦
八幡山

乙島連島海岸

玉島港は本郡第一の商港にして、萬治二年(大正十二年を去る) 堤防の築成と共に江渠狀の小灣となる。灣口西南に向ひ、東西二町餘、南北二十七町、干潮時僅かに一條の水路によりて辛うじて船舶を通ず。玉島灣口を扼せるを養父鼻、及八幡山とす。何れも東部沿岸中、眺矚の秀逸を以て知らる。養父が鼻の海岸一帯を琴の浦と呼ぶ。巨巖突出して飛石(石)等の名あり。(第三三節) 乙島連島海岸 堤防を以て蔽はるる雖も高梁川より吐出せる土砂海上を埋めて、今や干瀆一里餘に及び、貝類沙蠶の採集盛なるこも本郡に冠たり。中にも始は連島町

のみにて一ヶ年の採集高實に二千餘石に及ぶ云ふ。而して沿岸到る所に小漁業行はる。

龜島
西浦灣

龜島(九一米)は淺口郡海岸に孤立せる小島中の最高峯たり。西浦灣は玉島灣に亞ける郡中第二の港灣なれど、遠淺にして船舶の出入不便なり。僅かに連島町の物資を集散するに止まるのみ。

第六 結 論

第一六二節 之を要するに、本郡は二條の山脈東西に貫通し、其間低平にして沃野相連なり、加ふるに山地亦著るしく開拓せるが故に、耕地は全面積の六割強を有し、山林は僅かに四割弱を占むるのみ。而して本郡の耕地及其整理が縣下全體に於ける地位、並に郡内土地の種類別を示せば左圖の如し。

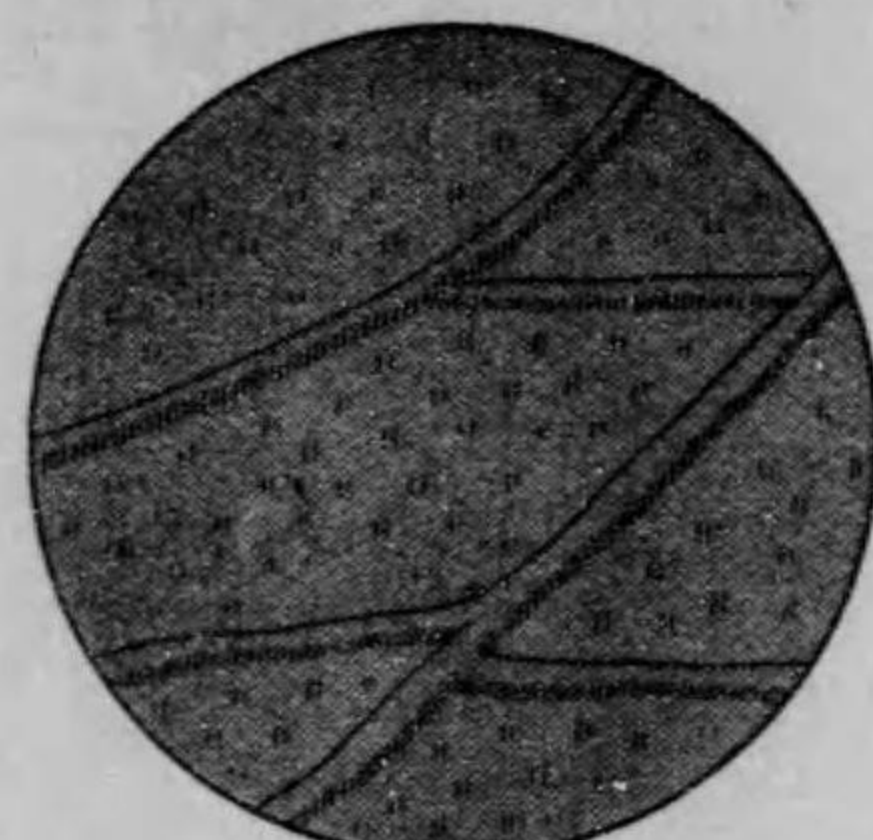
別類種地土郡口淺

畑



3063.3町

田



4292町

地宅



625.7町

林山



2639.9町

田塩



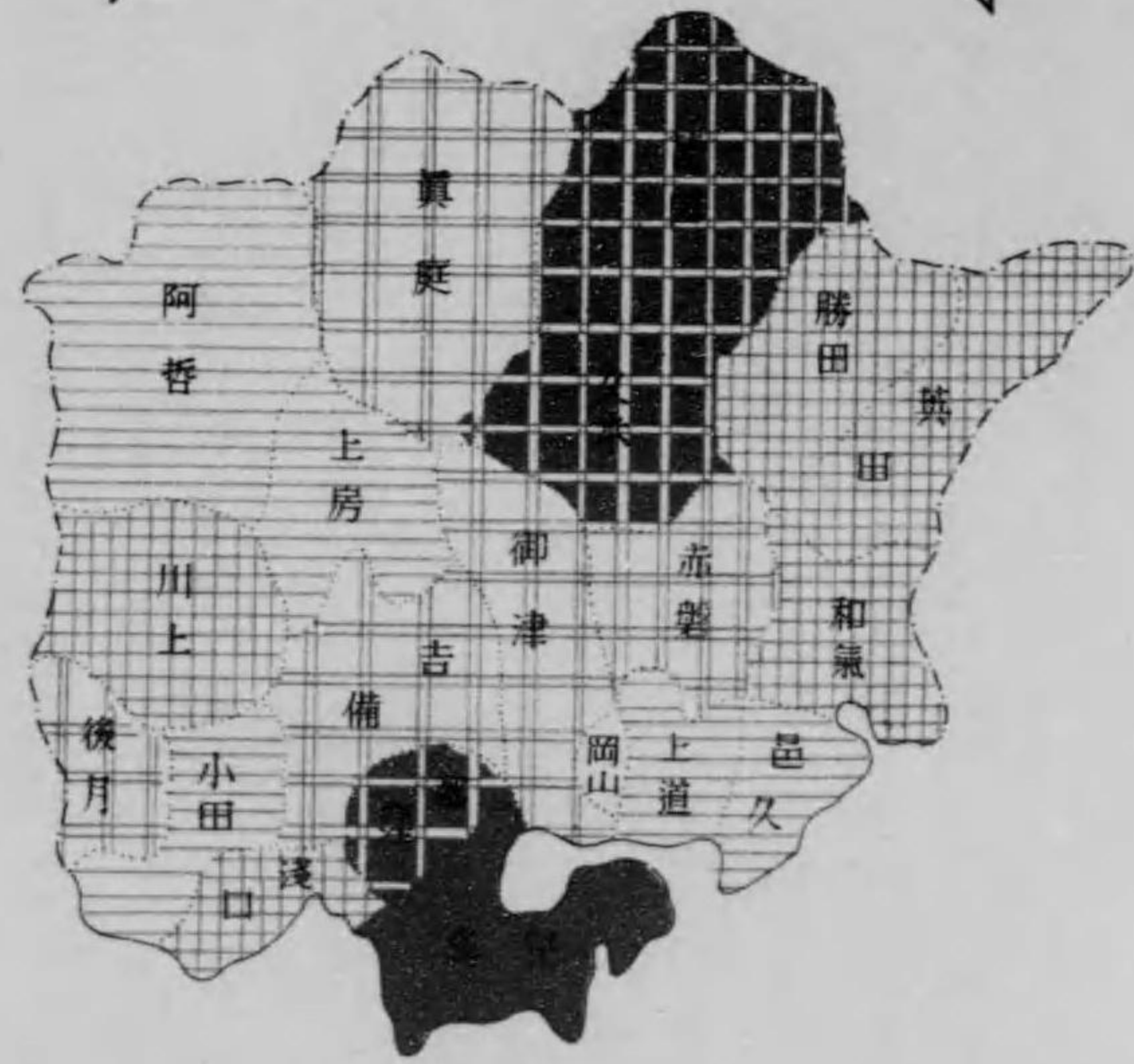
51.5町

沼池



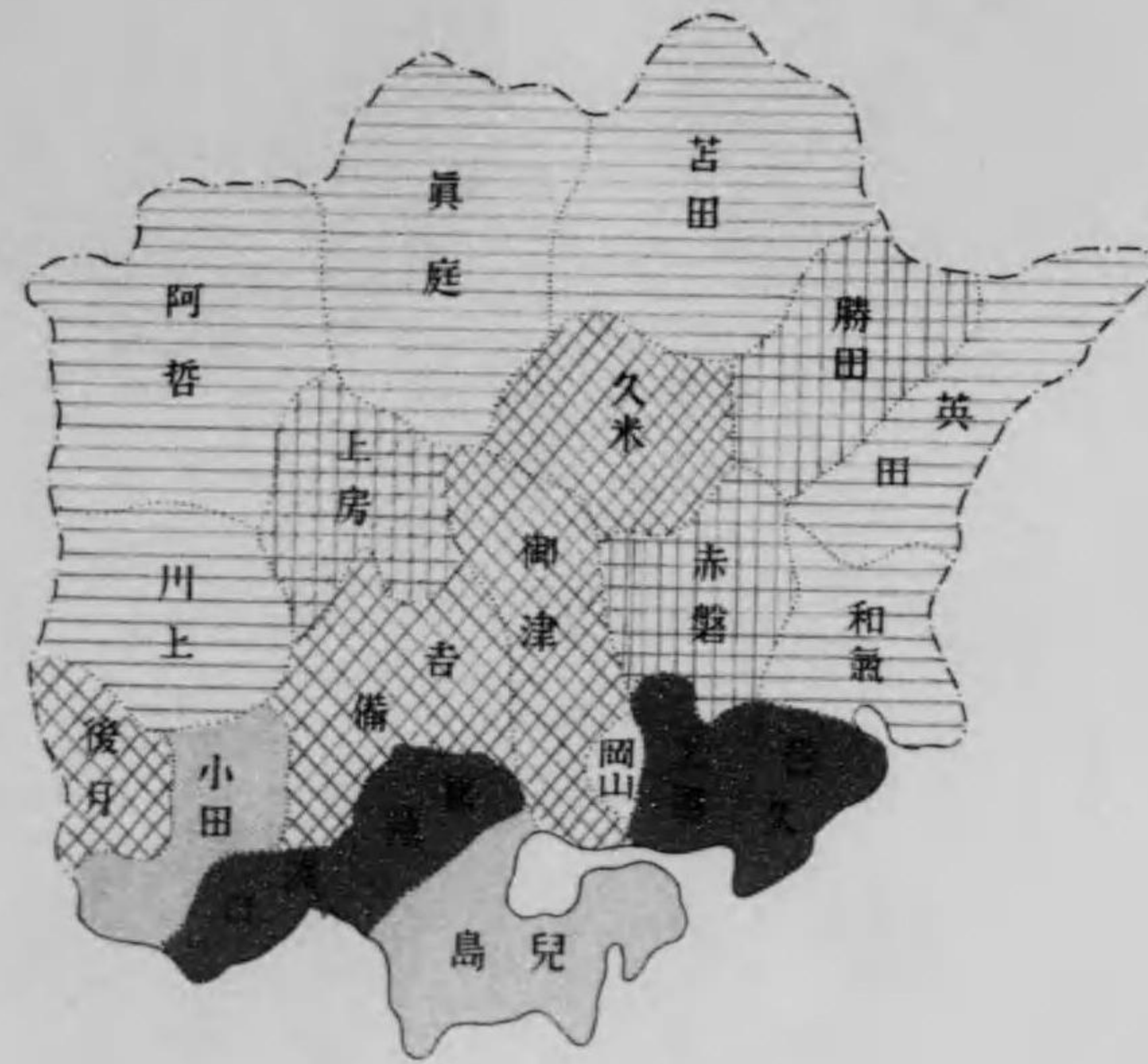
266町

較比市郡積面理整地耕



二十町以下	二十町以上	五十町以上	百町以上	四百町以上

地耕均平里方一



二〇〇町以下	三〇〇町以下	四〇〇町以下	五〇〇町以下	五〇〇町以上

較比市郡積面理整地耕



四百町以上	四百町以下	三百町以上	三百町以下	二百町以上	二百町以下	一百町以上	一百町以下	五十町以上	五十町以下	十町以上	十町以下	十町以下
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	------

地耕均平里方一



四百町以上	四百町以下	三百町以上	三百町以下	二百町以上	二百町以下	一百町以上	一百町以下	五十町以上	五十町以下	十町以上	十町以下	十町以下
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	------

第四章 氣候

(原田、眞田、富田三委員)

特徴

産業上に及ぼせる影響

風向

第一六三節 氣候は南向海岸地方と北向山間地方とによりて多少の差異あり。海岸地方は冬季霜を見ること稀にして、一月梅花の綻ぶるを見ること雖も、全郡概ね温和にして、夏季は温暖なる西南風多きを以て苦熱を知らず。冬季は時々乾燥寒冷なる西北風に拂はれ、間々氷點下に下ることあるも強烈ならず。且降雪極めて少なし。而して本邦中降雨日数の最も多きは裏日本にして、最も少なきは瀬戸内海地方なり。前者は年内概ね二百日以上降雨を見るも、岡山市の如きは百二十日を出でず。斯の如きは産業に及ぼす影響著るしく、即ち本郡特有の麥稈眞田の品質佳良にして之が生産額の米に亞ける所以のもの全く此恩恵に負ふ所あればなり。其他沿岸到る所、製塩業及醬油醸造業の盛んなるを見るもの亦全く之に依る。次に風向を概するに、冬季は一般に西北風多く、殊に十二月一月に於て最も盛なり。春季に至れば西南風漸く増加し、夏季に於て其盛大を極む、爾後東南風に傾き、八月に至りて最も盛なり。初秋に至れば東北風に偏し、晩秋より冬季に至れば遂に西北風となる。

後編 人文地理

第一章 産業

第一總說

(原田、井上兩委員)

第一六四節

本郡の産業概要を圖表にて示せば左の如し。

氣象 (一其)

同 十 一 年	同 十 年	同 九 年	同 八 年	大 正 七 年	
一 六 、 二	一 五 、 八	一 六 、 七	一 六 、 四	一 六 、 二	平 均 溫 度
三 〇	三 一	三 〇	三 〇	三 二	最 高 溫 度
〇 、 五	三 、 五	〇 、 五	〇 、 五	〇 、 二	最 低 溫 度

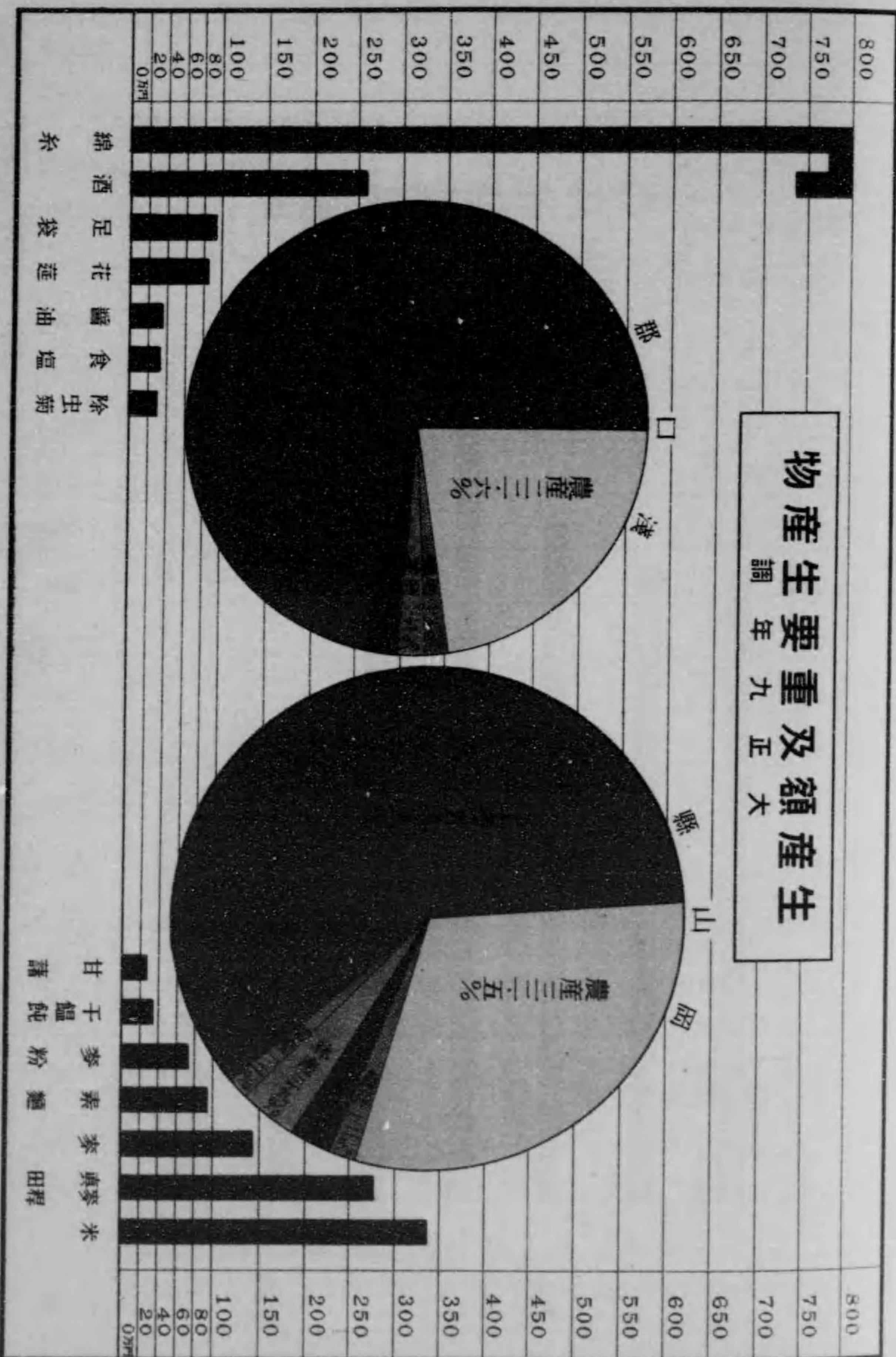
玉島測候所調

氣象 (二其)

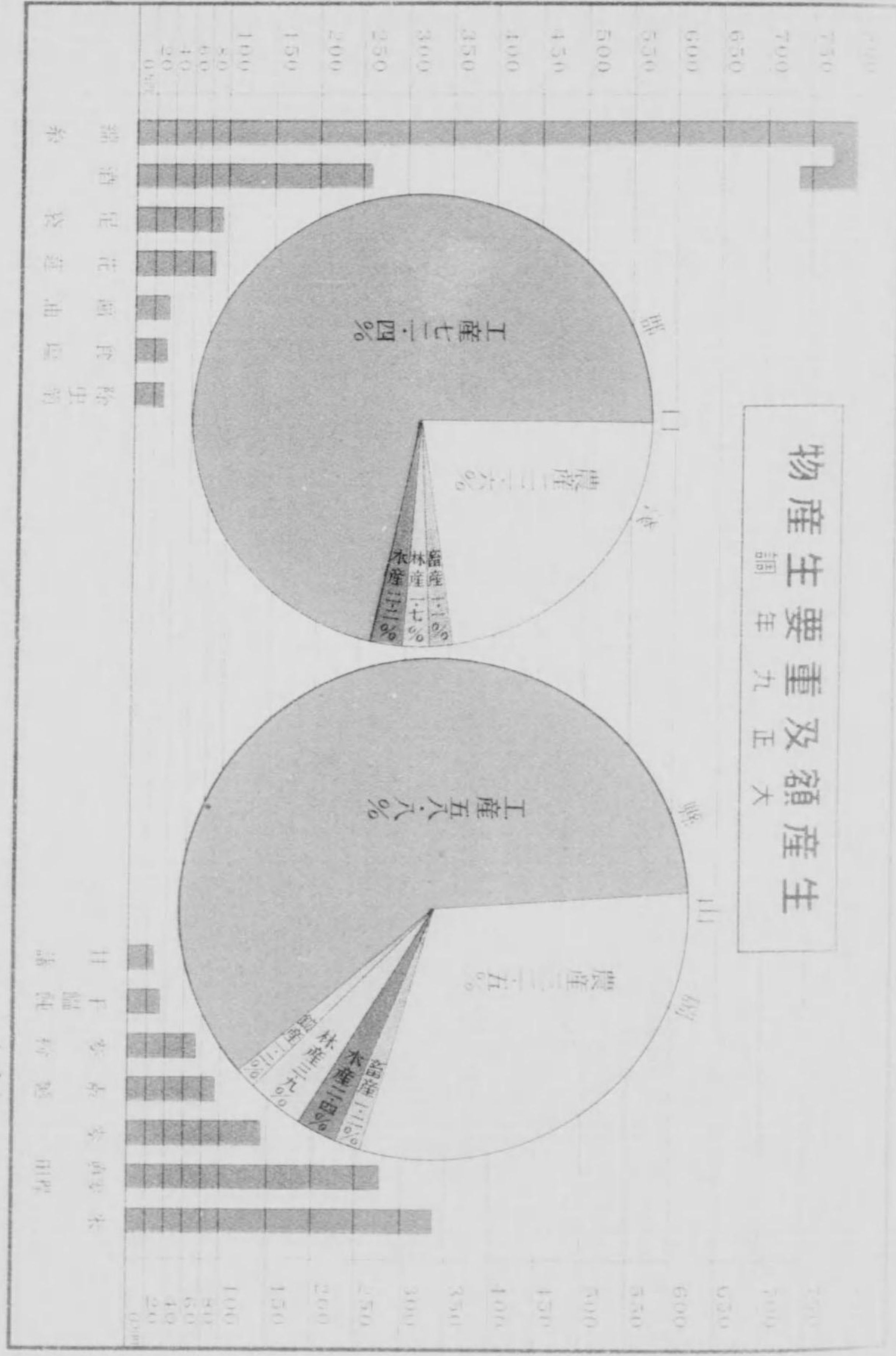
同 九 年	同 八 年	同 七 年	同 六 年	大 正 五 年	
十 一 月 十 四 日	十 一 月 二 十 二 日	十 一 月 十 一 日	十 一 月 六 日	十 一 月 十 二 日	初 日
四 月 七 日	五 月 十 六 日	三 月 二 十 八 日	四 月 一 日	四 月 六 日	終 日
十 一 月 三 十 日	十 一 月 十 六 日	十 一 月 十 七 日	十 一 月 十 五 日	十 一 月 十 六 日	初 日
二 月 二 十 四 日	三 月 二 十 六 日	二 月 二 十 七 日	三 月 五 日	三 月 二 十 四 日	終 日

玉島測候所調

第一六四節



表十七 四編

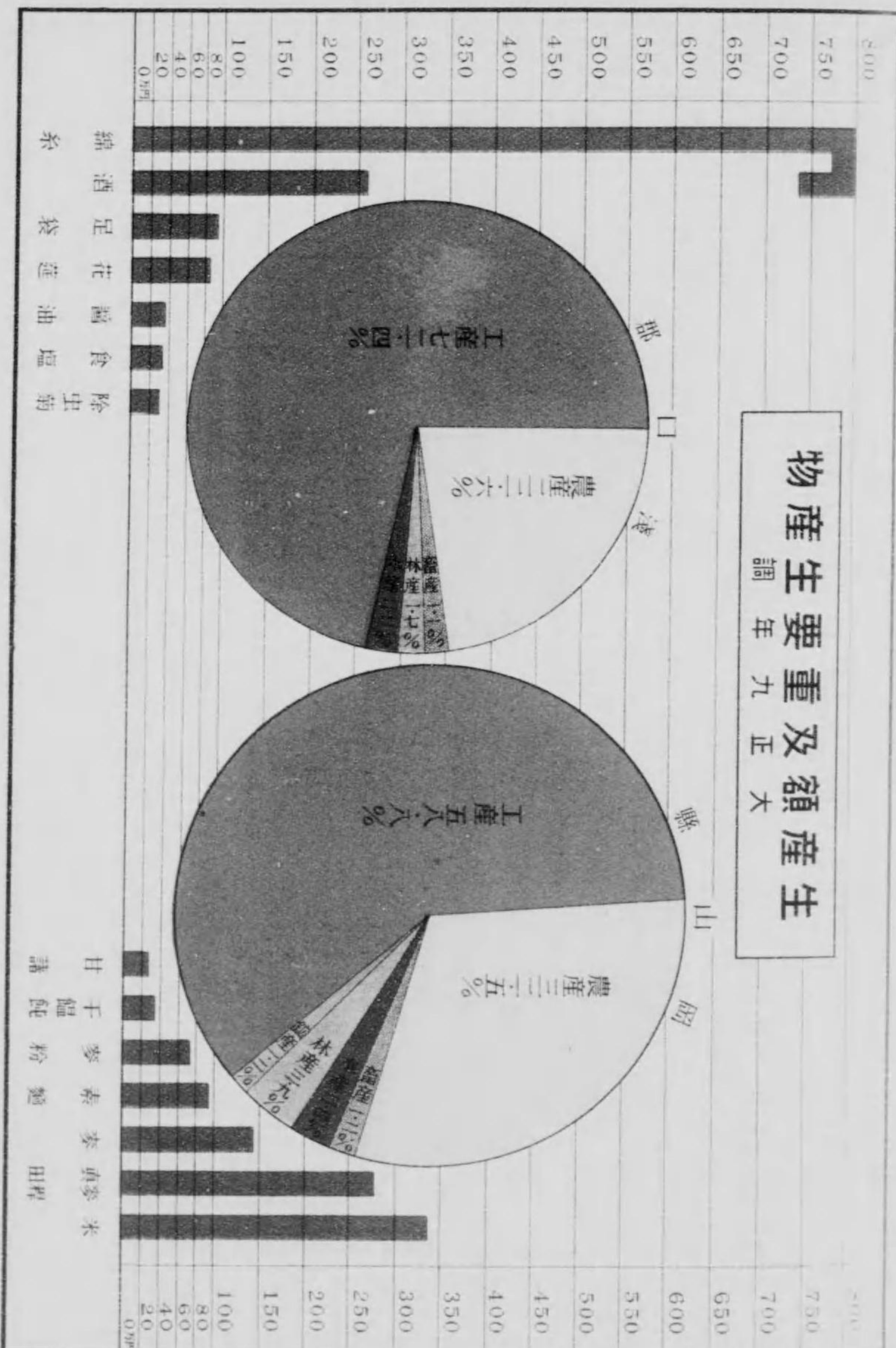


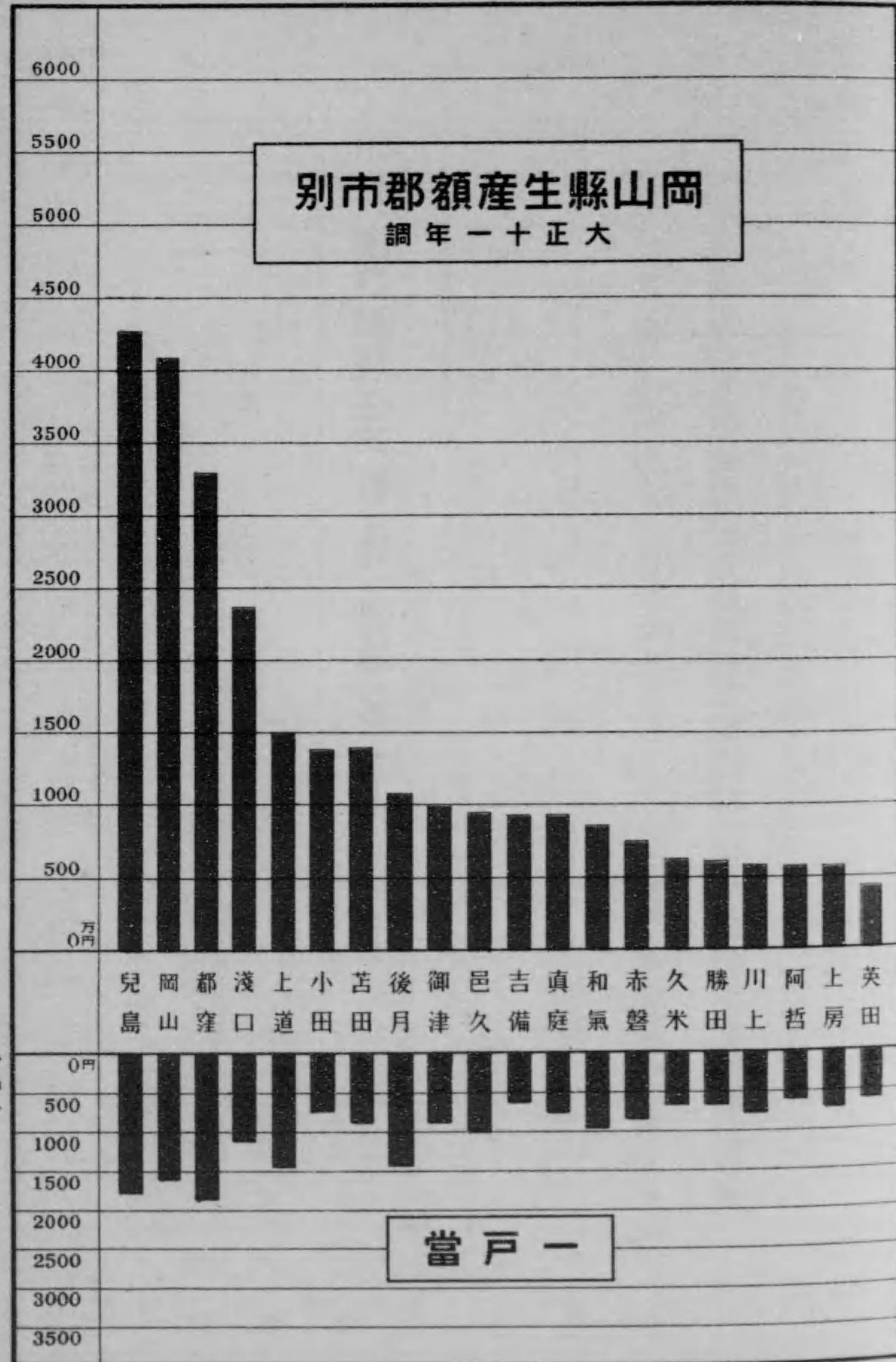
1930

第一六四節

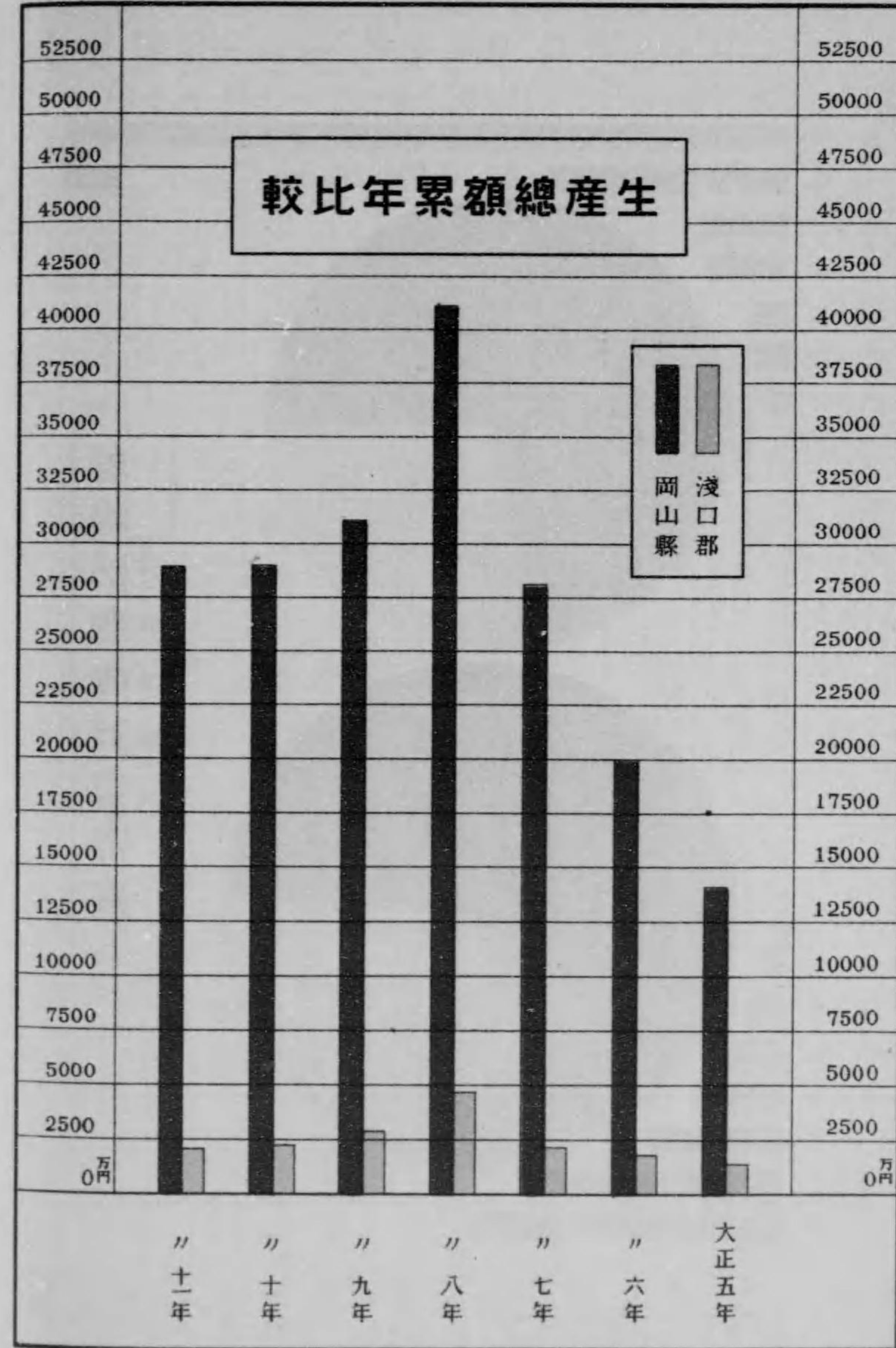
物産生要重及額產生

調查年九正大

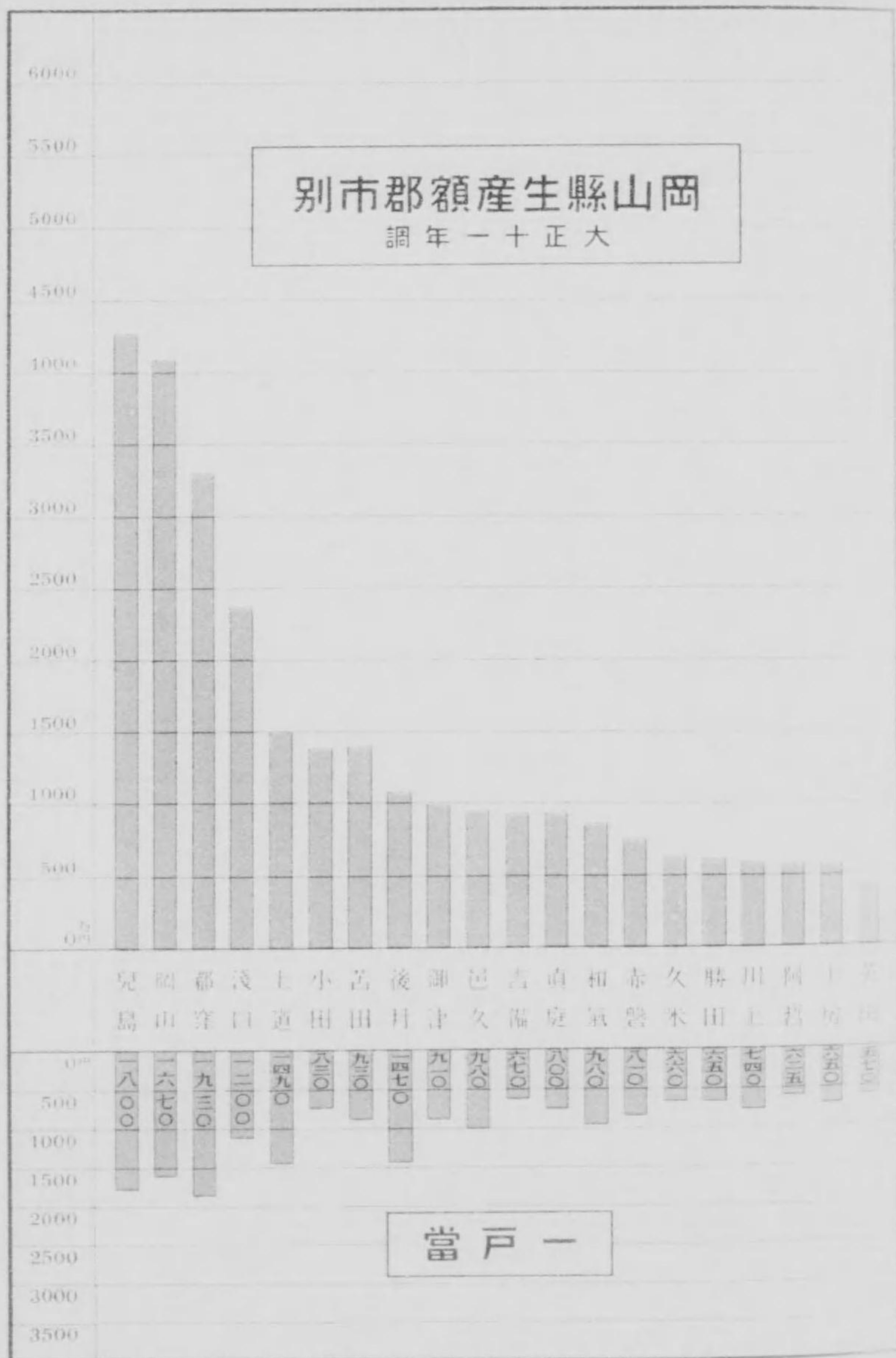




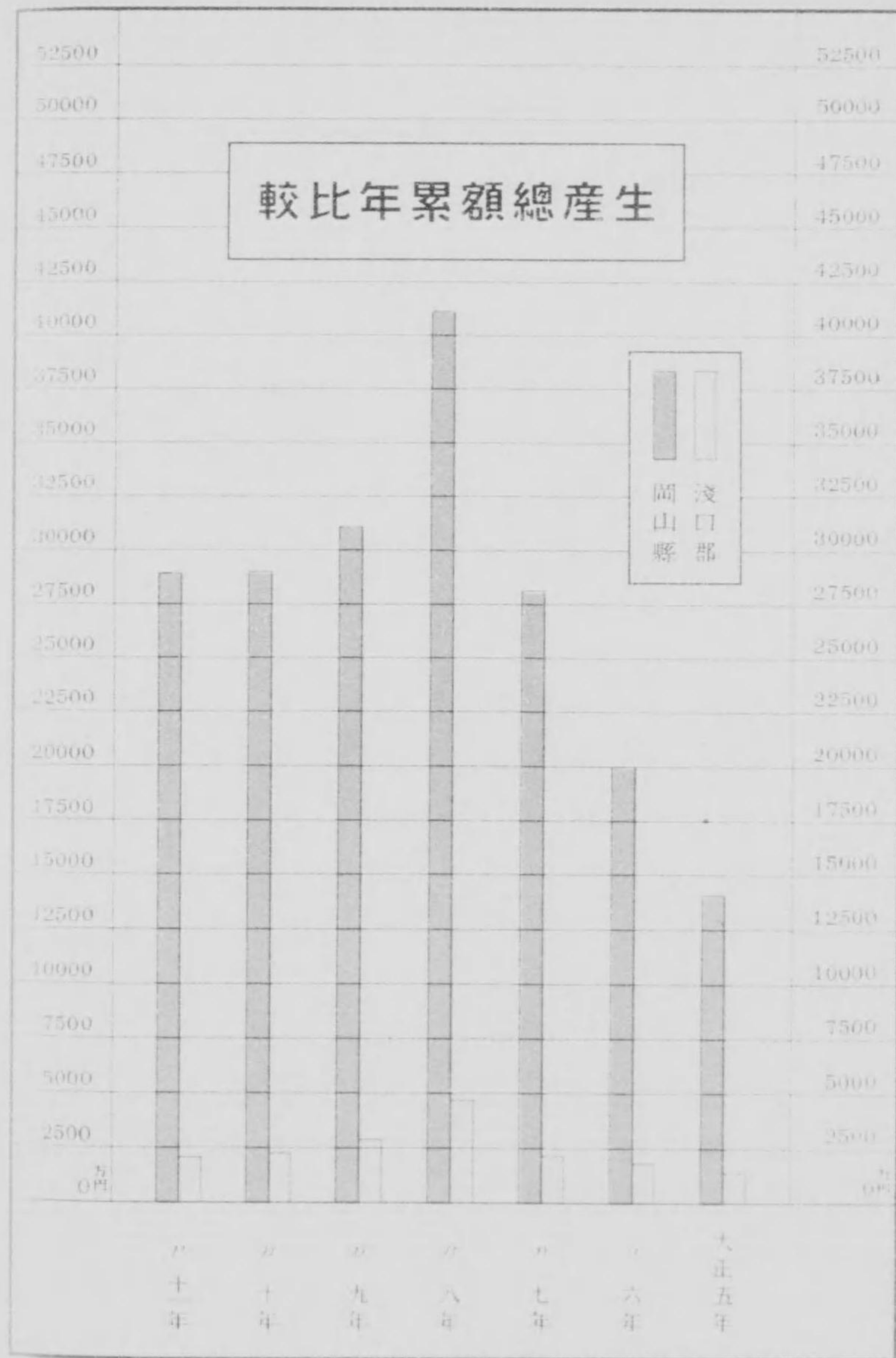
一九五



一九四



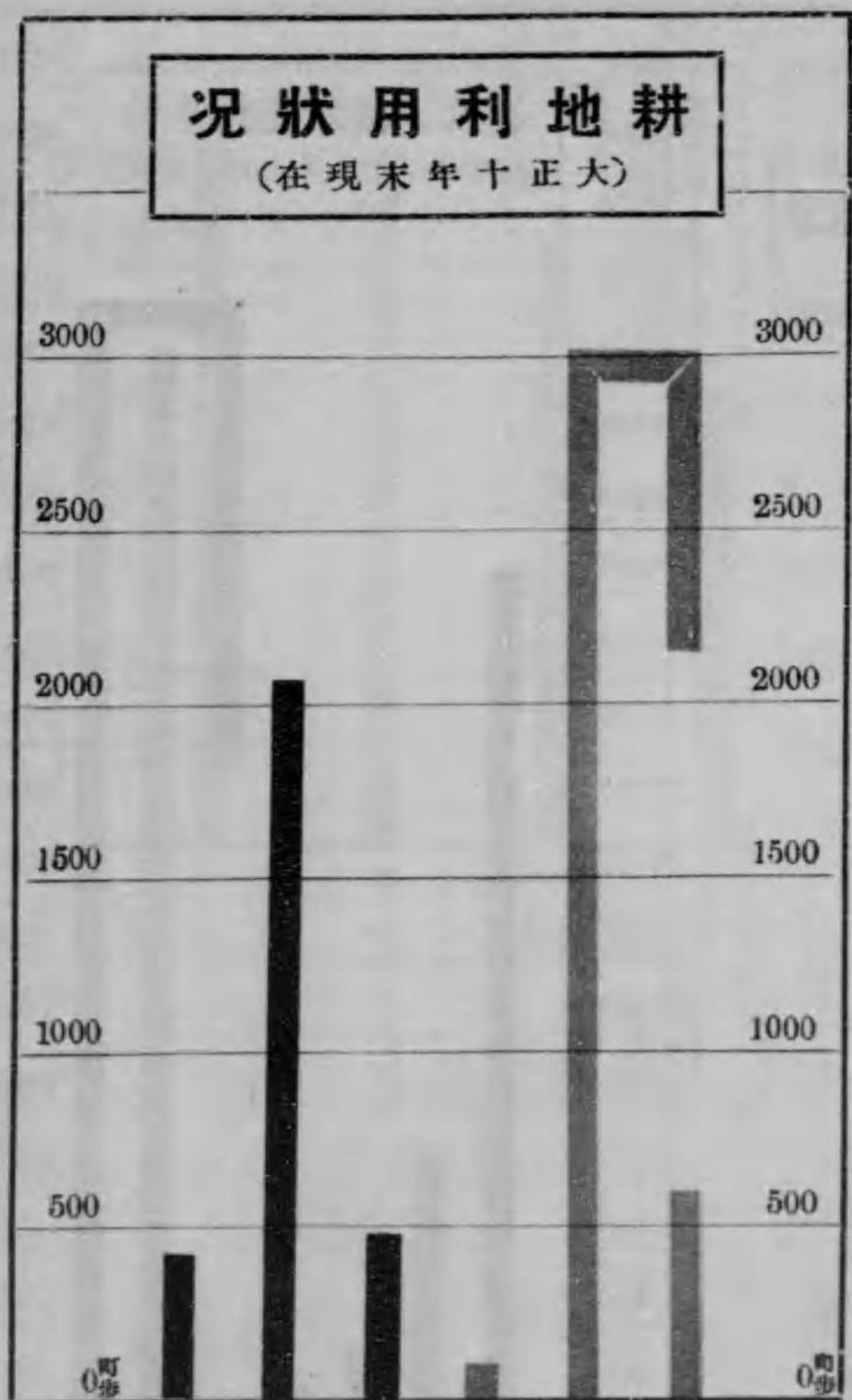
一九一〇



一九一〇

第一六五節

耕地利用状況
(大正十年末現在)



一九七

本郡農業の一般を統計其他十數項目に別ちて説明せば左の如し。
 第一六五節 本郡の土地利用状況に關しては、第一六二節、本郡土地種類別統計圖を参照すべし。

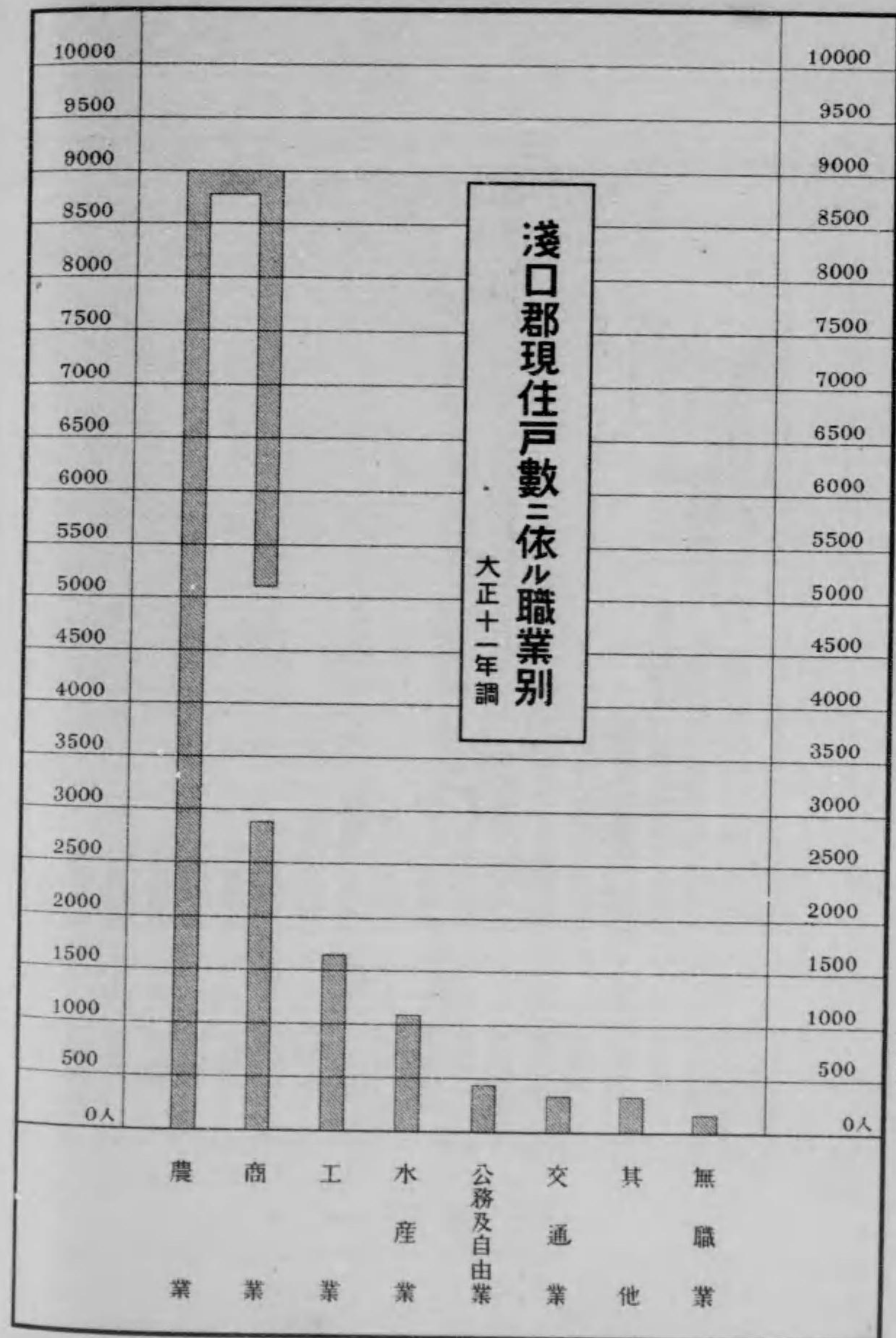
第二 農業

(井上正之調)

一、土地利用状況

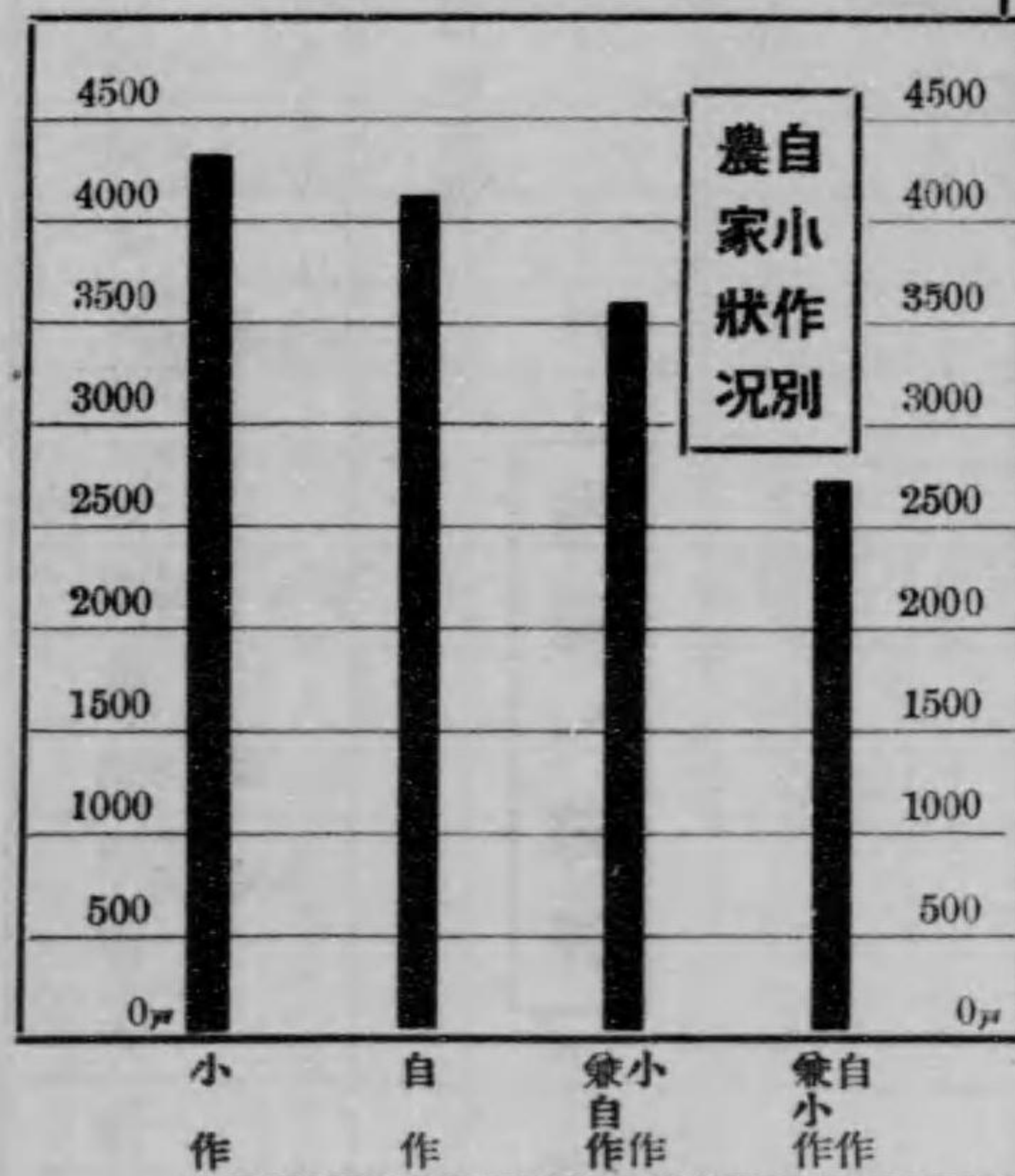
(大正十年末調)

淺口郡現住戸數ニ依ル職業別
大正十一年調



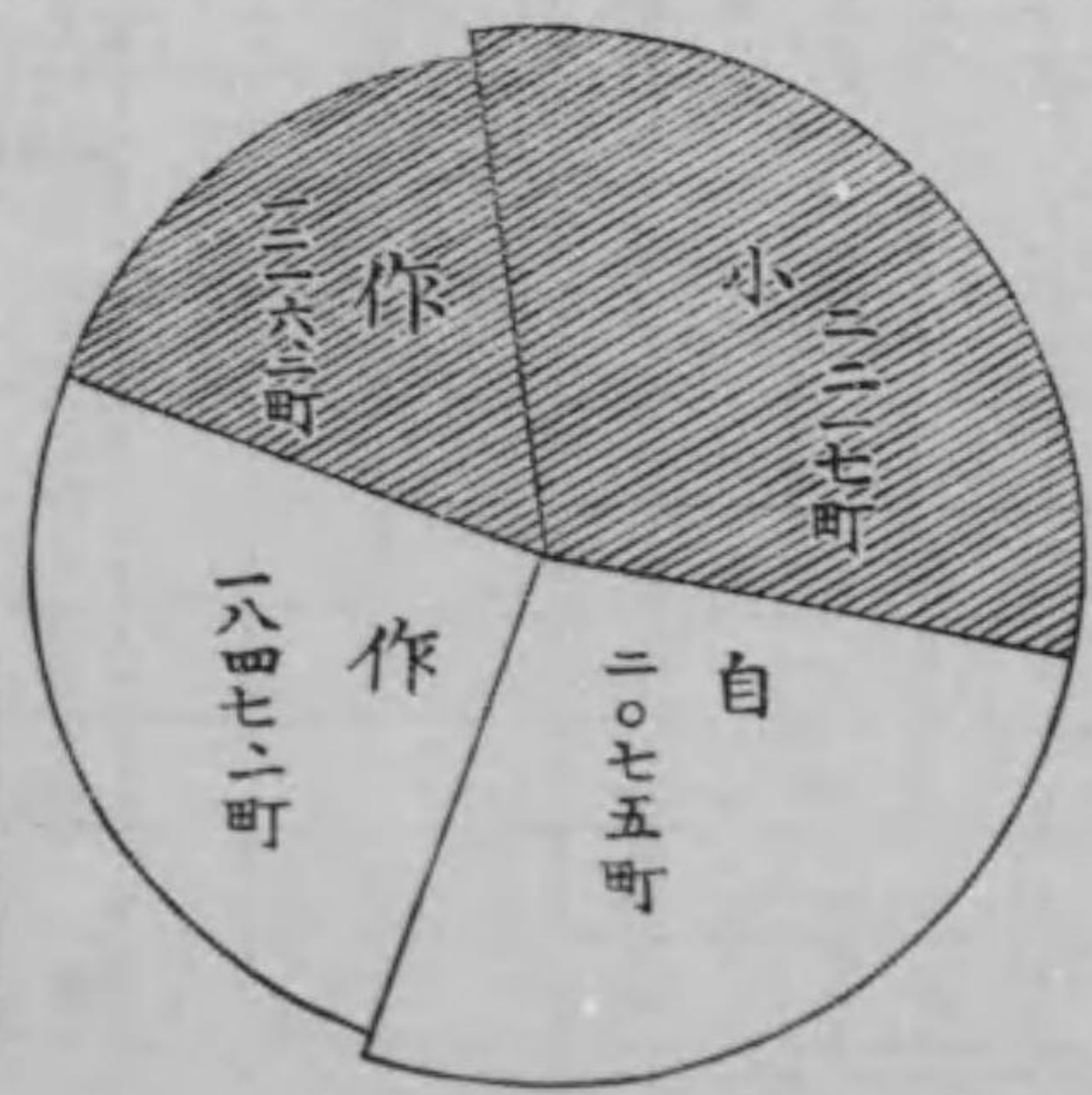
一九六

節九六一第



比 分 百 國 全

自作	小作	兼自作	兼小作
三六	二八	四〇	二九

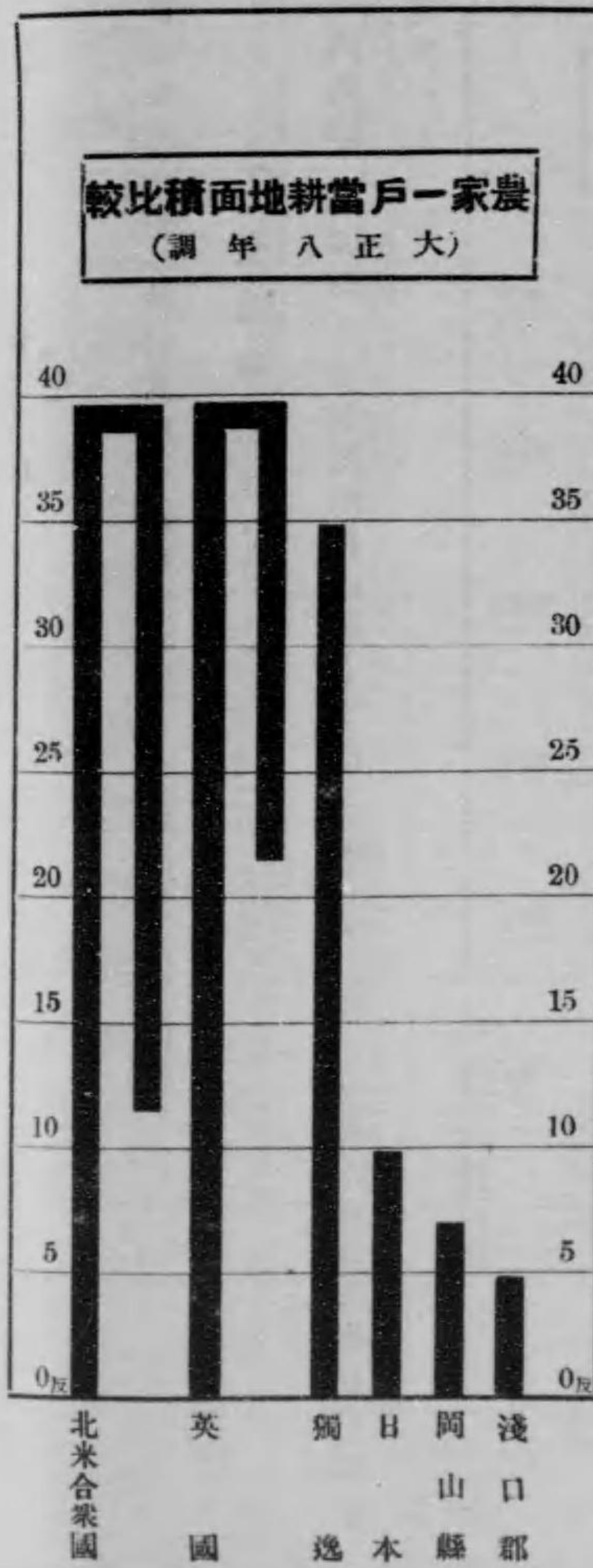


一九九

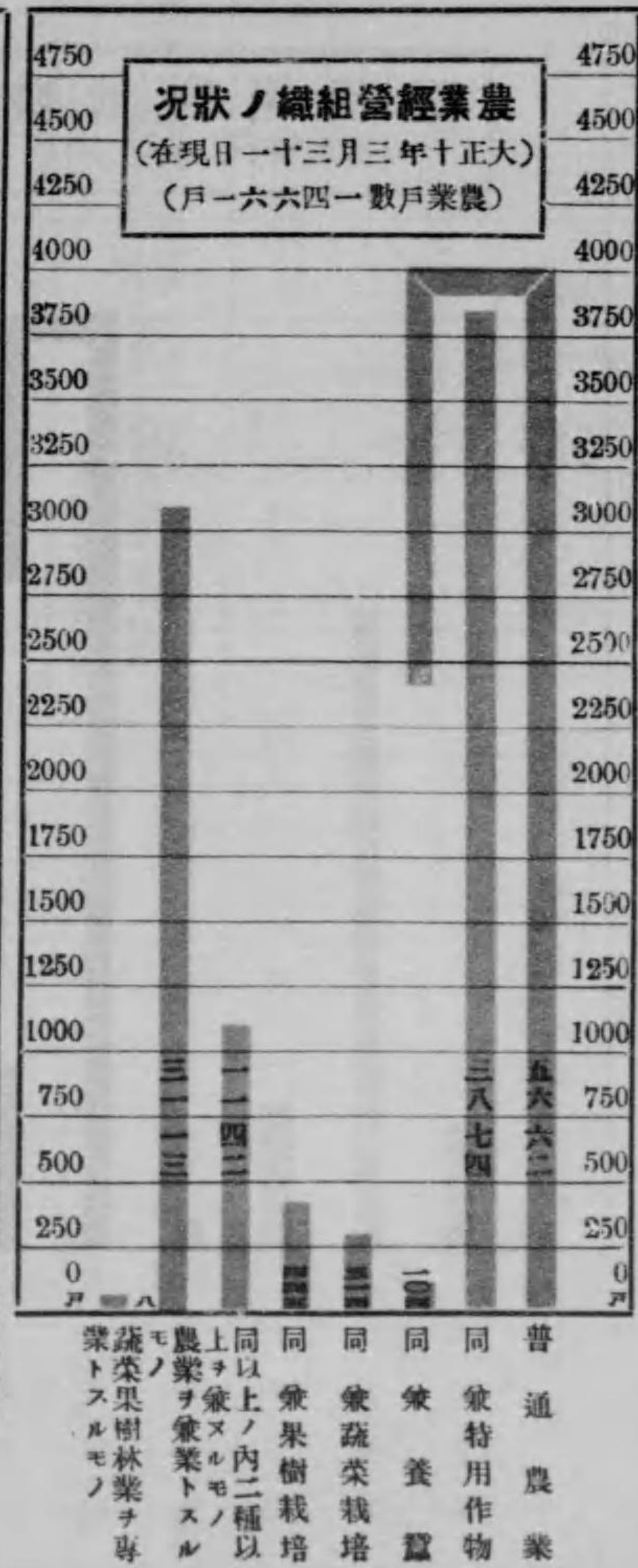
大園田
小園畑

第一七〇節

節八六一第



節七六一第



一九八

村 田 富	村 尾 長	村 穂 船	町 内 河
平 富 道 道 八 均 口 越 島	平 爪 長 均 崎 尾	平 柳 水 船 井 原 江 穂	平 片 西 西 均 島 原 知 阿 知 新 田
一、五二五 一、七五〇 一、五〇〇 一、五〇〇 一、四〇〇	一、五七〇 一、五八〇 一、五六〇	一、五六〇 一、六〇〇 一、六〇〇 一、四八〇	一、三六五 一、四〇〇 一、三二〇 一、二八〇 一、三四一
一、三二一 一、四〇〇 一、二七八 一、三〇五 一、二六一	一、四一〇 一、四二八 一、三九一	一、四一五 一、四三六 一、四二三 一、三八五	一、二八九 一、三一一 一、二七九 一、一九一 一、二六八
一、〇〇〇 一、〇〇〇 一、〇〇〇 一、一五〇 九五〇	一、〇七〇 一、二四〇 九〇〇	一、一一七 一、二〇〇 一、二〇〇 一、〇五〇	一、〇六一 一、二〇二 一、一五二 一、一五〇 八四〇

町 島 連	町 島 玉	町 村 名
平 連 矢 龜 西 鷗 均 島 柄 島 浦 田	平 勇 柏 乙 上 阿 玉 均 崎 島 島 成 崎 島	大 字
一、三八一 一、四〇〇 一、三六五 一、三七〇 一、四七〇 一、三〇〇	一、四四五 一、六〇〇 一、七五〇 一、三〇二 一、四〇〇 一、三五〇 一、二七〇	上
一、一七六 一、一八四 一、一四三 一、二四八 一、〇〇三 一、三〇〇	一、二八八 一、三三四 一、五七八 一、〇五〇 一、三一五 一、二五〇 一、二〇一	中
一、〇一四 八〇〇 八〇〇 九〇〇 一、二七〇 一、三〇〇	一、一一一 一、一〇二 一、二五〇 〇、九〇〇 一、二二〇 一、一〇〇 一、一〇〇	下

第一七四節
一、田之部

九、小作料狀況

(大正三年
調査)

	黑崎村	寄島町	大島村	里庄村	六條院村
總平均			西大島新田 西大島 大島 平島中	里見庄 新庄 濱中 平均	六條院東 六條院中 六條院西 平均
	一、七五〇	一、七五〇	一、四〇〇 一、七〇〇 一、七〇〇 一、六〇〇	一、五五〇 一、五〇〇 一、四〇〇 一、四八三	一、四五〇 一、三五〇 一、六〇〇 一、四六七
	一、四〇九	一、六五二	一、一九九 一、四六七 一、四八六 一、三八四	一、四一八 一、三六五 一、三四三 一、三七三	一、三〇〇 一、二三六 一、三六二 一、二九九
	一、一〇〇	一、三六〇	九〇〇 一、〇五〇 一、〇五〇 一、〇〇〇	一、一〇〇 一、〇五〇 一、〇五〇 一、〇六七	一、〇〇〇 一、〇〇〇 一、〇五〇 一、〇一七
	一、五四七	一、七五〇	一、三六九	一、〇七八	

鴨方村						金光町										
益坂	本地頭	小坂	小坂	鴨方	深田	平田	上竹	下竹	八重	占見新田	占見	地頭	大谷	須惠	佐方	平均
一、六五〇	一、七五〇	一、八五〇	一、七五〇	一、七五〇	一、六五〇	一、七一一	一、七〇〇	一、七〇〇	一、三五〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、四〇〇	一、六五〇	一、五〇〇	一、五三三
一、四一一	一、五二三	一、六五三	一、五七四	一、四二七	一、四〇三	一、三九〇	一、三〇〇	一、四二〇	一、三〇五	一、三四八	一、二〇八	一、四九七	一、三〇八	一、二四九	一、二四六	一、三二四
一、一〇〇	一、一〇〇	一、三〇〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	九九四

村 田 富	村 尾 長	村 穂 船	町 内
平 富 道 道 八 均 口 越 島	平 爪 長 均 崎 尾	平 柳 水 船 井 原 江 穂	平 片 西 均 島 原
同 麥 同 米	同 麥 米	同 同 米	同 同 同
一、五〇〇〇 一、〇〇〇〇 一、〇〇〇〇 五〇〇〇 五〇〇〇	一、〇〇〇〇 七四〇〇 一、〇〇〇〇 七四〇〇	一、三三〇〇 八〇〇〇 七五〇〇 九六七	一、三〇〇〇 九四五〇 一、一九一
同 麥 同 米	同 麥 米	同 同 同 米	同 同
五三五六 五八六 五〇〇〇 三六五 三五五	八〇四 五〇〇 八〇四 五〇〇	六二九 六〇九 五四九 七二九	一、二一四 八四〇 一、一一二 一、二二七
同 麥 同 米	同 麥 米	同 同 同 米	同 同
四二五〇 四〇〇〇 四〇〇〇 二五〇 二五〇	五〇〇 三一六 五〇〇 三一六	四四三 四三〇 三五〇 五五〇	一、一〇〇 九六七 一、〇五〇

河	町 島 連	町 島 玉
西 四 阿 知 新 田	平 連 矢 龜 西 鶴 均 島 柄 新 浦 田	平 勇 柏 乙 上 阿 玉 均 崎 島 島 成 崎 島
同 米	同 麥 米 同 米	同 麥 米 同 麥 米 麥 米
一、三六五 一、一五五	一、〇八三 一、〇五五 一、〇〇〇 一、〇〇〇 一、二七〇 一、二五〇 八四〇	一、四三八 一、一六五 一、六〇〇 一、三〇〇 一、五五〇 一、二五〇 一、三〇〇 一、〇八〇
米 麥	同 同 麥 同 米	同 同 同 米 同 麥
一、二八一 一、二三七	九一五 七四六 七五六 七三〇 一、二六〇 七五二 七四〇	一、〇八三 一、一九〇 一、五二〇 一、〇一四 八九六 一、一九〇 一、〇三五 〇、九五〇
米 麥	同 同 麥 同 米	同 同 同 米 同 麥
一、一七〇 一、〇五〇	五〇〇 五四〇 四五〇 四五〇 六〇〇 四五〇 六三〇	八三〇 一、〇〇〇 一、三〇〇 七〇〇 七五〇 一、〇〇〇 六五〇 〇、七五〇

一〇、耕地整理並土地改良

第一七五節 明治三十九年、本縣耕地整理、并に土地改良獎勵規則の發布以來、本郡に於て耕地整理を施行したるものは左表の如くにして、本郡農會調査に於て明治三十年以降水田の暗渠排水工事をなしたるものは八十七町なり。

組合、又は、地區名	起工年月日	工事前、總面積	工事後、總面積	工 事 費
船穂村大字柳井原	明治四三年五月	一七 _町 三三〇〇	一七 _町 七八〇〇	一八、三二 _町
富田村大字道口	同年 三月	一〇、六三〇〇	一一、〇九〇〇	一一、六九五
鴨方村深田組合	大正三年 四月	三一、八四〇〇	三四、〇七〇〇	一二、九五五
鴨方村本庄組合	同 二年 五月	七七、二二〇〇	八一、五五〇〇	二〇、九五二
鴨方村小坂西組合	同 二年 六月	六九、〇九〇〇	七八、一四〇〇	二四、五六四
計	—	二〇六、一三〇〇	二二二、六四〇〇	八八、四七九

第一七六節

一一、米麥の品種と栽培反別

稻 の 部			麥 及 小 麥 の 部		
品 種 名	栽 培 反 別	歩 合	品 種 別	栽 培 反 別	矢 筈
神 力	二二七五、四 _町	五八%			一九〇九、一 _町

日 出	三〇一、五	七	コピソカマギ	一七一五、六
小 天 狗	二五二、六	六	紅 梅	一五二、七
吉 備 穂	二一五、八	五	白 ト フ	一八、二
美 穂 選	一三九、五	三	其 他	一二六、五
朝 鮮 選	七一、二	二	在 來 短 芒	七、六
明 治 選	六六、八	二	其 他	二、三
雄 町	四九、六	一	島 田 小 麥	三七二、五
檜 の 棒	二四、二	一	チ コ	八八八、六
其 他	三六一、〇	八	朝 鮮 小 麥	一七、一
金 時 糯	一〇八、五	三	中 長 小 麥	七、七
赤 糯	六八、五	二	其 他	四三、七
其 他	三三、〇	一	合 計	五二六一、八
合 計	四〇七九、〇	一〇〇		

一二、農具の改良

第一七七節

淺口郡が大正年代に至りて農具の改良に動力器械を盛んに使用するに

至りしこは、縣下否全國に誇るに足るものあり。就中大正九年富田村道越研農會が發動機を購入したるを初めし、大正十一年には、船穂産業組合にて自動耕耘機(貳千圓)を購入するに至れり。大正十一年末改良農具の狀況左の如し。

- 自動耕耘機(シマーモート、キユールトア) 一臺
- Z型發動機 四二臺
- アルハ型發動機 一二臺
- 其他發動機 六臺
- 畜力應用耨摺機 九五個
- 同上 脫穀器 一九個
- 廻轉式脱穀器 一二四五個
- 豆粕剝削機 三二八個
- 麥摺器 一一一〇個
- 培土鍬 一四〇六個
- 播種機 三六個
- 動力揚水器 三五個
- 噴霧器 二五二個

節八七一第

肥料名	數量	價格	肥料需用狀態 (大正十年)		
			肥料名	數量	價格
魚肥類	一一二、一九九	一〇五二四一	油粕類	一三七八七一	六七八〇三八
糞尿類	七七九、六七三	二五一七〇	諸粕類	四四一四一	二二〇八二
其他	五、二〇五	一三八八〇	其他	二九〇五	六六四
			磷酸肥料	一一九〇八九	四一六六〇
			窒素肥料	三〇八一八	二九八五三七
			加里肥料	一一四七九	二〇八〇
調合肥料、及雜肥	二二三六八九	一二六二七九	間接肥料	二六九七六	二二四〇
農家自給肥	一七二五七二〇七	三二七二〇七	綠肥	一一二九五六	四二二二
合計		一六四一九六九			

一三、農耕地に對する肥料需用狀態 (大正十年)

(備考) 本表中、購入肥料は百參拾貳萬〇五百四拾圓にして、田畑一反宛に換算する時は、拾八圓八拾錢となる。

一四、園藝と除蟲菊

園藝
桃
梨
葡萄
柑橋
甲州葡萄

第一七九節 日清役以前に於ては、園藝業は投機的の業と見做され、僅かに自家用として栽培するに止まりしが、日清役後俄かに發達して、桃は富田鴨方里庄六條院の四ヶ村に、梨は富田金光六條院鴨方黒崎里庄の六町村に、葡萄は里庄富田黒崎連島に、柑橋は大島村に、西洋梨は鴨方里庄富田村に於て、各多額の産出をなすに至れり。其他明治廿八年、黒崎村大隅儀一が創始したる宅地利用甲州葡萄は同村玉島町勇崎地方を中心として漸次發達しつつあり。而して園藝界の發達に貢献せしを黒崎村笠原常太郎とす。

第一八〇節 除蟲菊は明治十八年博士玉利喜造によりて始めて本邦に輸入せられたるが、淺口郡にては明治二十三年黒崎村笠原常太郎が東京三田有種場より種子を購入したるを嚆矢とするも成績不良に終りしが、後小田郡新山村津田某山畑に植附け、始めて好成绩を得てより、東西に試植するもの相亞ぎて起り、明治三十五年頃より地方特産物となり、爾後年々増加し、山地の開墾亦促進せられ、大正六年に至り一千町歩を算するに至る。就中大島寄島黒崎船穂地方を主産地とす。斯くて大正八年には阿賀崎に之が製粉加工を目的とする中央物産株式会社設立を見るに至れり。

一五、牧畜と養雞

牧畜業

第一八一節 牧畜業、こは土地狭少のため、古來盛ならず。加ふるに、飼料並に副業の發達に伴ふ世相の一變は、漸次衰退せり。左表の如し。

	明治二十九年調	大正十年調
牛	一八三二	一六〇三
馬	一四	七四
豚	不詳	二八九
山羊	不詳	一〇七

養雞業

第一八二節 養雞業、こは副業發達と共に漸次進歩し、大正十年三月末調、飼養戸數六千九百六十一、雞數三萬六千三百餘を算し、大正十一年産業組合法による淺口郡家禽販賣組合の設立を見、組合員三千七百餘人を有するに至れり。

一六、養蠶業

第一八三節 本郡に於ける養蠶業は、明治十四年玉島町上成の人角谷某の始めて手を下せしに始まり、明治二十五年頃より漸次その數を増し、同二十九年に於ては養蠶家三十八戸、繭の生産高三百二十二石、桑園六十九町に及びしが、越えて三十

四五年より三十七八年の間に異常の發達をなし、金光町大谷の地には河手與次郎の經營する大谷製糸會社の設立を見るに至りしも、其頃より麥稈業勃興し、養蠶業も一時停頓し、會社亦三年を出でずして解散するに至れるが、隣郡に於ける斯業の發達は停止する所を知らず、加ふるに蠶種検査の實施と共に幾多改良工夫の結果は、麥稈の燻蒸による被害を避くるを得るに至りて、大正四五年頃より再び發達し來りて大正十一年には、

桑園 四七町
養蠶戸數 五〇〇戸
收繭 八八〇貫

を算し、船穂村金光町玉島町(上成、狐島、吉浦)鴨方村には養蠶組合の設立を見るに至れり。

一七、棉作

第一八四節 本郡平坦部殊に中央以東の主作物は棉作にして、一反歩より實棉三五貫乃至五十貫を産し、明治六年頃には米作の五六倍にも相當する收入あり。玉島港は其集散地にして、西國屋豊後屋大西屋棉屋等の大問屋によりて、海路周防九州方面に移出し、所謂玉島の繁榮をなしたるも、時勢の變遷は棉作不引合となり明治二十五年頃より其跡を絶ち今日の米作に化するに至れり。

第三 水産業

(富田義夫調)

一、水産業の概要

第一八五節 本郡水産業者の數は、大正十年に於て專業者五百十二戸、兼業者六百十三戸にして、本郡總戸數の約百分の六に相當し、漁船數六百九十七(外、發動機船四隻あり)あり。之が分布の狀況を示せば左の如し。

町村名	專業戸數	兼業戸數	計	漁船數
寄島町	三三九	九七	四二六	二五四
黒崎村	一〇四	八〇	一八四	一九二
連島町	六〇	一七五	二三五	三一
玉島町	一五	一八二	一九七	一一〇
大島村	二	七〇	七二	一一一
富田村	二	九	一一	一
計	五二二	六一三	一一二五	六九七

投網	銚子 曳網	地曳網	曳網	沙魚網	章魚 蛋網	鯨網	黒網	貝虫採	貝取 捲	鱈 掛
三六	一三	七	一	一五	六	五	一七	一二六	五三	五
五四	二六	一三	一一	一八	七	六	二〇	一六七	五六	五
二、九四七	二、三五五	九八〇	一、〇〇〇	一、〇九五	四四五	七二五	二、二三一	六、〇九四	五、八三七	六八〇
連島町玉島町	大島町寄島町	連島町	寄島町	玉島町連島町 寄島町黒崎村	大島町寄島町 黒崎村	玉島町	玉島町寄島町 黒崎村	連島町	同	玉島町
淺口郡地先	廣島縣沼隈郡、淺口郡小田郡、地先海面	連島町地先海面	水島灘	淺口郡地先海面	小田淺口郡地先海面	淺口郡地先海面	淺口郡地先海面	淺口郡地先海面	連島町玉島町地先	淺口郡沖合

縛網	五智網	小編網	瀬曳網	繰網	壺網	建千網	烏賊 巢曳網	建廻網	大手 操網	蟹流 瀬網	四張 網
二	三三	三	三	三	一五	四	八八	一四	六	四	七九
一四〇	一一七	一一〇	一七四	八六	四九	二七	一五二	三〇	二六	九	八〇
二〇、〇〇〇	一一、三五三	三四、〇〇〇	二一、〇〇〇	一二、四六〇	八、五五七	七、〇七〇	九、九四八	二、〇七〇	三、四〇〇	一、〇〇〇	四、六六五
寄島町	寄島村	黒崎村	寄島町	寄島町	大島村寄島町 黒崎村玉島町	連島町	玉島町黒崎村 寄島町	連島町	寄島町	寄島町	連島町
燃灘、播磨灘、水島灘	鳴門、坂出、燃灘、水島灘	大阪府海面、水島灘	香川縣仲多度郡海、水島海一圓	香川縣三豐郡、廣島縣沼隈郡、岡山縣小田淺口兩郡海面	淺口郡地先	玉島町連島町地先	水島灘	淺口郡地先	水島灘	水島灘	玉島町、連島町地先

同二十七年	同	四	一六	二、二〇〇	同	同
同二十八年	同	四	一六	二、一〇〇	同	同
同二十九年	同	五	二〇	二、五五〇	大寄島村町	同
同三十年	同	七	二九	三、三〇〇	寄島町大島村 黒崎村	同
同三十一年	同	一三	五二	五、五一〇	大寄島村町	同
同三十二年	同	一九	七六	七、六二四	同	同
同三十三年	同	二二	四八	四、九七〇	同	同
同三十四年	同	六	二四	二、一四〇	同	同
同三十五年	同	五	二三	一、〇五五	寄島町大島村 黒崎村	同
同三十六年	同	一四	五七	四、七九七	同	同
同三十七年	同	二五	一〇〇	八、八〇三	大寄島村町	同
同三十八年	同	三六	一四七	一七、四五〇	同	同

第一八七節

三、遠洋漁業の状況

年別	漁業種類	出漁船數	出漁人員	漁獲高	出漁町村名	出漁海面
明治二十四年	鯖網 流網	七	三〇	一、三六〇 <small>円</small>	寄島町	忠清南道、全羅南道、慶尙南道、慶尙北道
同二十五年	鯖網 流網	一	四	七〇〇	同	同
同二十六年	同	三	一二	一、九〇〇	同	同

其ノ他ノ網漁業	三〇	四〇	三、〇二五	玉島町連島町 黒崎村寄島町	水島港
其ノ他ノ釣漁業	八	九	三〇八	玉島町黒崎村 寄島町	淺口郡地先海面
其ノ他ノ漁業	二四	二七	八七〇	玉島町	同上
合計	一、〇九五	二、四七五	三、一八一	玉島町連島町 玉島町連島町	同上

部 水 鹹					養殖の種類	場 所	面 積	漁 獲 量	價 額	記 事
同	灰	同	同	牡						
同	貝	同	同	牡蠣	玉島町大字乙 島大平地先	五、〇二六 ^甲	二、二五〇 ^甲	二〇五 ^円	種苗は自然生に依る	
大島村大字西	玉島町大字乙 島濱地	大島村大字西	玉島町大字乙 島養父沖		一、八一五	七五	八		種苗は都窪郡妹尾町より購入	
六〇、四八〇	六、五〇〇	五、八二〇	五〇〇				五〇		成續不真にして、休止の状態にあり	

第一八八節

四、鹹水及淡水養殖の状況

同 七年	同 八年	同 九年	同 十年
同	同	巾着網	同
二〇	一九	六	六
一五四	一五二	四三	四二
四一、七六八	五六、〇七〇	七、一二四	五、七〇〇
同	同	黒崎村	同
同	同	同	同

同 三十九年	同 四十年	同 四十一年	同 四十二年	同 四十三年	同 四十四年	大正元年	同 二年	同 三年	同 四年	同 五年	同 六年
流網、鯉網	鯉網、流網	巾着網、鯉網	鯉網、巾着網	同	同	鯉網、打網、巾着網	同	巾着流網	流網、巾着網	流網、巾着網	流網、巾着網
四五	二五	一八	二二	一一	一一	一三	一〇	一四	二五	一八	一七
一九一	一二二	一四六	六三	五九	五九	六七	五五	七六	一六六	一〇一	一二八
一二、六四二	一三、〇一〇	一五、八五〇	四、一八〇	一〇、〇八〇	七、〇〇〇	一三、二六〇	一二、六六九	一〇、九四八	一一、四六一	一七、五〇八	一六、三三四
同	寄島町大島村	同	同	同	同	同	同	大島村寄島町	大島村寄島町	大島村	同
忠清南道、全羅北道、慶尙南道、江原道	同	同	忠清南道、全羅北道、慶尙南道	同	同	同	同	慶尙南道、慶尙北道	慶尙北道、慶尙南道	慶尙北道、慶尙南道	同

部の水淡		同	同	同	同	同	同	同	同
藻	貝	玉島町大字乙 島大平地先	二七、〇〇〇	二、七〇〇	二、七〇〇	種苗は出雲の國、米 子より購入	同	同	同
淺	利貝	寄島 寄島洲町	四四、三九四	一〇〇	三〇〇	種苗は自然生による	同	同	同
ア	ヤマキ	大島村大字西 大島	一二、一二二	一	一	成績不真にして、休 止の状態にあり	同	同	同
鯉、	鯛、	玉島町大字乙 島北泉新地	四三三	一七	一六	種苗は附近に於て採 取	同	同	同
鯨、	鰯、	玉島町大字勇 崎寶龜	九、一八三	一九〇	八五	同上	同	同	同
鯉、	鰯、	連島町大字鶴 新田字弘化門	一五、三四四	三六六	一、二七五	種苗は自然生	同	同	同
同	上	連島町大字龜 島新田一ノ割	九、五七六	二五五	七六五	同上	同	同	同
同	上	連島町大字龜 島新田	一九、九九三	一一〇	二一〇	同上	同	同	同

第一八九節 主なるもの左の如し。

五、水産物製造状況 (大正十年調正)

鹽波 七八二四
蒲鉾竹輪 一七五、六〇〇本 三四、八八〇

蛤 四、二五〇貫 五、五二五
煮乾 蝦 五〇 三〇〇
素乾 甲付 錫 二、〇〇〇 二、六〇〇
計 四四、〇八七

六、魚市場

第一九〇節 總數十四ヶ所の内、組合組織のもの三、他は個人經營に屬せり。之に附屬する魚商人約二百七十餘人、一ヶ年取扱高四十餘萬圓に上る。販賣手数料は一割三分乃至一割四分のもの多く、仲買人歩戻金は六分乃至九分ミす。

(参考) 本郡魚市場 (大正九年調)

魚市名	稱場	組織	所在地	開市日	販賣高	魚商人數	手数料	戻料
中屋魚市場	個	人	玉島町大字阿賀崎南町	年中	六〇、〇〇〇 ^四	一五 ^人	一割五分	一割五分
原田幸十郎魚市場	同	同	玉島町大字乙	同	一〇、五〇〇	七	一割一分	一割一分
淺原福三郎魚市場	同	同	玉島町大字乙	同	七、〇〇〇	六	一割一分	一割一分
④ 魚市場	同	同	玉島町大字玉島常盤町	同	二〇、〇〇〇	二五	一割五分	一割五分

鹽津魚市場	同	連島町大字西ノ浦	同	三六、五〇〇	一六	同	六割三分
正頭魚市場	同	大島村大字大島中正頭	自四月上旬至十一月下旬	九、〇〇〇	七	同	一割三分
中安倉魚市場 (西安倉魚市場ヲ含ム)	同	寄島町中安倉	年 中	二二〇、〇〇〇	七三	同	八割三分
東安倉魚市場	同	寄島町東安倉	同	五五、〇〇〇	四〇	同	八割三分
國頭魚市場	同	寄島町國頭	同	五、〇〇〇	二〇	同	八割三分
岩谷魚市場	同	黒崎村岩谷	同	四、六三六	一〇	同	八割五分
沙美西魚市場	組合	黒崎村沙美	同	一〇、〇〇〇	一三	同	一割五分
榮魚市場	個人	黒崎村沙美	同	二〇、〇〇〇	七	同	九割四分
壽魚市場	組合	黒崎村沙美	同	五〇、〇〇〇	二二	同	九割四分
小原魚市場	同	黒崎村小原	同	三〇、〇〇〇	一四	同	八分六厘二毛
合計				四三七、六三六	二七五		

七、製鹽業の大要

第一九一節 本郡に於ける塩田反別及製鹽場数は明治三十八年塩專賣法實施當時に於て寄島濱二十八町五步、十六ヶ所、勇崎濱二十一町八反六畝四步、十三ヶ所なりしが、現今に於ては寄島濱二十六町一反九畝二十七步、十五ヶ所、勇崎濱二十一町九反七畝四步、十ヶ所、併せて四十八町一反七畝一步、二十五ヶ所を有せり。其生産額は年々豊凶ありて一定し難く、今之れを專賣法實施後、各年別に示せば左の如し。

年度別	一等鹽	二等鹽	三等鹽	四等鹽	五等鹽	計	賠償金額
明治三十八年	三、四〇〇斤	三〇、八〇〇斤	一、三七八、七四七斤	一、五七七、三六六斤	一、二五三、六二二斤	四、一〇〇、八五九斤	四、一〇〇、八五九
同三十九年		四、九〇〇斤	三、五七〇、四一九斤	一、〇七〇、〇七〇斤	一、〇七〇、〇七〇斤	七、七七〇、〇七〇斤	八、一九九
同四十年		三三	四、六四九、三〇六斤	五、七八三、〇〇〇斤	三、〇〇〇、一九三斤	八、三三九、三〇六斤	八、七八八
同四十一年			五、三三三、九四〇斤	三、八〇〇、〇〇〇斤	二、三三三、九四〇斤	八、一九一、三〇六斤	九、七八八
同四十二年		一、四〇〇斤	五、七〇一、七五五斤	二、九二二、八三三斤	二、二七四、四三三斤	八、四〇〇、〇〇〇斤	九、八八七
同四十三年		一、八〇〇斤	五、七三七、三三八斤	三、〇〇〇、〇〇〇斤	二、二二〇、〇〇〇斤	八、三三三、三三八斤	九、三〇〇、〇〇〇

九、塩田小作料と田畑小作料との比較

第一九三節

年 別	鹽田小作料	田小作料	畑小作料
大正六年	三二八、五六三 ^四	三一六、一一三 ^四	一六九、〇五〇 ^四
同 七 年	三二九、一二八	五六六、五〇〇	二〇六、一九五
同 八 年	三四五、二三七	七三四、三八八	三八四、五一〇
同 九 年	三四八、五八一	四三六、八三八	一五〇、〇七五
同 十 年	三六一、二三七	五三〇、七五〇	一五〇、〇七五

備考 田、畑小作料は鹽田所在町の普通小作料(田は米、畑は課麥)に時價を乗じたるものなり

第四 鑛 業 (原田虎平調)

第一九四節 概説

本郡の主なる鑛物は銅及石炭にして、就中銅鑛は其發掘箇所十數を算するも、含有量三割を出づるものなく、石炭は其質悪しく、炭層一尺餘にして産出量貧弱なり。是等は歐洲戦亂中盛に採掘せられしが、平和克復後經濟界の不況

概説

玉島鑛山

爪崎鑛山

船穂鑛山

杉谷鑛山

金堀鑛山

其 他

に陥るに共に何れも中止の姿となり、今は唯残骸を止むるのみに至れり。今参考のため各鑛區の概要を述べん。

玉島鑛山 富田村字富峠矢掛街道に沿うたる東數町の所にある銅鑛にして、明治四五年頃の發掘に係る。含有量三割を占め、發掘規模亦大にして郡中第一たり。

爪崎炭鑛 富田村字北川ミ長尾村爪崎ミの村境水田にあり。明治四、五年頃の發掘にして、炭質悪しく寧ろ褐炭に近し。炭層僅かに一尺餘にして幅廣し。一時盛に發掘せられしも今は中止の姿なる。

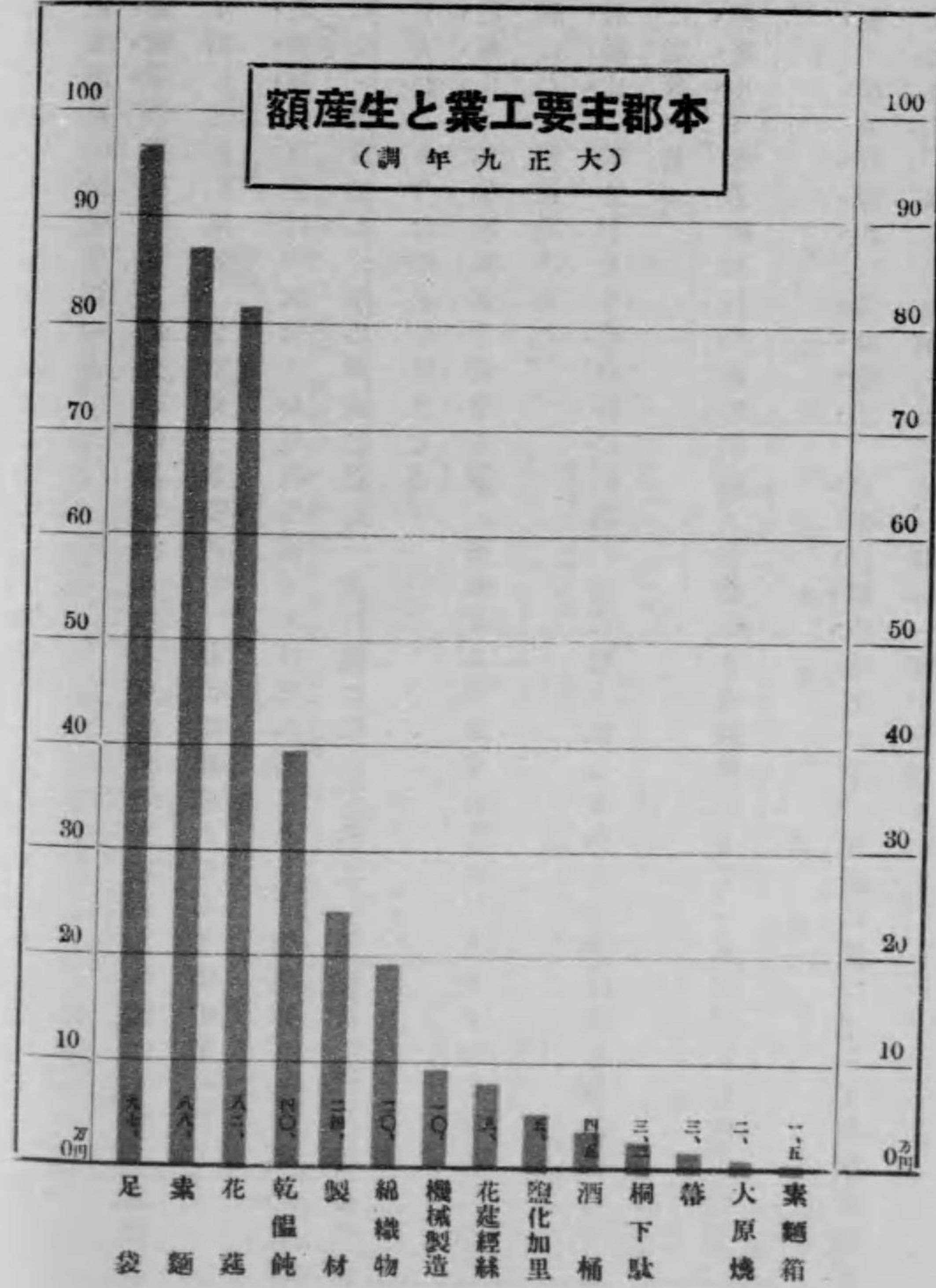
船穂鑛山 船穂村寶滿寺の東南麓、傾斜せる田畑中にあり、大正六年の發掘に係る銅鑛にして規模稍大なり。

杉谷鑛山 鴨方村東小坂杉谷の街道、川に沿うたる東側の山裾にある銅鑛にして僅かに規模を具ふ。

金堀鑛山 鴨方村杉谷街道の西側、山腹にある銅鑛にして、其規模杉谷鑛山に似たり。

其他 松井谷鑛山、地頭鑛山、烏の江鑛山等あれき、僅かに鑛山として名稱を附するに止まる。委しくは第一五三節、鑛山一覽を参照すべし。

節 五 九 一 第



第五工業 (高田原田兩委員)

二、綿絲並織物業

第一九六節 綿絲紡績の七百八十五萬圓を最とし、綿織物タオル等の年産額貳拾萬圓、何れも相當の販路を有し、堅實なる發達をなせり。(大正九年調)

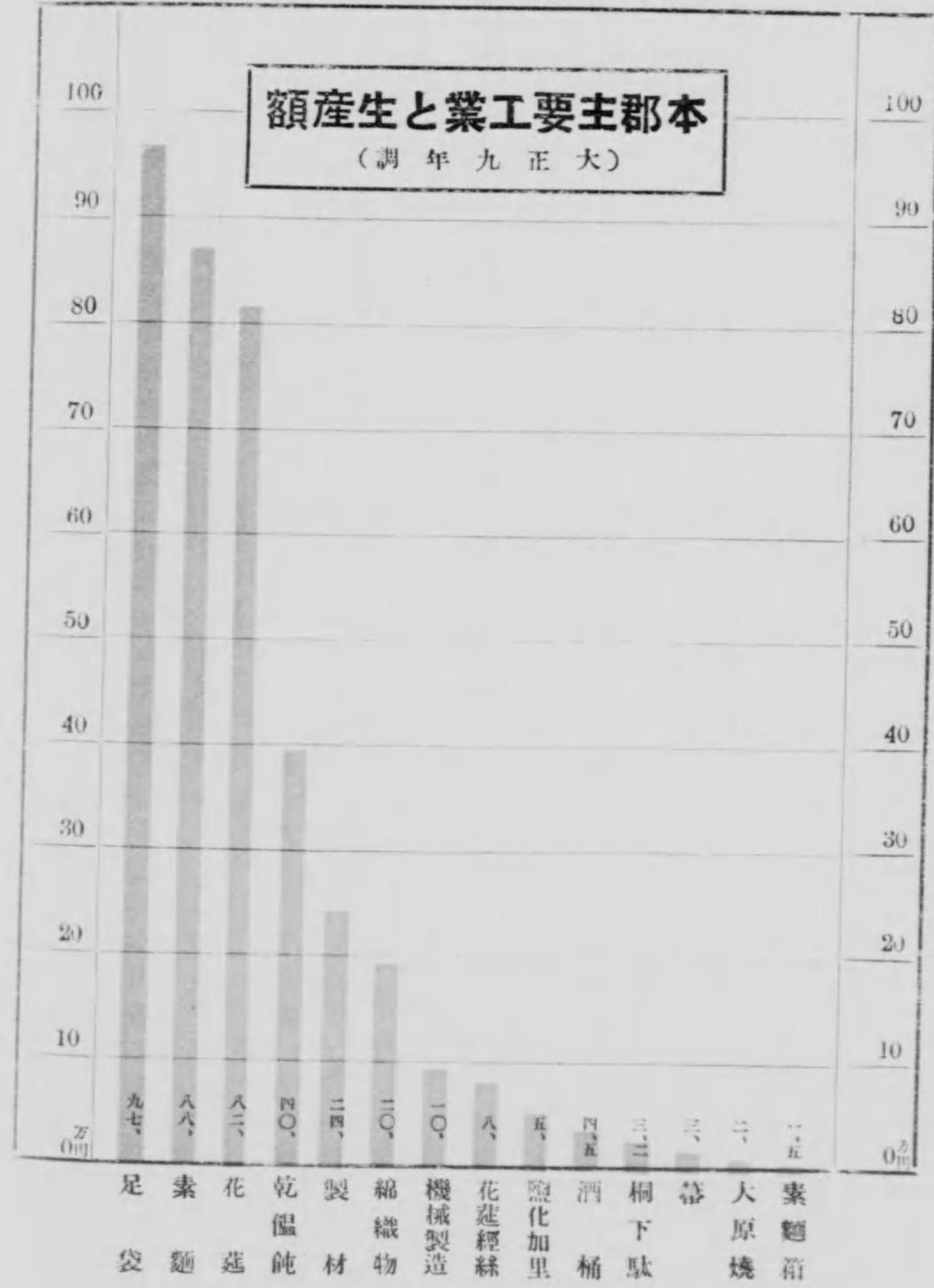
- 食敷紡績會社玉島工場 六、二六二、八八〇^円
- 半田綿行紡績部 一、五九一、四五〇
- 三益商會(白木綿) 四五、〇〇〇
- 大正タオル株式會社 六二、〇〇〇
- 小野株式會社(タオル、織布) 三四、〇〇〇
- 片山織物工場(小食洋服地) 一九、七三二
- 小野製綿所(繻帶材料) 六五、〇〇〇

三、化學工業

第一九七節 本業は玉島町に唯一の法人組織、中塚塩化加里製造所あり。歐洲戰亂勃發以來發展して、生産額全國に冠たるものありしが、今や縮少して大正九年調による生産額五萬圓なり。

第五工業 (高田原田兩委員)

第一九一節



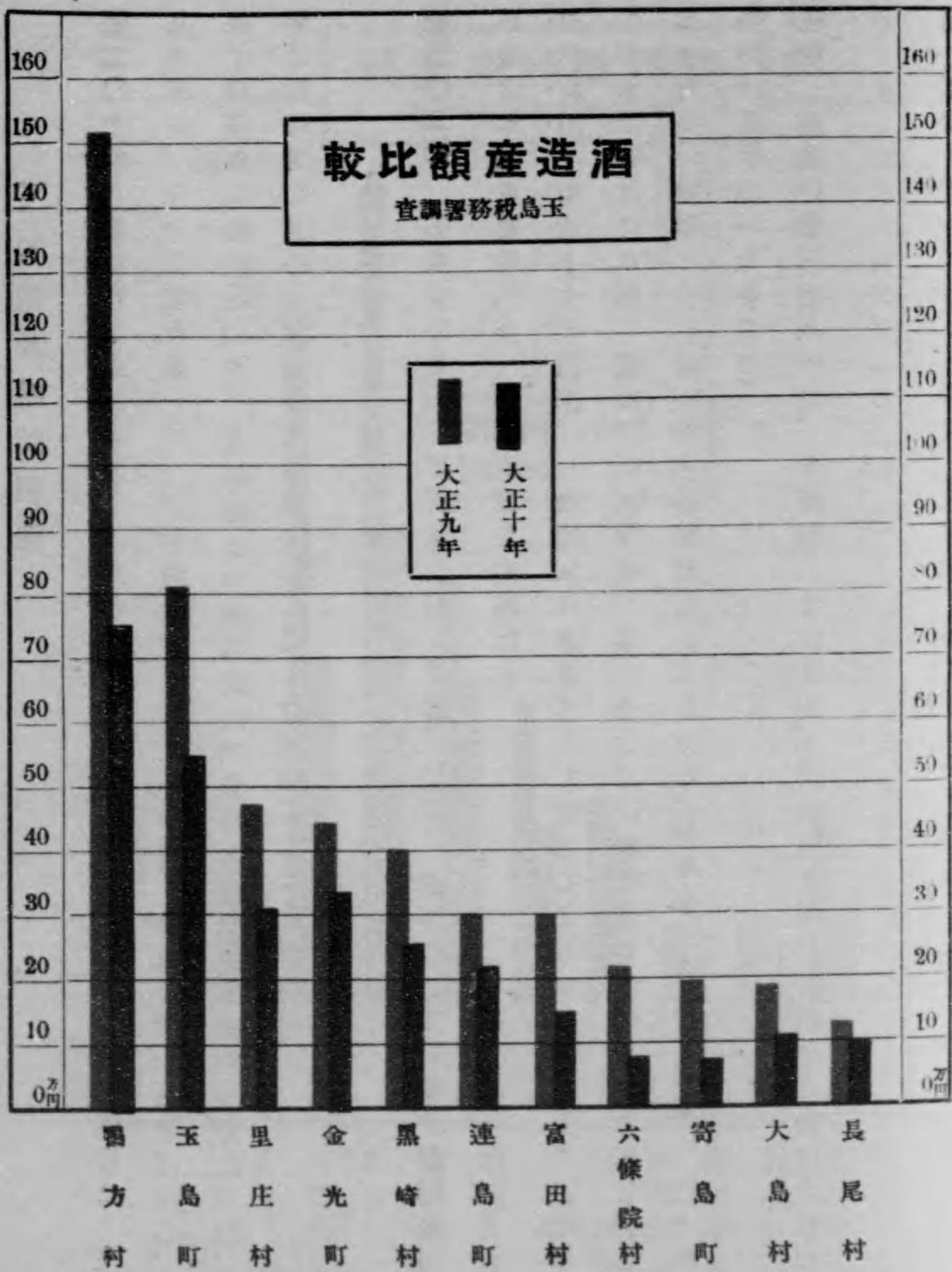
二、綿絲並織物業

第一九六節 綿絲紡績の七百八十五萬圓を最こし、綿織物タオル等の年産額貳拾萬圓、何れも相當の販路を有し、堅實なる發達をなせり。(大正九年調)

- 食敷紡績會社玉島工場 六、二六二、八八〇^四
- 半田綿行紡績部 一、五九一、四五〇
- 三益商會(白木綿) 四五、〇〇〇
- 大正タオル株式會社 六一、〇〇〇
- 小野株式會社(タオル、織布) 三四、〇〇〇
- 片山織物工場(小倉洋服地) 一九、七三一
- 小野製綿所(繻帶材料) 六五、〇〇〇

三、化學工業

第一九七節 本業は玉島町に唯一の法人組織、中塚塩化加里製造所あり。歐洲戰亂勃發以來發展して、生産額全國に冠たるものありしが、今や縮少して大正九年調による生産額五萬圓なり。



二七三

大東郡	宮崎	長門	大宮	奈波	神奈川	福井	岡山	山鹿	熊本	福本	販路	加歩	里合
一	一	一	二	二	三	三	四	五	五	七	七	二	五
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五

大正元年	同四年	同五年	同九年	同十年	同二十年
一四〇〇石	一五〇〇石	一四〇〇石	一四七〇石	一四七〇石	一四七〇石
六二〇〇石	七三〇〇石	七三〇〇石	七三〇〇石	七三〇〇石	七三〇〇石
二八四〇石	二八四〇石	二八四〇石	二八四〇石	二八四〇石	二八四〇石

四、製陶業と瓦製造

第一九八節 里庄村大原焼は備中の特産にして、製造戸數五十六、精巧品を作れるもの二戸、年産額二萬圓に達せり。而して瓦製造は郡内十一ヶ所あり。産額五千圓のみ。(大正九年調)

五、機械製造

第一九九節 本業の主なるものは製塩釜諸機械、眞田組機械、花菱機製造、製麵機、農具製造等にして、其年産額十萬圓に達せり。(大正九年調)

六、清酒及醬油製造

第二〇〇節 本郡の清酒は關西に於ける醸造地ミして西灘の稱あり。其製造戸數五十五を算し、生産額四萬七千三百石(四百九十七萬圓)を産出す。(大正九年調)

大正十一年調、本郡醬油製造高は約一萬二千石にして、兒島岡山に亞ぐ縣下第三位にありて、正に縣下仕込高の十分の一を産す。

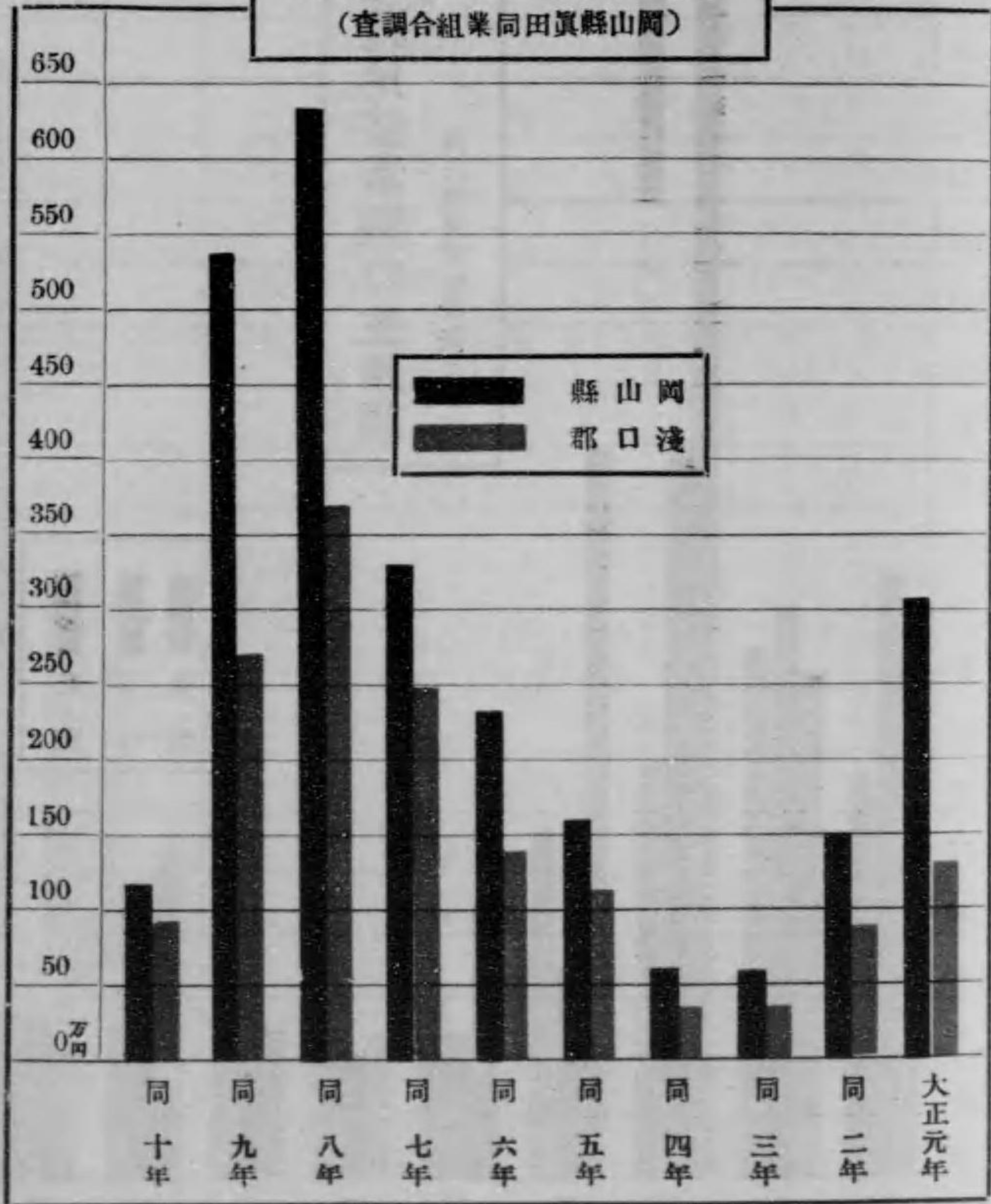
二七六

足袋

足袋工場又は職場數十、製造戸數四十七戸、製造高二百六十二萬足、産額九十七萬圓に達せり。(大正九年調)

麥稈眞田産額

(査調合組業同田眞縣山岡)



(大正九年調)

廣島山口 香川等より移入し、製品は大坂和歌山 廣島山口 等に移出し、備中 株式会社 鴨方 驛の北三 町の所に あり

花菱

麥稈眞田

花菱

第二〇二節 主要なるものは麥稈眞田紐、花菱、足袋、帯等にして、就中麥稈眞田、花菱は本縣重要輸出品にして又其主産地たり。

麥稈眞田 明治十七年以來、一般的家内副業として製造し來れるもの、去大正七年の好景氣時代には縣下産額三百萬圓中、其三分の二は實に浅口郡の占むる所に係る。其後財界の變動と共に近時頗る衰頽せしが大正九年、年産額二百六十萬圓にして、尙郡内工業中の一位を占む。

花菱 製造戸數三百八十九、年産額八十二萬圓、河内町は縣下に於ける殷盛の地たり。多く歐米に輸出せらる。(大正九年調)

帯 従業戸數百八十二、年産額三萬圓、製造高七十四萬本に達し、原料は備中北部

七、素麵及餛飩製造

第二〇一節 素麵及干餛飩は遠く天正年間より起れるものにして、備中素麵として其名高く、今や従業戸數三百、年産額素麵は八十八萬圓、餛飩は四十萬圓に達し、縣下總産額の過半を占め、其販路は中國四國九州畿内北陸北海道滿鮮地方に及び、製品松の雪の稱呼は素麵の代名詞として汎く賞讃せらるゝに至れり。

八、雜工工業

杜氏

杜氏 醸造地西灘の稱ある本郡は備中杜氏の養成地を以て亦有名なり。之が従業人員三千八百人を算し、収入額七十一萬圓に達せり。(大正九年調)

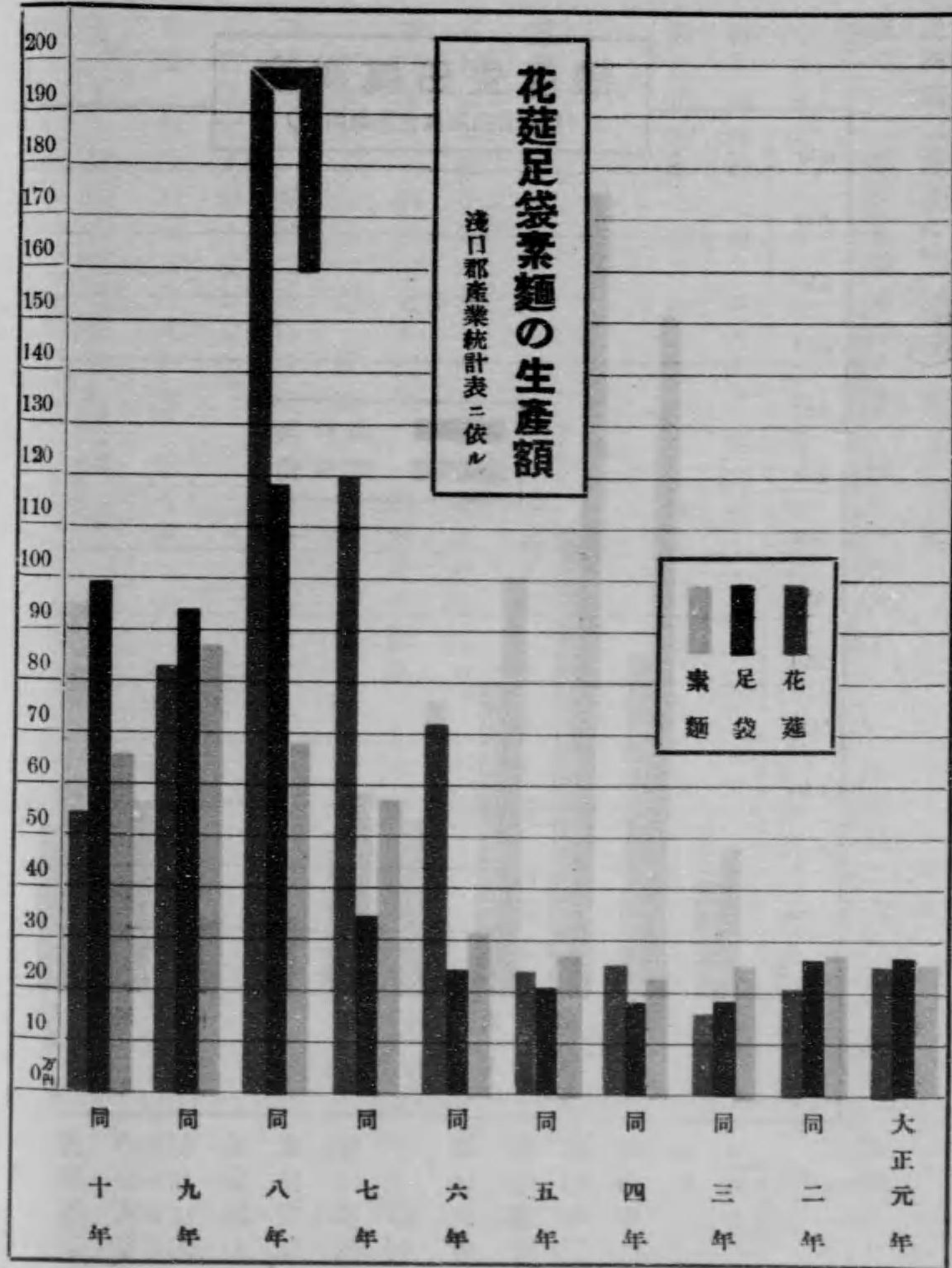
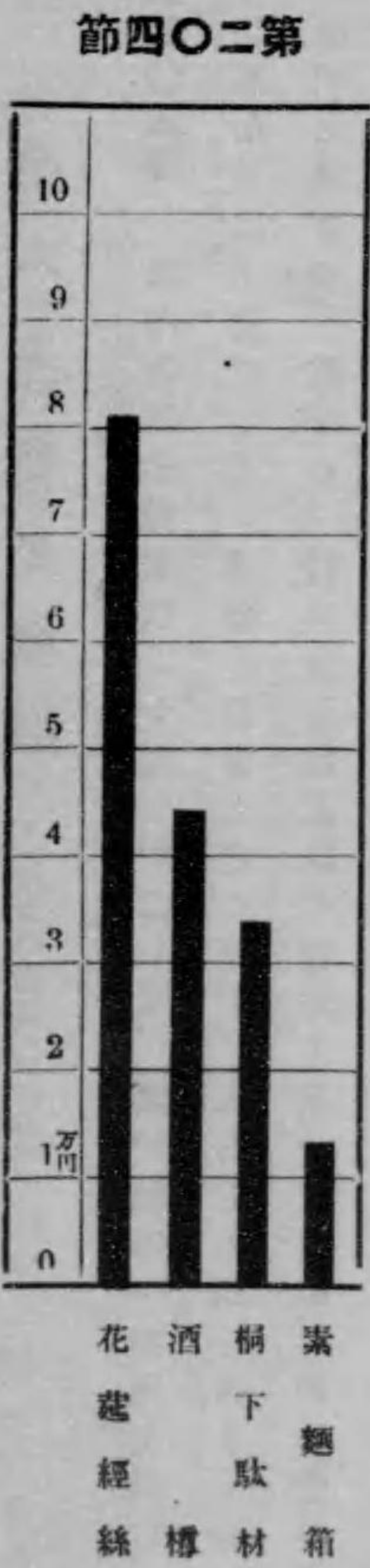
杜氏の起原 傳説によれば三百年前、大島村正頭より、兵庫縣灘地方へ出稼し、技術を習得して杜氏となれるもの、漸次増加し、世人呼びて大島杜氏と稱するに至れり。

出稼地方 縣内、廣島、愛媛、兵庫、島根、香川、鳥取、静岡、山口、熊本、大分、滿鮮諸地方。杜氏の機關 累年酒造講習會、自釀清酒品評會、杜氏組合等を設けて、技術の進歩向上を計れり。

九、製材業

第二〇三節 主なるものは田中製材所、山本製材所(玉島)、小野製材所(長尾)にして、産額二十四萬圓に上れり。(大正九年調)

一〇、其他諸工業 (大正九年調)



第六 商業と金融 (高田委員)

商業

第二〇五節 郡内の商業従業数二千九十戸にして、總戸数の一割強を占む。而してその主なるは玉島にして、連島寄島金光之に亞ぐ。而して玉島を除きて他は概ね地方取引に過ぎず。然かも一般の取引状況は小賣商大部分を占め、卸小賣の兼業をなすもの之に次けり。(大正十年調)

金融機關として、銀行本支店及派出所を合して二十三、信用組合二十二、外に質屋金貸業者五十四戸ありて其取扱高多額ならずいへども、之が利用者比較的多數にして、従つて高利に苦しむもの多きを見る。只信用組合加入の戸數四千三百八十八戸ありて郡内現住戸數の二割二分強を占め、稍之が調節に効あらんも、大島寄島町は未だ其設立を見ざる等、その普及せざるものあるは金融上の一大缺點とす。(大正十年調)

金融

金融機關及貯金 (大正十年三月)				
種別	講	數	口數	一ヶ年掛込總金高
無盡	一		二	1100
賴母子講	一	一六	五、五九九	六〇、六一五
貯金講	一	五五	一八、三五九	一一一、三四三

貯蓄組合		
合	計	數
	五二	四、五〇一
	三三四	二八、四六一
		一九五、六〇八

第二章 陸上交通

第一 道路 (田中、富田、原田三委員)

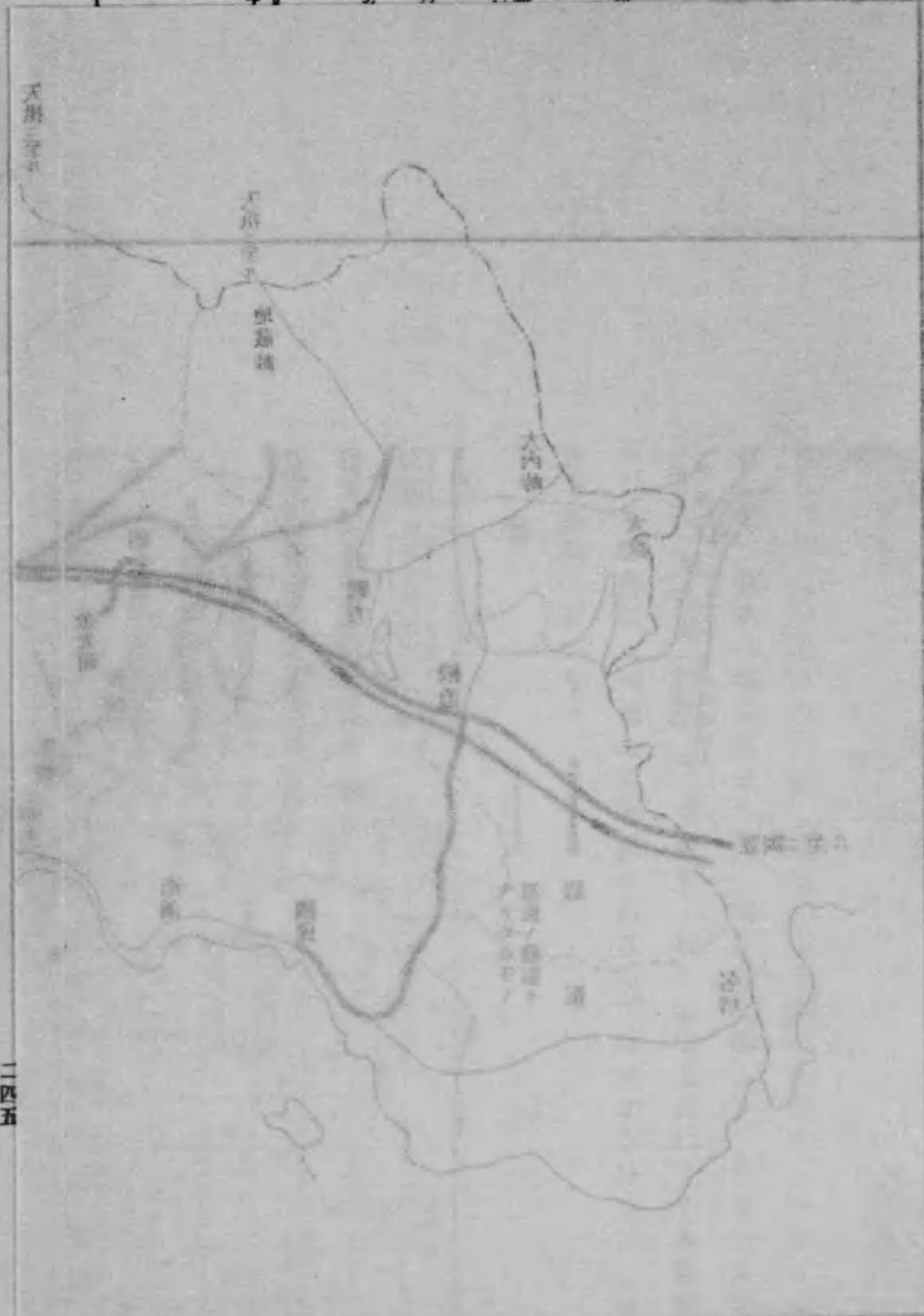
縣道 (其二)

第二〇六節

- 一、岡山より笠岡に至る。郡内里程六里十一町強。
- 二、玉島より長尾を経て箭田に至る。郡内里程一里二十二町強。
- 三、寄島より福井峠を経て鴨方停車場に至る。里程一里二十二町弱。
- 四、金光停車場より御影橋を経て金光町に至る。里程五町弱。

縣道 (其二) (郡制廢止のため、郡道より新に編入せられたるもの)

- 一、西浦元標より江長を経て倉敷に至る。郡内里程、三十一町半。
- 二、西浦元標より霞橋上成福島を経て玉島停車場に至る。里程一里二十五町半。
- 三、西阿知より又串渡船場、船穂を経て長尾橋に至る。里程一里十八町強。



- 四、鴨方中町より深田、小坂西(大内)を経て井原町方面に至る。郡内里程一里。
 - 五、鴨方停車場より鴨方地頭上、地藏峠を経て矢掛方面に至る。郡内里程一里三十町。
 - 六、玉島元標より四ツ土井、道越、道口、牛野原、富峠を経て矢掛方面に至る。郡内里程、一里二十町強。
 - 七、寄島早崎港より福井峠、殿迫、岩村、小坂西字谷井を経て小田郡小田町方面に至る。郡内里程二里。
 - 八、玉島より船宮、勇崎、黒崎、沙美、南浦、安倉を経て寄島に至る。里程三里十八町。
 - 九、寄島早崎元標より鏡、竹田、名切、小黒崎を経て笠岡方面に至る。郡内里程一里二十九町。
- 郡内の縣道十三路線、此總里程二十四里四町
 町村道の總里程、四百八十七里十二町
 橋梁、六百十七ヶ所
 渡船場、七ヶ所

米	四八七、八八八
獨	六四七、七〇〇
露	六三九、八〇〇
印度	五七五、七〇〇
佛	五二二、三〇〇
加奈陀	四九五、九〇〇
埃洪	四一九、五〇〇
英	三八三、五〇〇
アルゼンチン	三五〇、〇〇〇
澳洲	三二六、二〇〇
ブラジ	二六六、四〇〇
メキシ	二五九、九〇〇
コ	一八二、五〇〇
伊	一八二、五〇〇
シベリヤ及中央アジア	一五〇、〇〇〇
瑞典	一四九、五〇〇
日本	一四二、二〇〇
支那	一一〇、〇〇〇

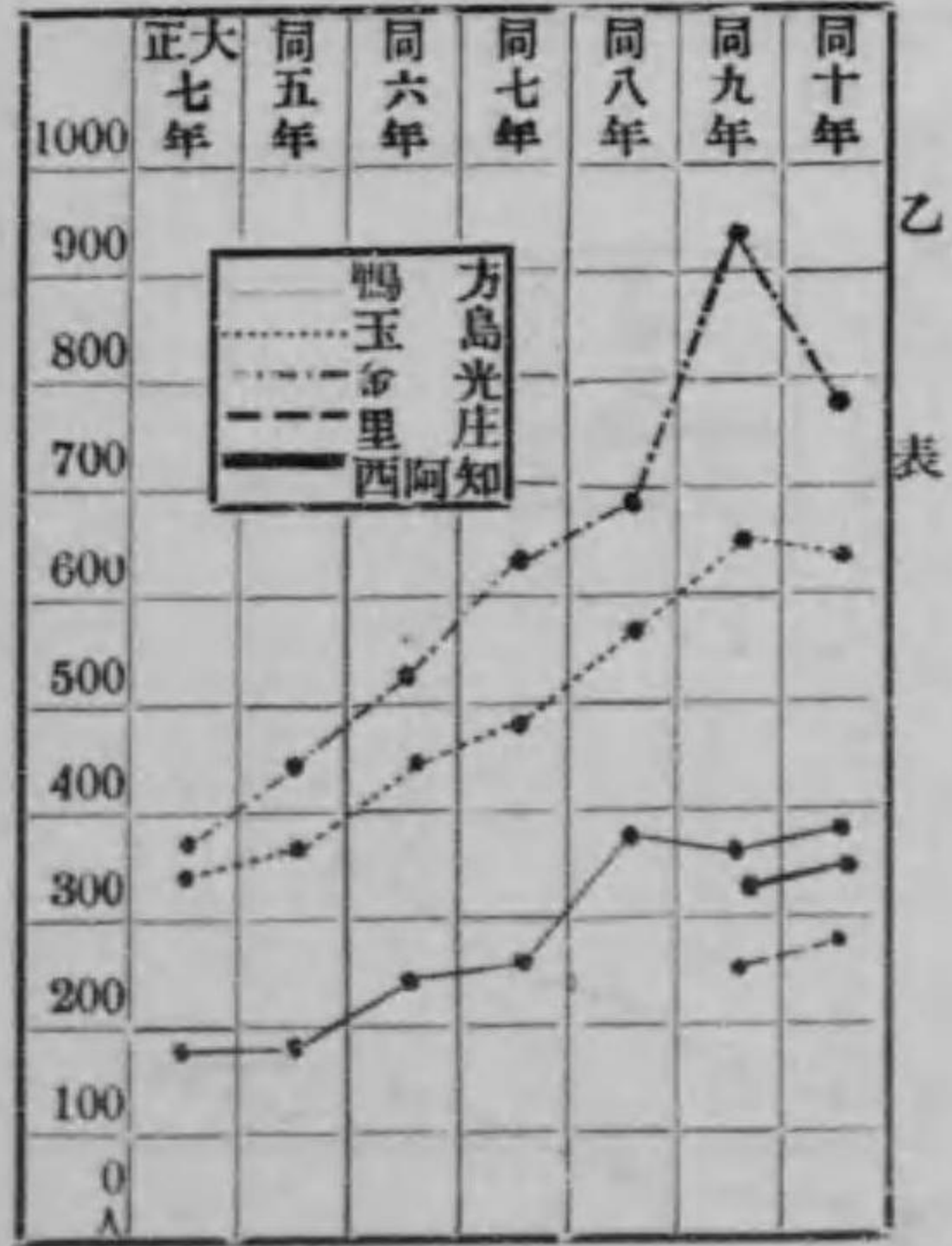
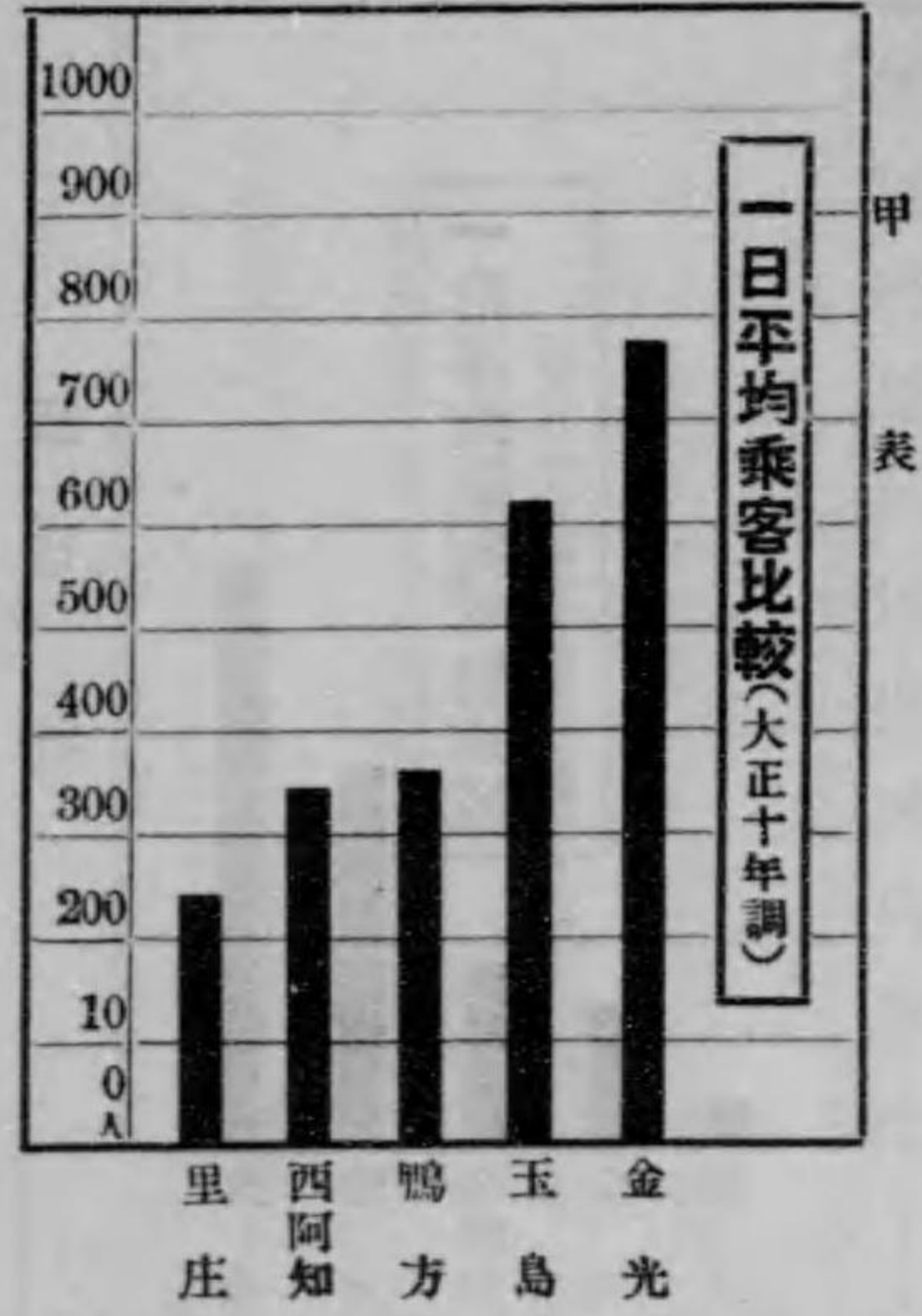
第二 鐵道

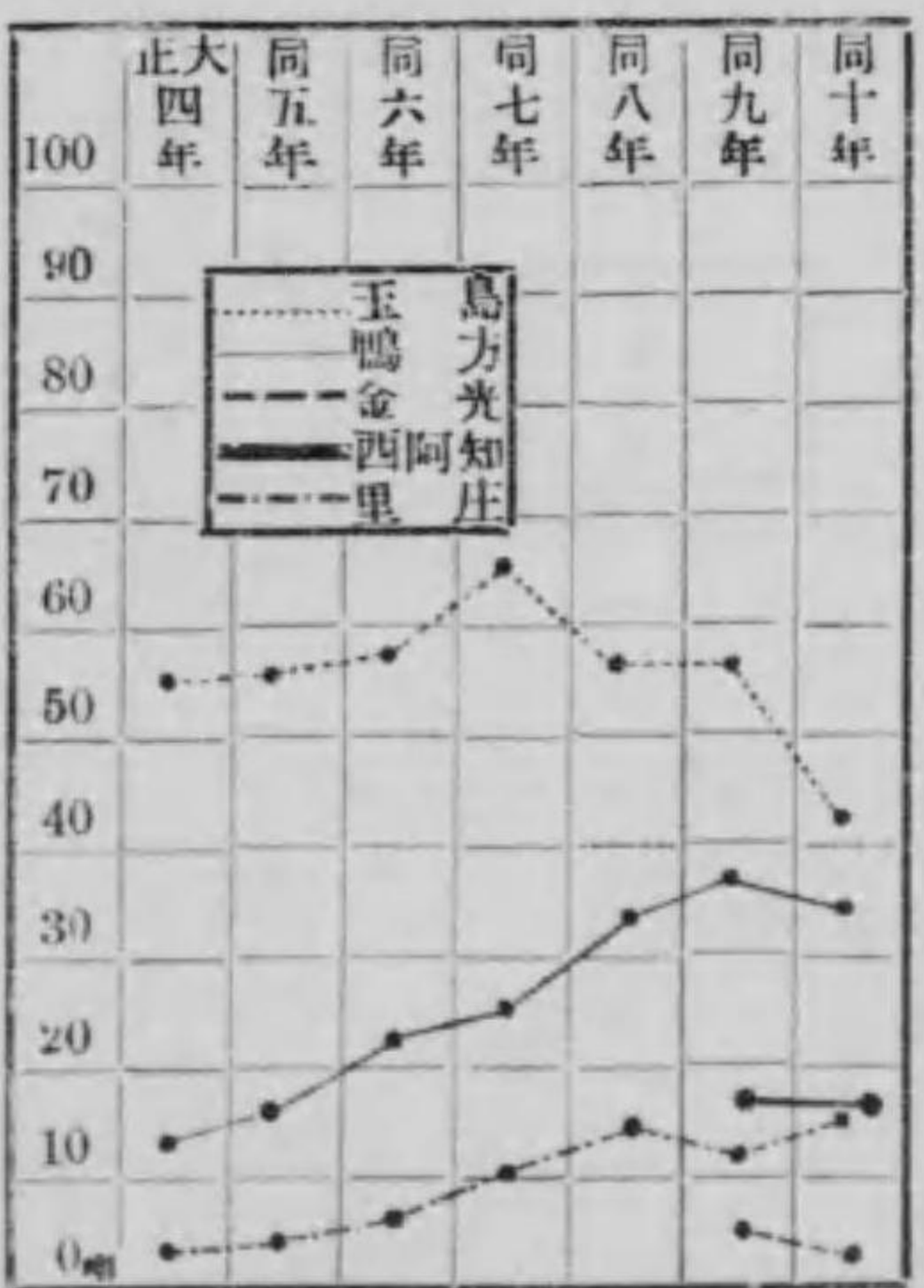
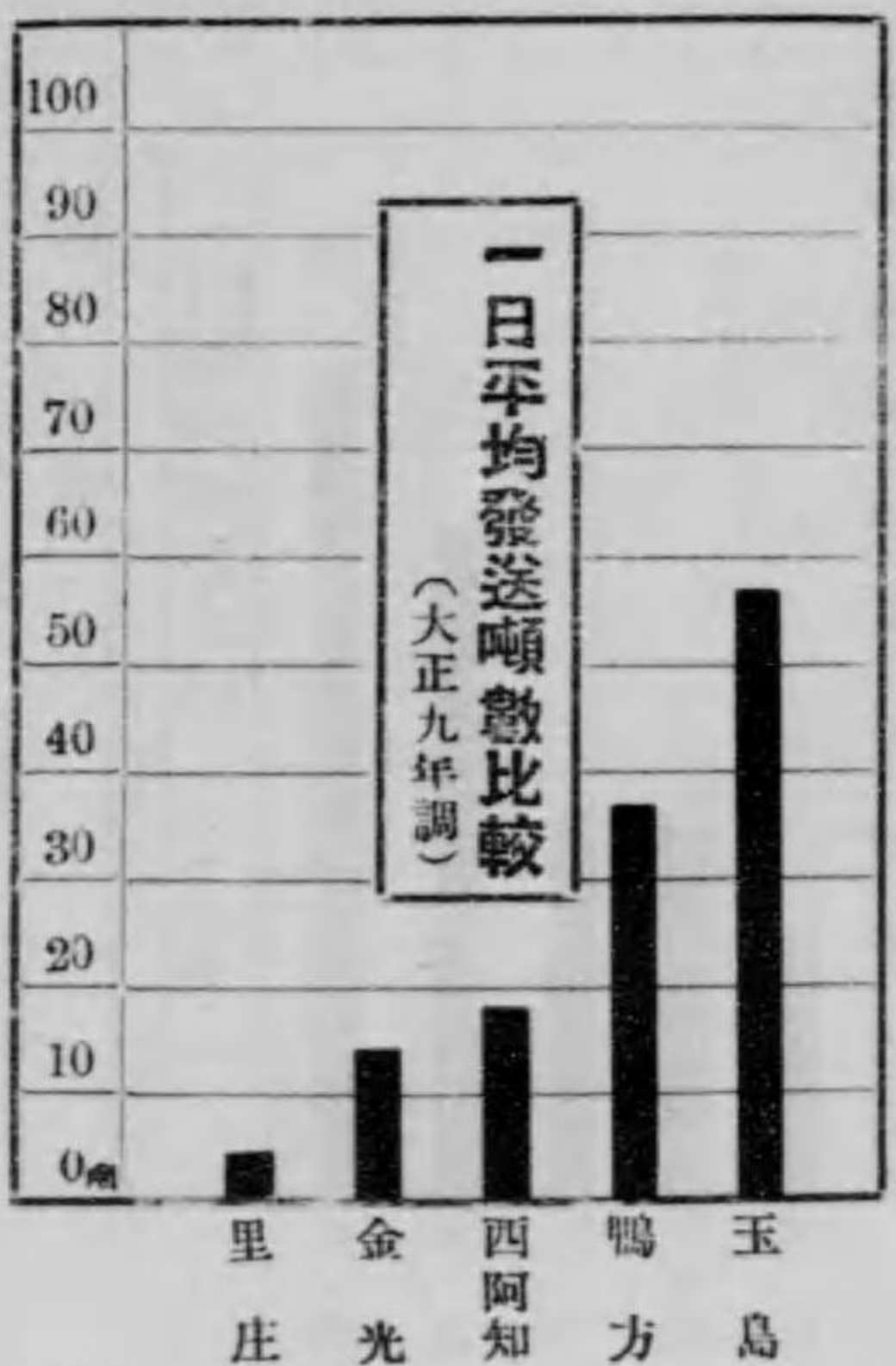
(田中、原田兩委員)

一、概 說

第二〇七節 我國主要幹線(山陽線)が本郡を貫通して運輸を開通せしは實に明治二十四年七月十四日にして、當時の停車場は玉島、鴨方の二驛なり。其後金光驛(三十八年八月)西阿知驛(五月廿五日)、里庄驛(同年十月)、開設せられて是等五驛は今や本郡開發の大動脈をなせり。而して郡内に五ヶ處の停車場が接近して設置せられしこゝは、産業の發達人口の稠密を語れるものなり。

二、旅 客





第三 鐵道と自動車との聯絡

(原田委員)

第二〇八節

- 一、玉島驛を起點として玉島・箭田・矢掛間。
- 二、西阿知驛を起點として連島に至る。
- 三、金光驛を起點として玉島及沙美に至る。
- 四、鴨方驛を起點として寄島に至る。(以上大正十四年調)

第四 内陸水路

(原田委員)

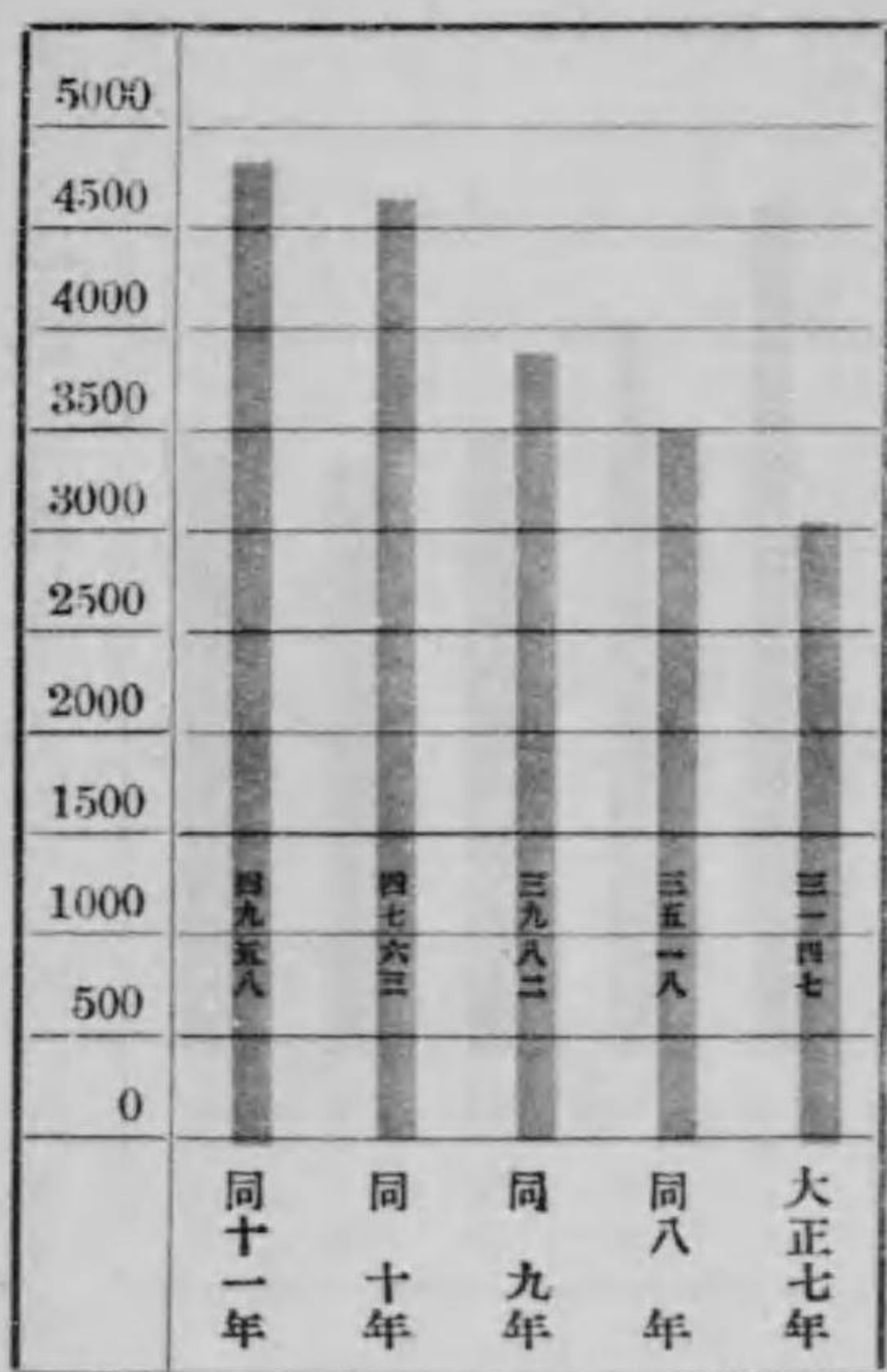
第二〇九節 本郡の内陸水路は鐵道に次ぐ重要位置を占むものにして、河川と運河とあり。高梁川は河口より十九里の間、高瀬舟を通じ、備中北部貨物の唯一輸送機關たり。運河は船穂村水江より玉島港に至る、幅三間、長さ二里十四町に達し、萬治二年大森元直が水谷勝宗の命を奉じて開鑿する所、高梁川と共に重要な輸送機關たり。

第五 其他

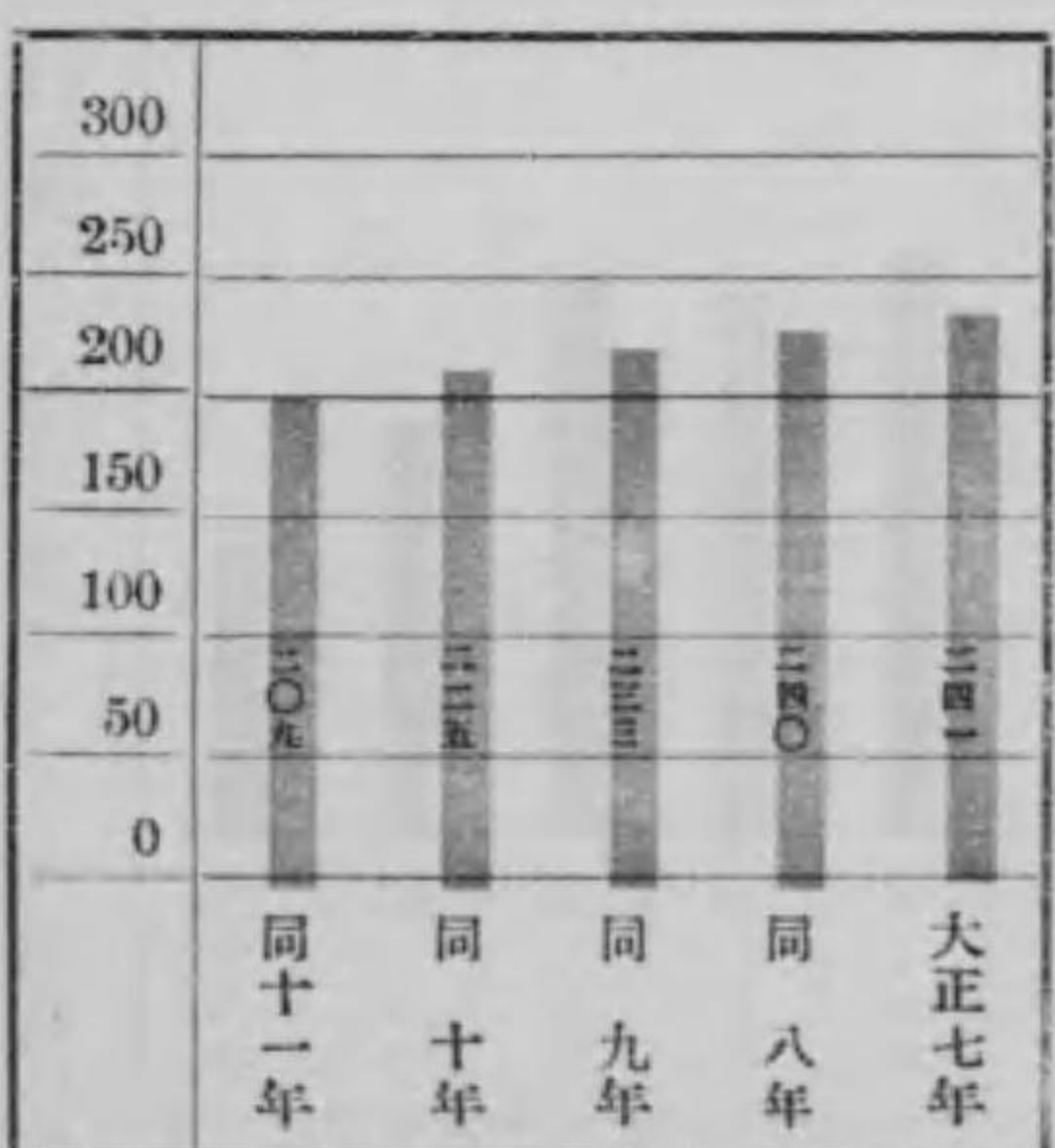
(田中委員)

第二一〇節

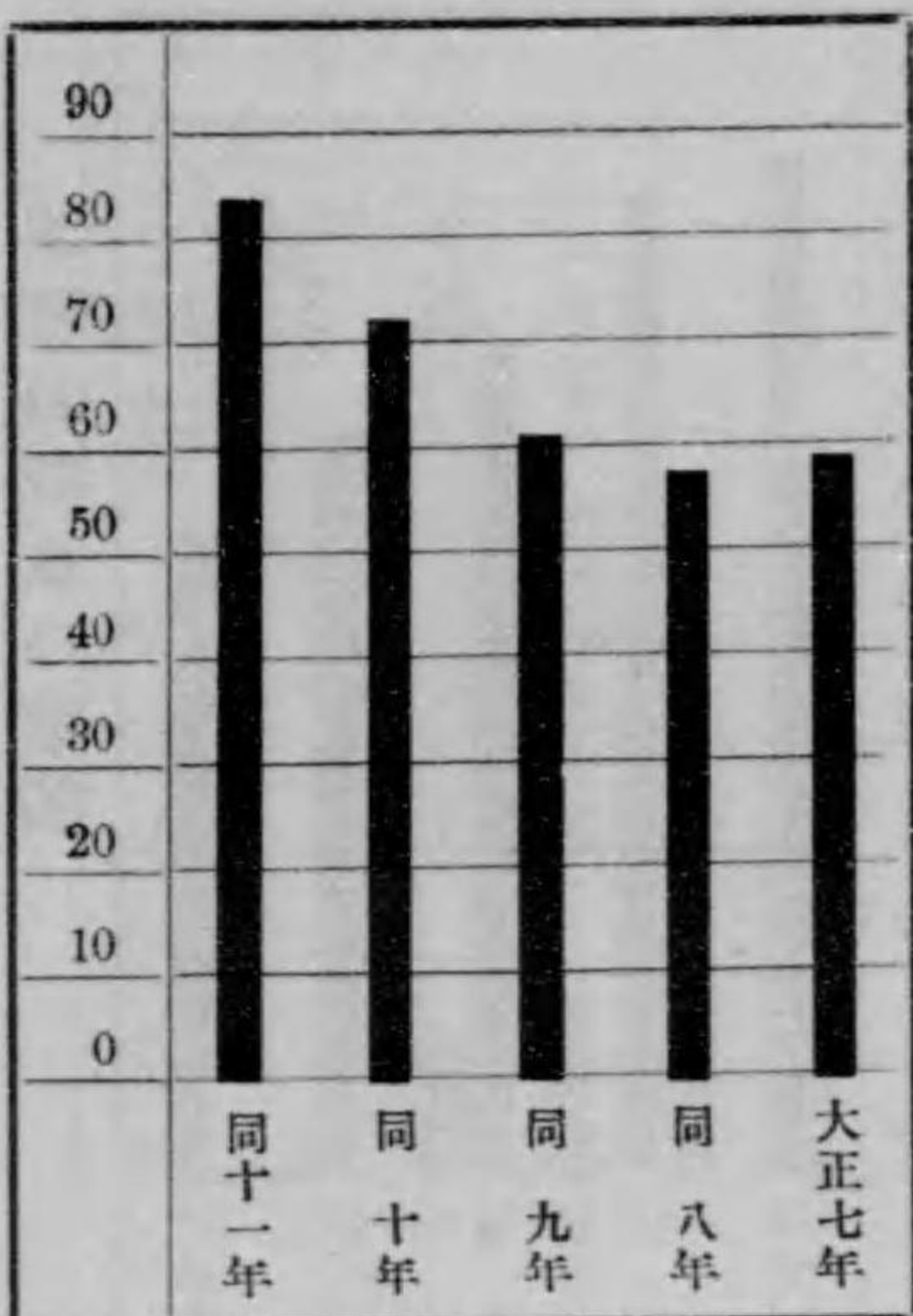
本郡自轉車の増加



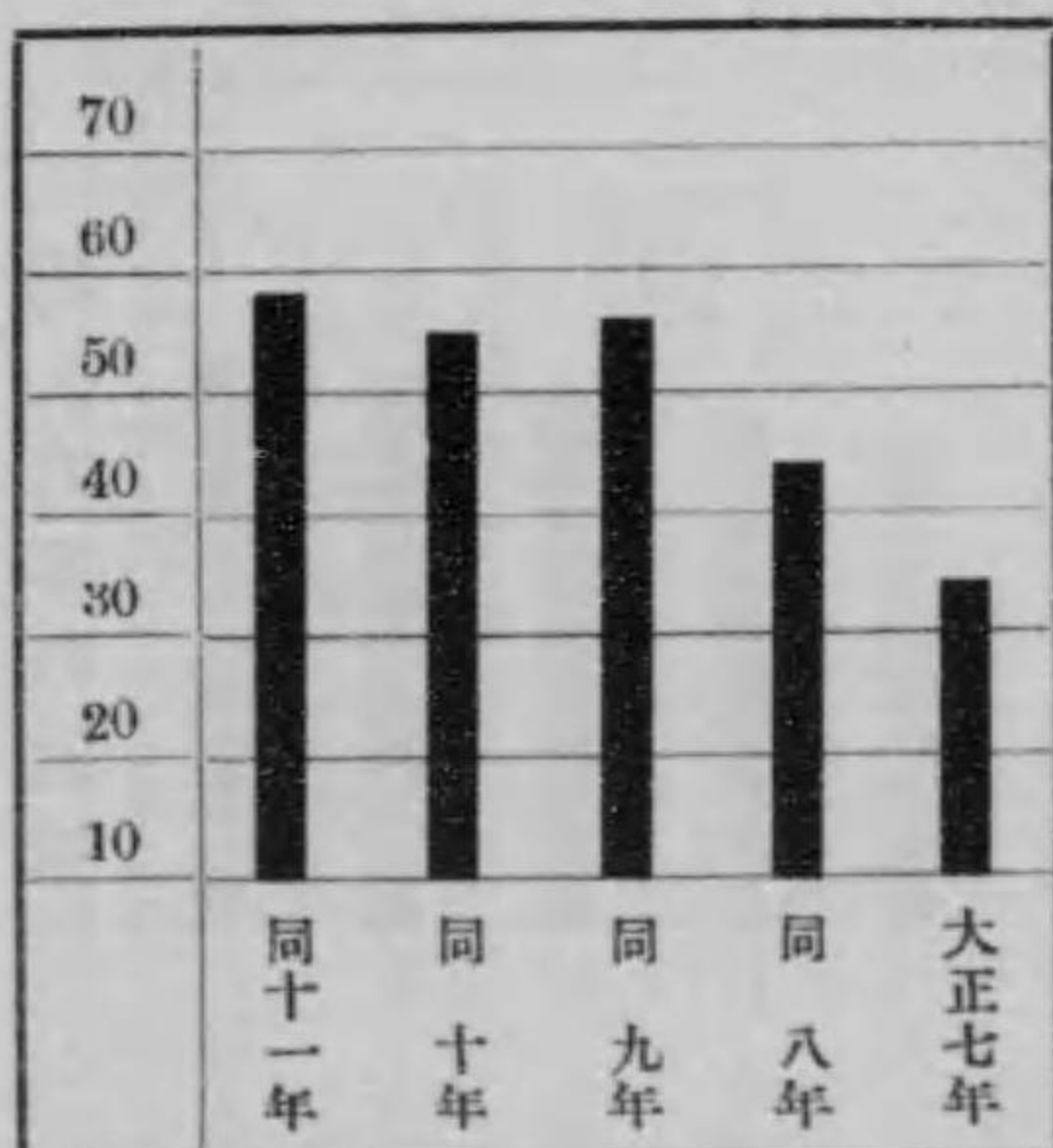
同人力車の遞減



本郡の馬車



同牛車



二四八

第三章 海上交通

(原田委員)

第一 本土四國聯絡

第二一節 宇野高松間は最新式タービン機關を有する二隻の汽船配置さるるに至りて、十一海里の航海時間五十五分間に短縮せられ、船内の設備亦完備するに至れるものあるに反し、玉島多度津間十九哩の航海時間二時間を要し、一隻の汽船によりて毎日二回の往復あるのみ。

玉島發	午 前		午 後	
	發	到	發	到
多度津發	同十時半	同四時半	午後二時	同四時半
貳等賃金	壹圓五拾錢			
參等賃金	壹圓			
但、午後の航海は廢止するこゝあり				

大正十一年調

第二 船 舶

第二二節 大正十一年調、郡内船舶數分配の現況左の如し。

汽船	五噸以上	一七隻	一七〇噸
帆船	五噸以上	七五隻	八三九噸
和船	五十石以上	七隻	
小船		六六九隻	

第三 港灣の設備

一、總 說

第二三節 從來港はその條件だに具備せば乃ち良港と呼ばれしも、今や産業及交

二四九

通の發達、船舶の資本價值高くなるに至りて、港としての價值亦變化するに至れると共に、近世的傾向は益々港灣の設備に巨大の資本を投じて、港の條件を一層完全に、且有効ならしむることを要求するに至れり。然るに郡内の諸港灣が今は悉く衰頹せる所以のもの、全く如上の必然的要求に伴はざるものあるに依る。

二、玉島港

第二四節 運輸交通、貨物集散の關門にして、内陸水路及海路交通上の衝に當りて備中第二の商港たり。明治二十四五年頃を極盛時代として、爾後漸次衰頹し、今日の有様なる。其原因の主なるものをあげれば

甲、交通上の變化

(イ) 安全にして迅速を尙ぶ文明的海陸交通機關の發達は、海には汽船、陸には鐵道發達したるため、遲緩なる舊式の千石船(北前船)を驅逐し、玉島港商權の過半は神戸港と山陽鐵道とに奪はれたるこゝ。

(ロ) 宇野灣の築港は高松との間に四國聯絡を開かれてより、玉島と四國との聯絡交通を不況に陥らしめ、玉島港を零落せしめたるこゝ。

乙、産業上の變化

(イ) 棉花の栽培は東海道、中國筋一帶盛に行はれしものにして、郡内の如き亦到る所盛に之を耕作し、玉島早崎兩港は之が集散地として隆昌を極めしに、今や其面影だもなきに至りしこゝ。

(ロ) 北海道に於ける鯨漁獲は累年減少して往年の面影なきに至りしより、之が中繼港たりし玉島港の不況に陥るは當然なるこゝ。

(ハ) 科學の進歩は人造肥料、天然肥料の發明を促し、以て鯨滓の代用たらしむるに至らしめしにより、鯨滓の大集散地として隆昌なりし玉島港の悲運に陥るは當然なるこゝ。

以上の事實を以て之を推考するに、姑息の浚渫は以て巨船の碇泊を容易ならしむるの時なかるべく、又地理的關係上、宇野港とは到底對抗するを許さざるものあり。山陽線玉島驛を市街に接續せしむるは玉島振興策上、一要件たるを失はざるも、尙以て頹勢を挽回するに足らず。世人動もすれば、玉島港今日の衰頹は港の埋没と停車場の遠隔とが其主因の如くに考ふるものあるも、こは一を知りて二を知らざるもの云ふべし。

要するに、玉島港發展の策は他なし、世界的文明工業を勃興せしむるこゝ是なり。只之が適當なる種類の撰擇、施設方法如何にあるのみ。

大正七年調、船	
船出入隻數	汽船 帆船
宇野	六〇七 三三
笠岡	三五六 二九
玉島	一八九七 二〇四
田ノ口	一六七四 一〇
下津	一八〇 一〇〇
小井	七八五 二五
日比	五七九 三五

三、寄島港

第二一五節

一に早崎港を呼ぶ。本郡第二の港にして、維新の頃鴨方藩の領地に一の港灣なきを不便とし、藩主の力によりて築港せられしものにして、玉島港と共に一時繁榮せしが、爾後漸次衰頽して玉島港と同一運命に陥れり。

現今港内埋没して満潮時七・八尺、干潮時は干瀉なるが故に船舶の出入最も不便にして、僅かに肥料、材木、石炭等の輸入あるのみ。

本港は港としての条件を具備せざるが上に、陸上との交通を阻害するの位置にあれば、商港として活躍すべき資格なく、唯前面に島を控ふるを以て、之を浚渫して堤壁港として船舶の出入を便利ならしむる程度に止め置くに過ぎざるべし。(第一六〇節参照)

第四章 通信

(原田委員)

第一郵便

概説

第二一六節

概説 郵便交通の發達程度は、其地の住民の經濟及文化の程度を計る尺度なり。而して人口一人に對する郵便物数の最多なるは米國にして、瑞西、英、和、獨、等之に亞ぎ、我國は世界第六位にありて伊國の上にある。

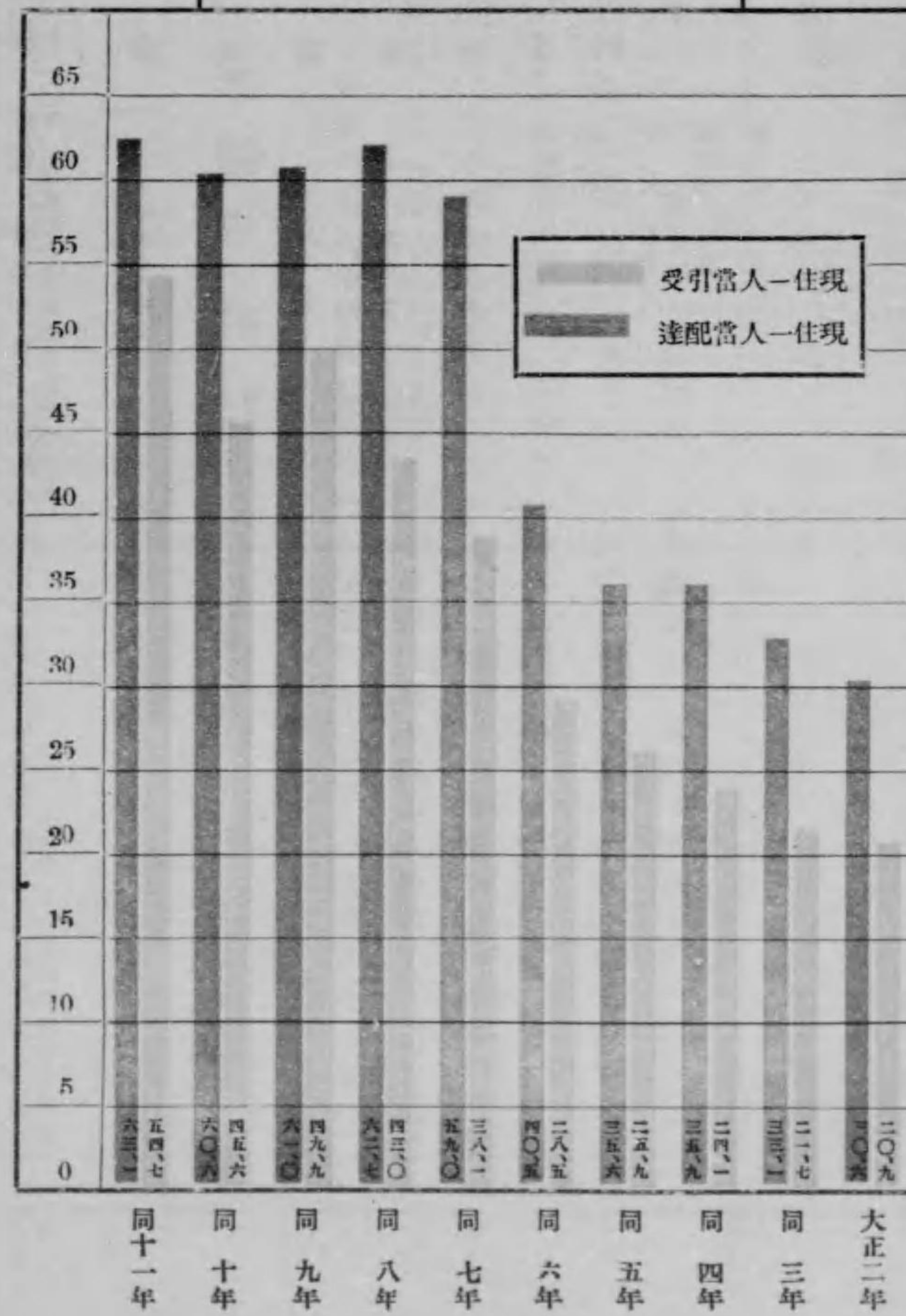
世界各國人口一人に對する郵便物數
(一九二〇年、萬國聯合郵便總理局年報抄出)

伊國	五九、〇	獨逸	八四、四	和蘭	九三、六	英國	一一一、六	瑞西	一二六、二	米國	一四七、三
日本	本土 六〇、三 臺灣 一四、八 樺太 八七、八 關東州 五五、九 朝鮮 七七、七										
			六年	五年	四年	三年	大正二年				
			三〇、八	二八、八	二六、七	二五、一	二四、九				

岡山縣人口一人に對する引受郵便物數
(大正七年岡山縣統計書抄出)

郡内郵便局所轄区域		局名	所轄区域	大正十一年郵便物数		計 (通常)
受	配			引	達	
×	玉島	玉島	二二九八四	三三〇九〇	二〇九	三四二六三
×	連島	連島町河内町	六九三六	一一〇七	一一四八〇	一一四八〇
	西阿知	無集配	一一〇七	一一〇七	九八〇	九八〇
	船穂	同	二二二	二二二	三三一一	三三一一
	船穂	同	二二二	二二二	三三一一	三三一一
	長尾	同	二〇七	二〇七	一一三一一	一一三一一
×	金光	金光町黒崎村	一四四〇三	一四四〇三	二五二三〇	二五二三〇
×	鴨方	無集配	一七八	一七八	一六三三	一六三三
×	鴨方駅前	鴨方六條院里庄村	六六四〇	六六四〇	八九五五	八九五五
	里庄	無集配	六八	六八	五五九	五五九
	大島	同	—	—	六七五	六七五
×	寄島	寄島町大島村	四三七七	四三七七	七一五二	七一五二
	黒崎	無集配	八八	八八	一〇一六	一〇一六

(常通) 郡口郵便物数
(調局信遞島廣)



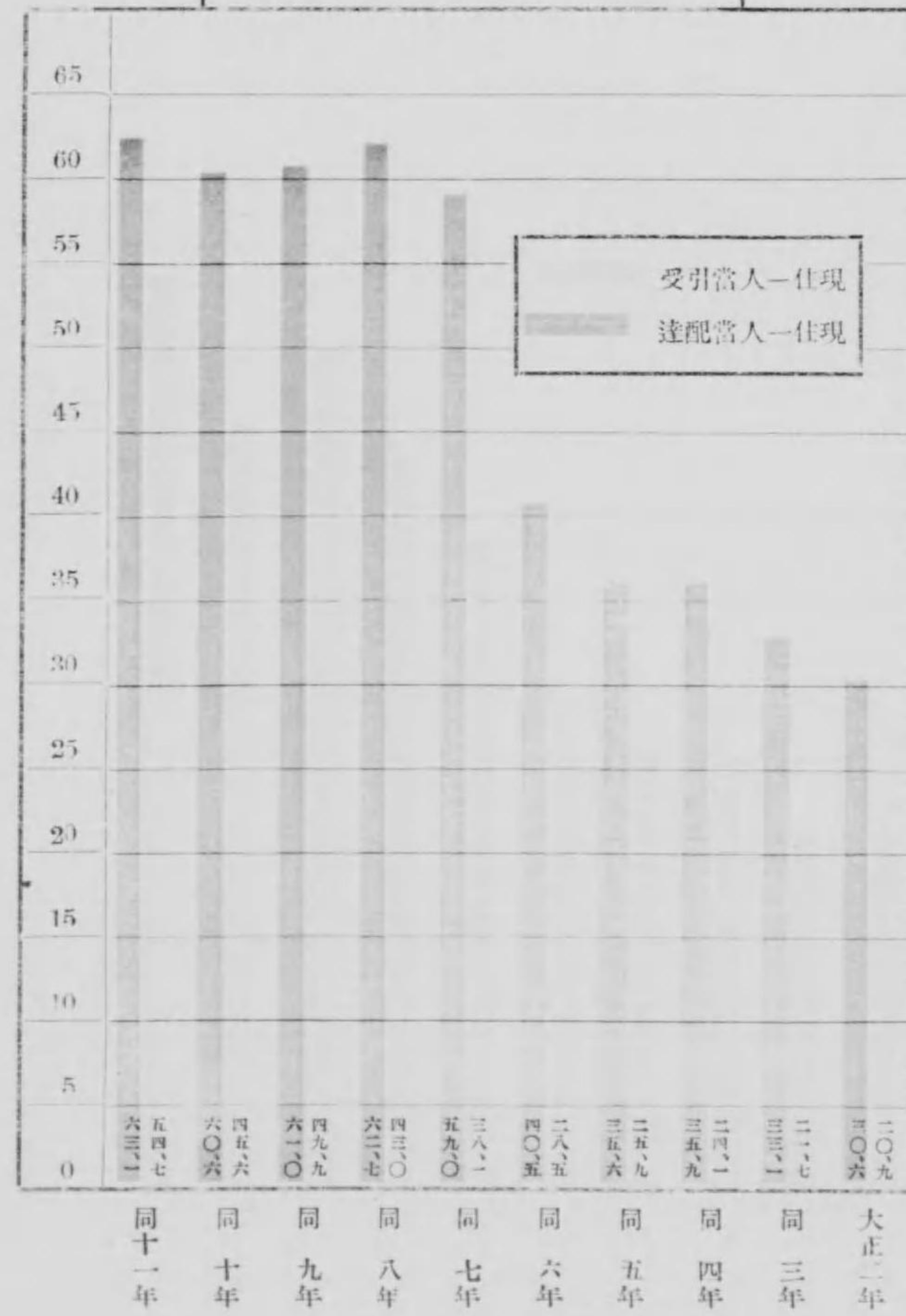
本郡内郵便物数は左表の如し。

(×符は電話交換局の設けあり)

郡内郵便局	所轄区域	引受数	配達数	計
玉島	玉島町船穂長尾富田	一二二七九	二一九八四	三四二六三
× 連島	連島町河内町	四五四四	六九三六	一一四八〇
西阿知	無集配	八七三	一〇七	九八〇
船穂	同	三〇九八	二一三	三三一一
長尾	同	一一〇四	二〇七	一三一一
× 金光	金光町黒崎村	一〇八二七	一四四〇三	二五二三〇
× 鴨方	無集配	一四五五	一七八	一六三三
× 鴨方驛前	鴨方六條院里庄村	二三一五	六六四〇	八九五五
里庄	無集配	四九一	六八	五五九
大島	同	六七五	—	六七五
× 寄島	寄島町大島村	二七七五	四三七七	七一五二
黒崎	無集配	九二八	八八	一〇一六

二五五

(常通) 数物便郵郡口浅
(調局信遞島廣)



本郡内郵便物数は左表の如し。

(×符は電話交換局の設けあり)

二五四

第二電 信

第二一七節 電信の分布、密度、利用は文化の程度及國民の經濟的段階と密接の關係あり。今大正八年に於ける一局所に對する面積と人口とを示せば左の如し。

岡山縣下人口十人に對する電信發數
(岡山縣統計書ニ依ル)
大正二年 四、〇〇
三年 三、七
四年 三、五
五年 四、三
六年 五、五

獨逸	一局所に對する面積	〇、四六方里	一局所に對する人口	一一九一
瑞西		一、一一		一五五七
和蘭		一、二九		三九六二
丁抹		四、〇二		四六三七
日本(本土)		四、三三		九七三四
岡山縣		三、五三		九九二一
淺口郡		一、〇〇		八五〇六

第三電 話

第二一八節 世界にて電話の最も普及せるは北米合衆國にして、千九百二十年には一千三百四十一萬の電話機を有し、世界總數の六割強を占む。然かも電話は主として大都會に多く使用せられ、其多寡によりて都會の文化及活氣の狀態を推察し得べし。

我國には約三十二萬の電話機を有し、略ロンドン市と伯仲せり。(東京は六萬四千餘を有し、世界都市の二十九位を占む)

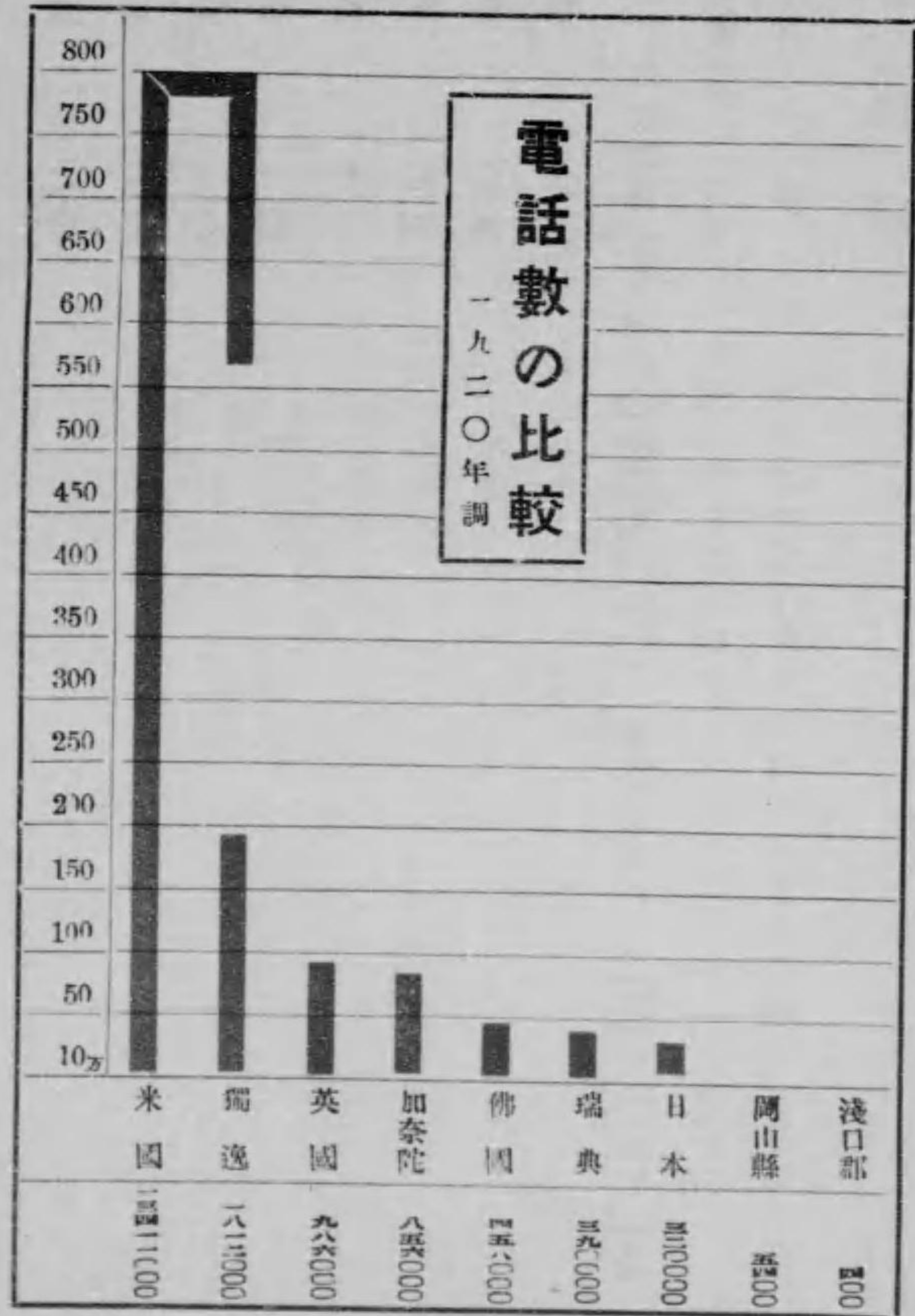
大正九年調査、人口百人に就きての電話數は

世界に於ける都市の電話數
ニューヨーク 八九二一九八
シカゴ 五七五八四〇
ロンドン 三一三三五〇
ホストン 二九四六七八
ベルリン 二二三三一一三
フィラデルヒヤ 二一四〇九二
パリ 一五九六九二
サンフランシスコ 一五三四七七
東京 六四二五〇

米 國	一三、六
獨 國	一一、二
英 國	二、〇
佛 國	一、〇
伊 國	〇、三
日 本	〇、四
岡山縣	〇、四
淺口郡	〇、三九

にして、全縣下の電話數は五四〇〇餘(人口百につき〇、四に當る)、本郡は四〇〇(人口一〇〇につき〇、三九に當る)を有せり。左の如し。

玉島三九
西阿知五
金光三
鴨方三
連島三
寄島三
鴨方驛前三
計 四〇〇



第五章 住民 (原田委員)

第一概説

長所と短所

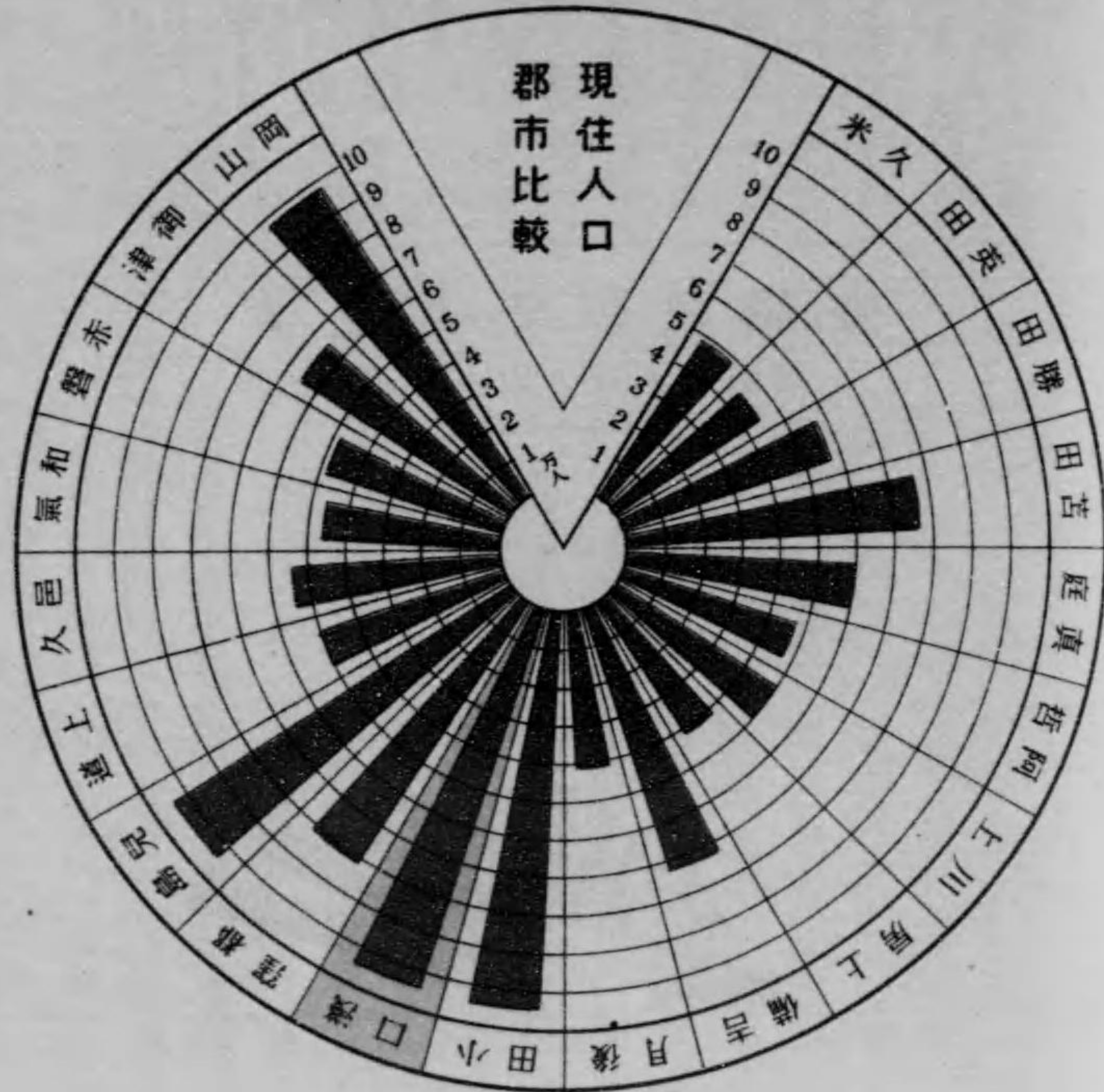
第二一九節 本縣の地波靜かなる瀬戸内海に面し、富岳の雄大琵琶湖の汪洋たるものあるにあらず。見渡す限り凡て是れ平板の凡土、僅かに丘陵の起伏せるあるのみ。加ふるに人文早く開け人口亦稠密にして、氣候温和、風光の明媚を以てす。是れに於てか山温水軟の景象に陶鑄感化せられ、人心自ら軟弱に陥り、篤厚堅實を缺きて一般に小才に富み、伶俐に馳するに至れり。「浮薄にして修飾を好む」は備前にして、「慧黠にして新奇を喜ぶ」は備中なり。本郡の如きは是が最も濃厚なるもの謂ふべし。人國記に「上下共に利根を先とし、萬事をなすに依て言行の相違するこゝ多し、別して詔心強くして、上はべは上の好事に隨ひて、内心は己がさまさまにさけずみ誇るなり」と云へり。輓近教育の進歩と世相の變化とは青年をして農業を棄て、俸給に衣食せんとする傾向あるも、由來本郡の地人口稠密にして生存競争は自から人心を緊張せしめて安逸を貪るを許さず、能く勤勉にして作業に勵む。言語は概して質實なれど沿岸の漁業地に至りては粗野を極む。

第二人口 (原田委員)

一、概説

第二二〇節 大正九年末、第一回國勢調査に基く全縣下の現住人口は百二十六萬四

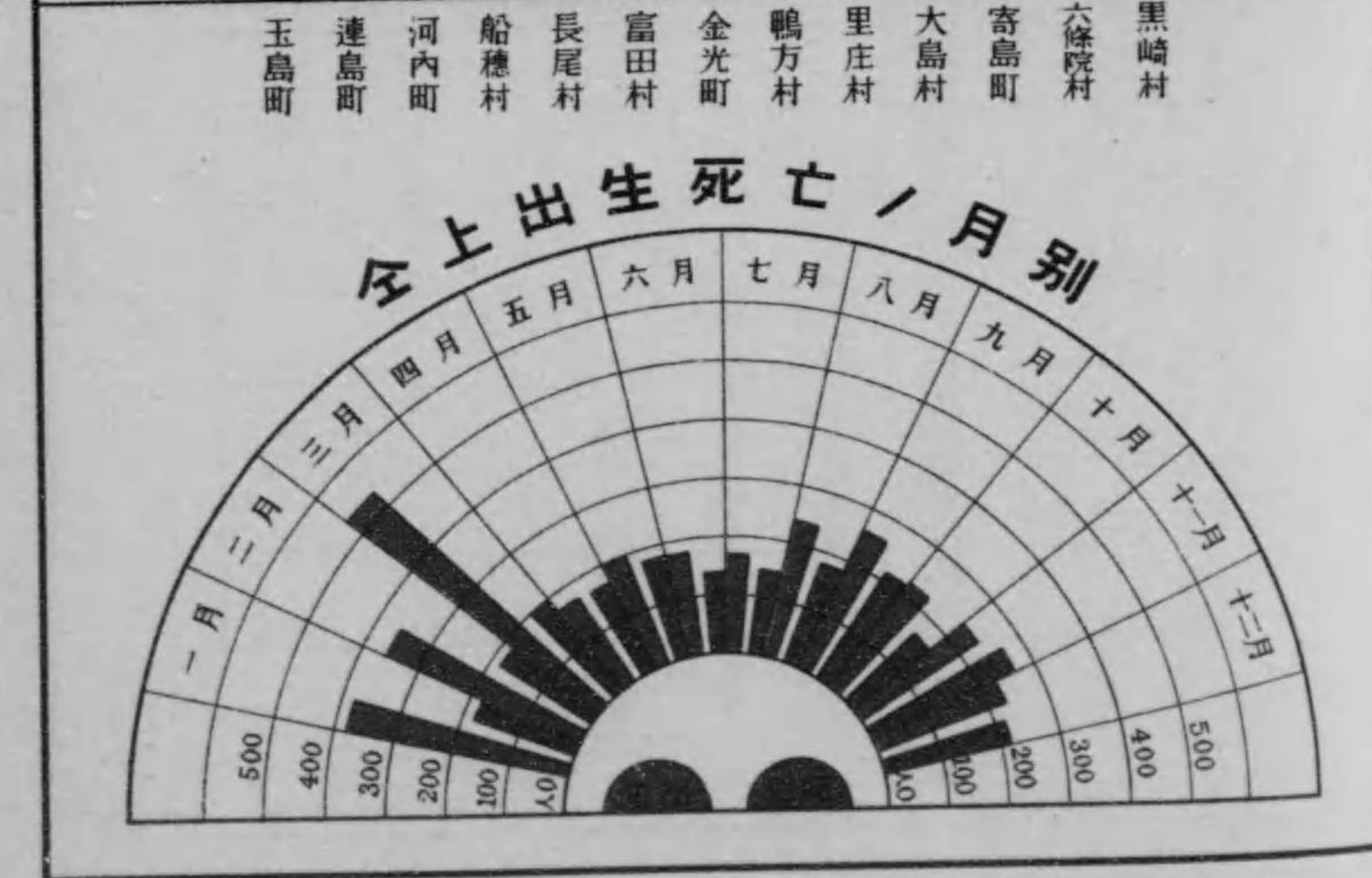
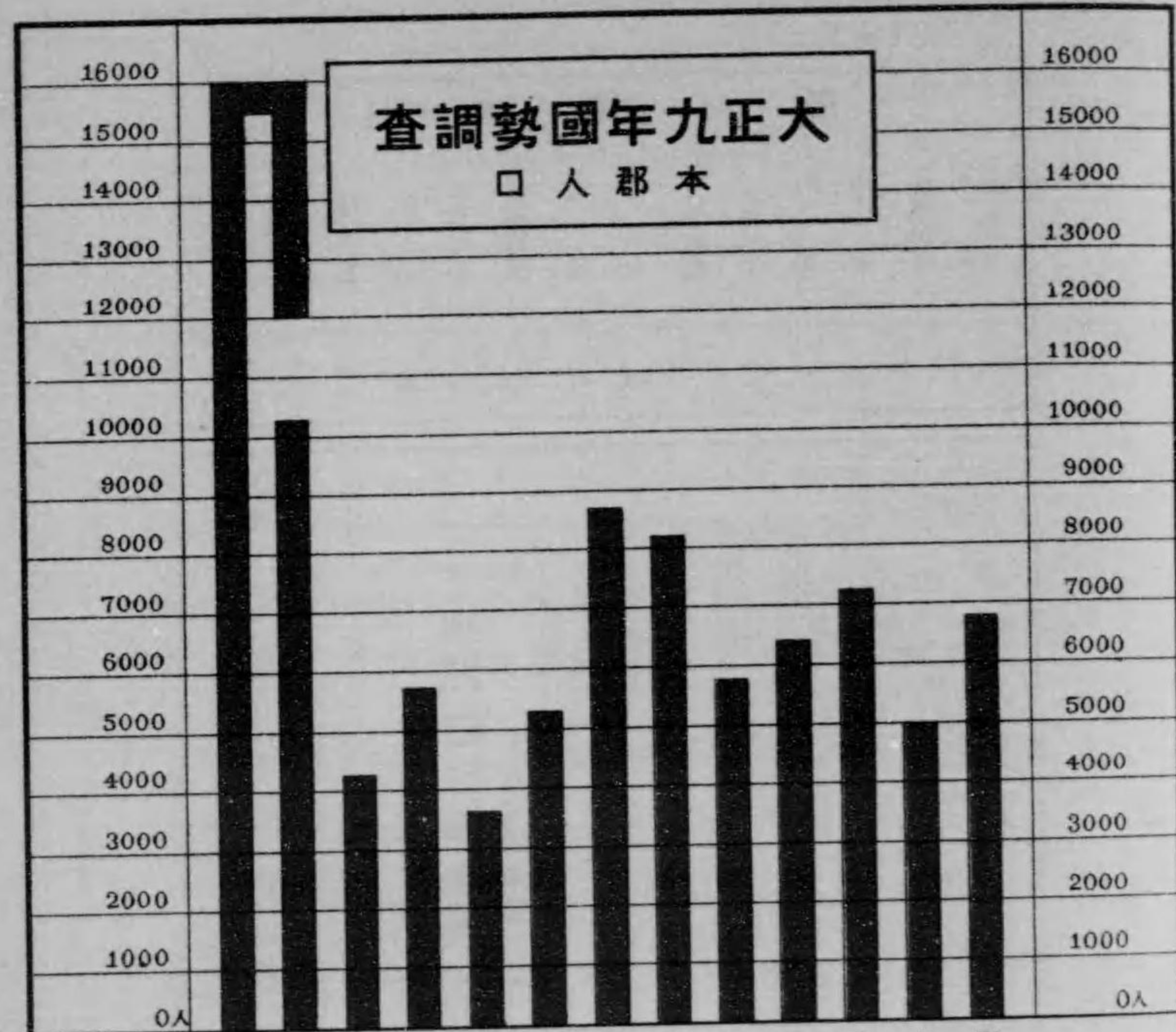
大正九年國勢調査



人口ノ粗密

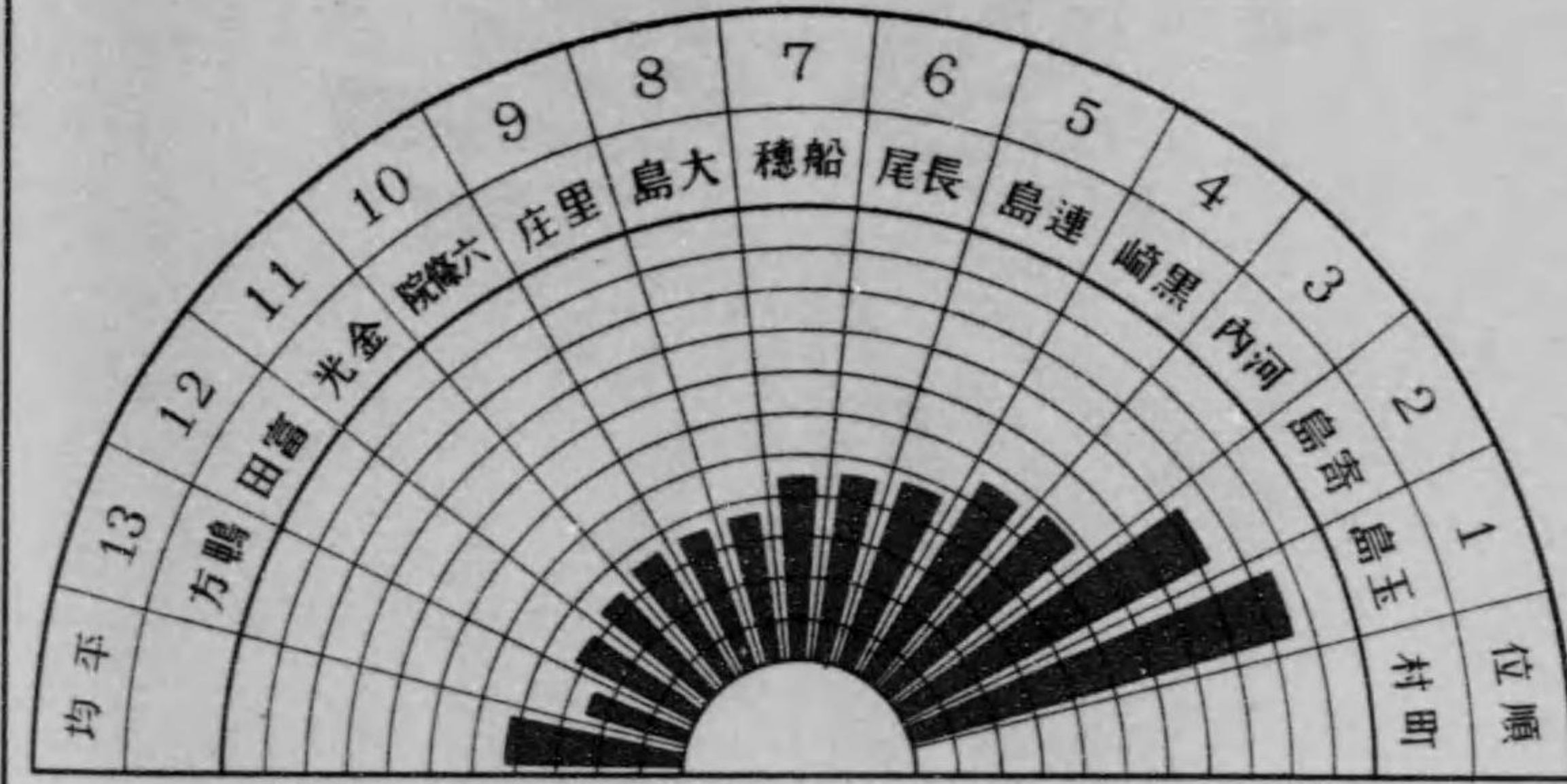
●一方里に對する
人口密度比較
日本 二〇〇〇人
北美 一七〇人
合衆國 八五人
加州

千九百五十三人(現住戸數二千五)にして増加歩合は千人に對し八人五分二厘なり。其密度は一方里に付三千五十四人にして、全國中第十八位に在り。而して女子の數は男子より多し。
郡内の現住人口は拾萬貳千七拾參人(戸數一萬九千六百四十四、男子五萬)にして、兒島郡に亞ぎ縣下第貳位にあり。其増加率は千人に對し八人五分八厘にして、其密度は一方里に付八千三百二十二にして全國の四倍強なり。而して男子の數は女子の數より多し。

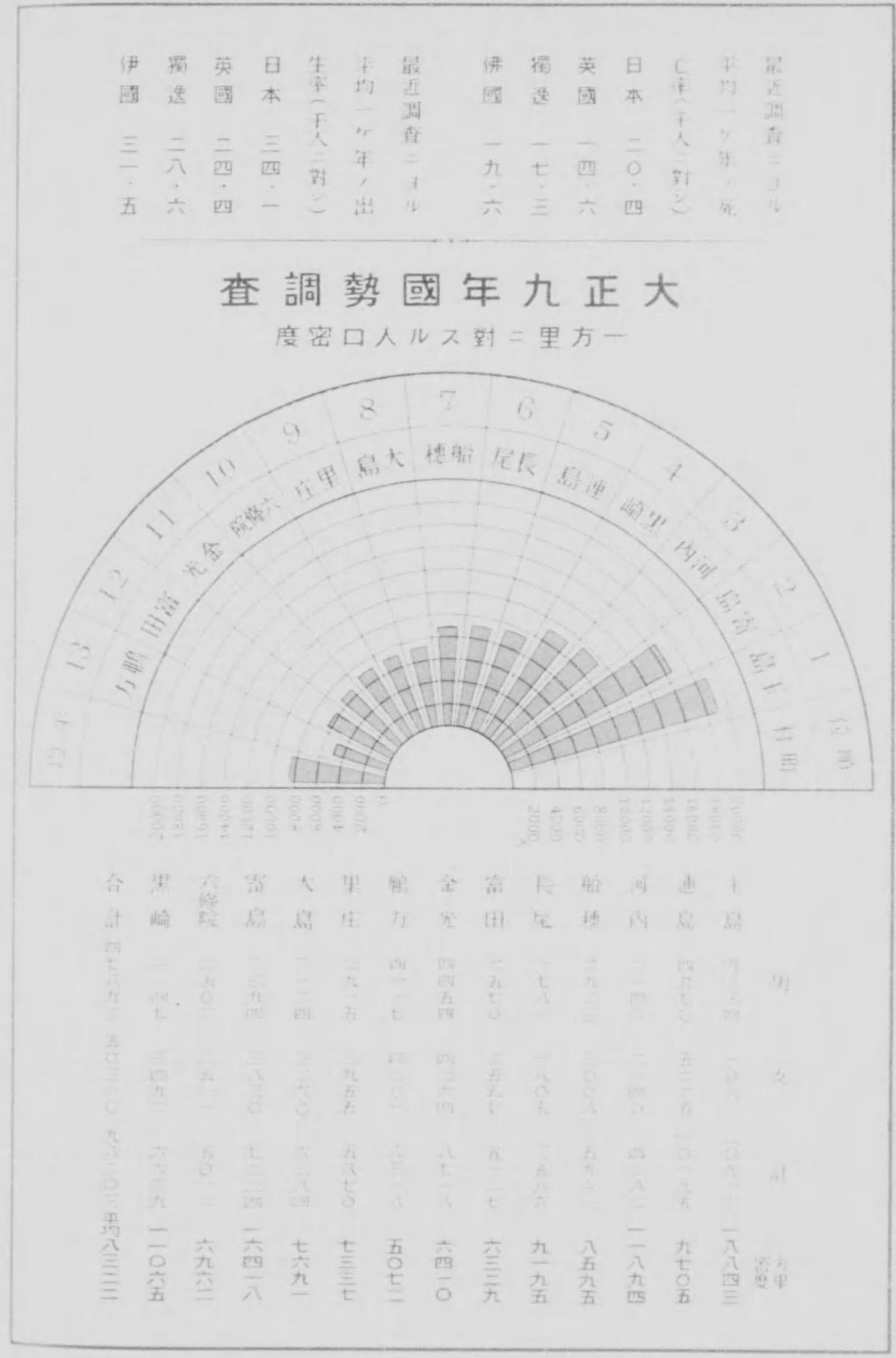
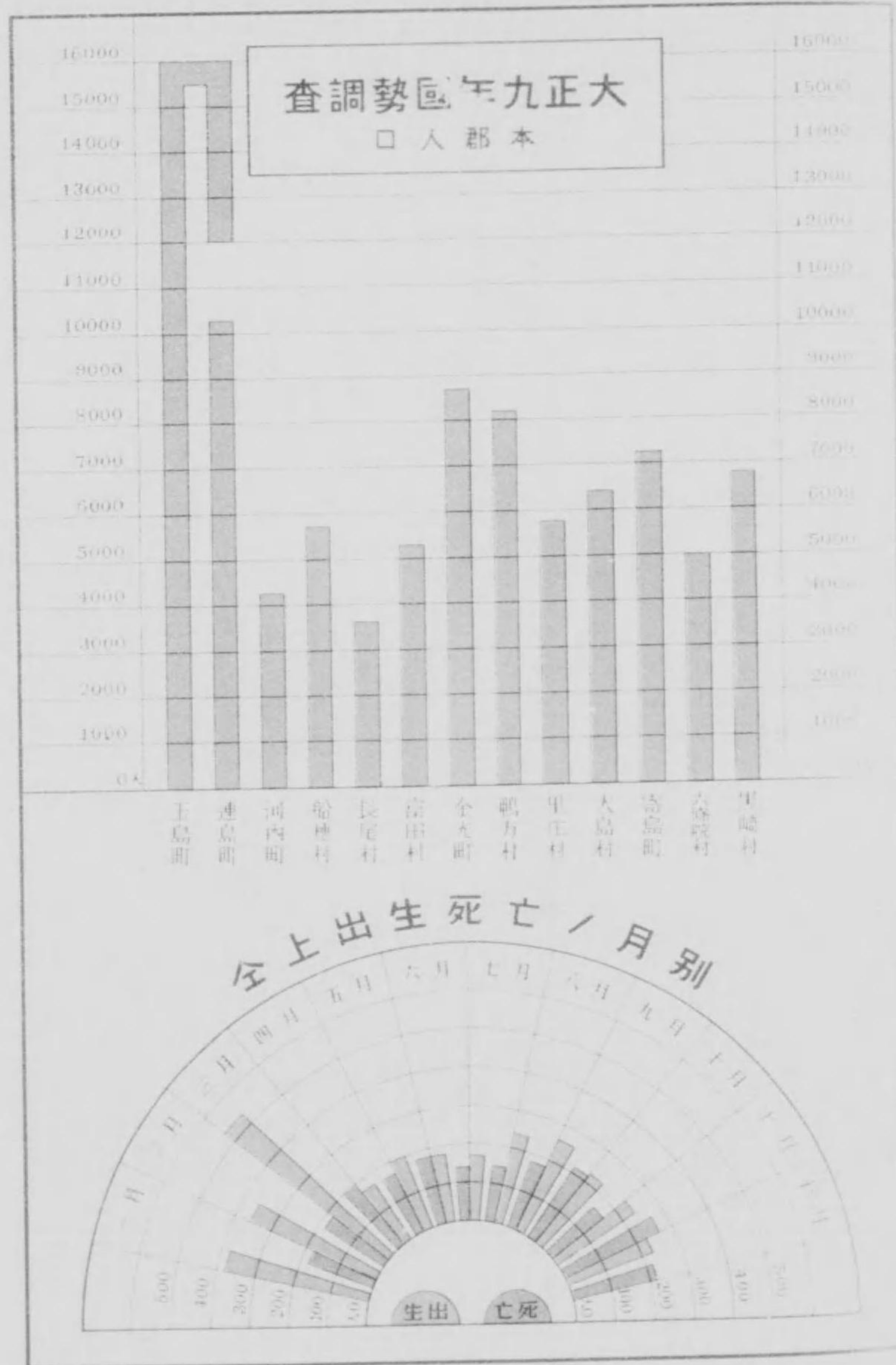


最近調査ニヨル
平均一ヶ年ノ死
亡率(千人ニ對シ)
日本 二〇・四
英國 一四・六
獨逸 一七・三
佛國 一九・六
最近調査ニヨル
平均一ヶ年ノ出
生率(千人ニ對シ)
日本 三四・一
英國 二四・四
獨逸 二八・六
伊國 三一・五

大正九年國勢調査 一方里ニ對スル人口密度



町村名	男	女	計	一方里ノ密度
玉島	9854	10622	20476	18443
連島	4970	5351	10321	9705
河内	2142	2140	4282	2184
船穂	2933	3008	5941	8595
長尾	1781	1805	3586	9195
富田	2570	2557	5127	6329
金光	4454	4264	8718	6410
鴨方	417	401	818	5072
里庄	2915	2955	5870	7337
大島	3124	3360	6484	7691
寄島	3394	3830	7224	16418
六條院	2502	2511	5013	6962
黒崎	3147	3492	6639	11065
合計	47893	50310	98203	平均8333



(一其) 考 參

●大正九年末、國勢調査に基く現住人口左の如し

町	男	女	總數
岡山	四四、四三二	五二、九六三	九六、三九四
津島	三三、六六一	三三、七〇九	六七、三七〇
赤松	三三、八三三	三三、七〇〇	六七、五三三
和氣	三三、七五九	三三、三七一	六七、〇七〇
久米	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
島根	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
都窪	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
浅井	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
小月	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
後月	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
吉房	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
上房	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
川上	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
阿哲	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
眞庭	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
勝田	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
英田	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
久米	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇
計	三三、〇一〇	三三、〇〇〇	六六、〇一〇

●最近の調査による、平均一ヶ月の増加率(千人に對し)

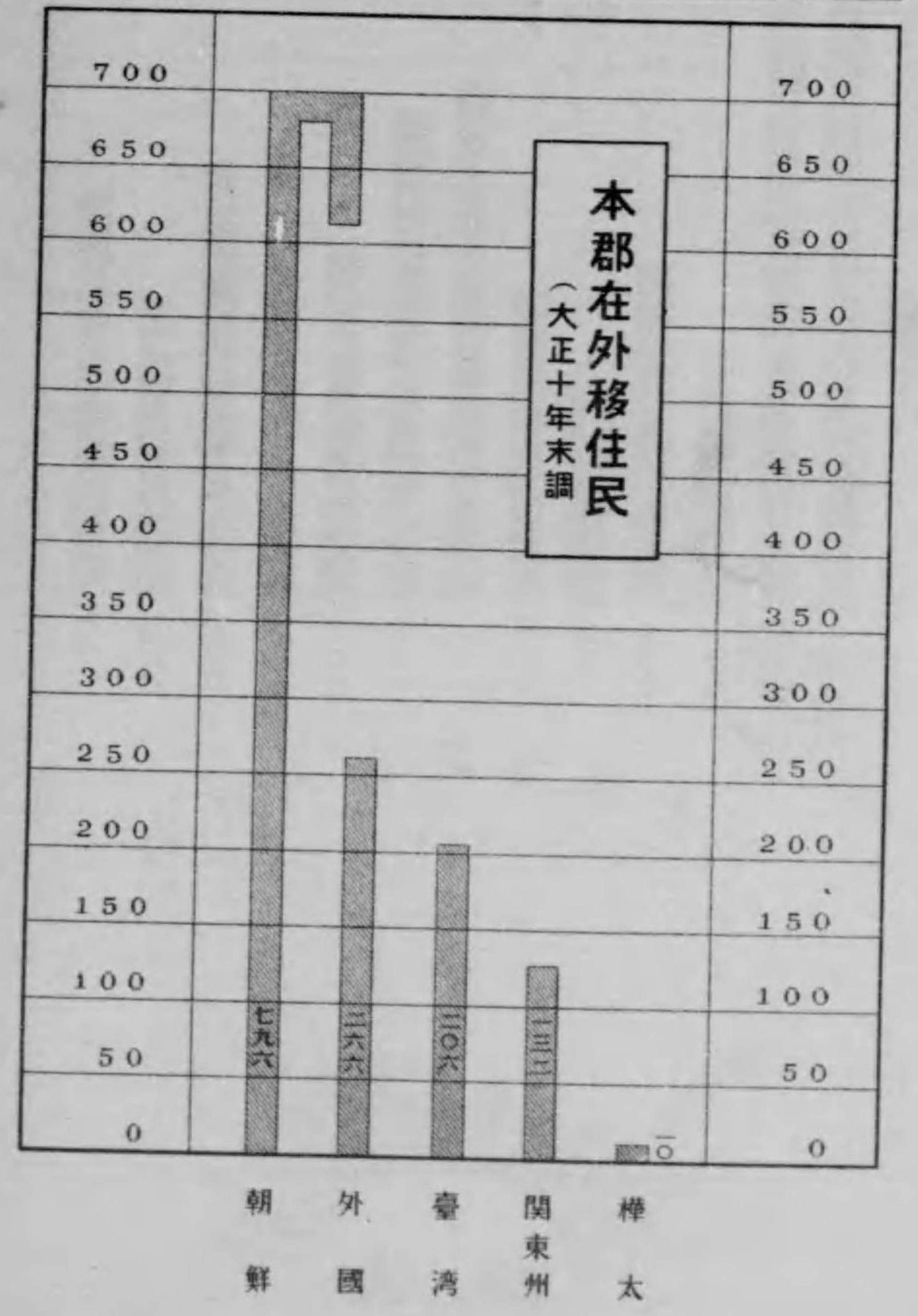
北米合衆國	一九、〇〇
日 本	一四、七八
露 國	一三、七〇
獨逸	一三、六〇
英 國	八、七
佛 國	一、八

●最近の調査による、平均一ヶ月の出生率(千人に對し)

日 本	二〇、四
英 國	一四、六
獨逸	一七、三
佛 國	一九、六
日 本	三四、一
獨逸	二八、六
英 國	二四、四
伊 國	三一、五

海 外 渡 航 者 (大正十年)

支那	一三〇
北米	一六
合衆	一六
比賓	四五
瓜哇	一四
ブラジル	一
歐洲諸國	一〇
布哇	七
ロシア	四
英領印度	三
メキシコ	三
ペル	一
濠州	一
蘭領印度	一
佛領	一
カレドニア	一



本郡最近十ヶ年間に於ける人口増加

年 度	本 籍 人 口	現 住 人 口	現 住 戸 数
大 正 二 年	一〇五、三二九	一〇二、一一四	一九、四七一
同 三 年	一〇六、四〇四	一〇一、六五四	一九、四四三
同 四 年	一〇七、三二二	一〇一、八四七	一九、三〇一
同 五 年	一〇八、三六三	一〇二、六二六	一九、二〇八
同 六 年	一〇九、四九九	一〇三、〇九九	一九、一六一
同 七 年	一〇九、一四三	一〇一、六一八	一九、三七六
同 八 年	一〇九、五六六	一〇一、八九九	一九、四四二
同 九 年	一一〇、六二四	一〇二、〇七三	一九、六四四
同 十 年	一一一、五五一	一〇一、四五六	一九、六八七
同 十 一 年	一一二、四六〇	一〇二、〇五八	一九、六〇四

参 考 (其 二)

第三教育

(原田委員)

一、總 說

學校數
兒童數

學級數と本科正教員

教育の現勢

第三二節 大正十一年調、本郡小學校數は三十一にして、兒童數は一校に對し五一八人(全國三一八八人)、總教員一に對し四九・七人(全國四七・〇〇人)に當る。而して最近十ヶ年間に於ける毎年の増加率は一五・八人なり。

學級數は一校に對し平均一〇・一三(全國六・二四にして、本科正教員數は一校に對し男子六人強(全國四人弱)、女子二人弱(全國一人強)に當る。

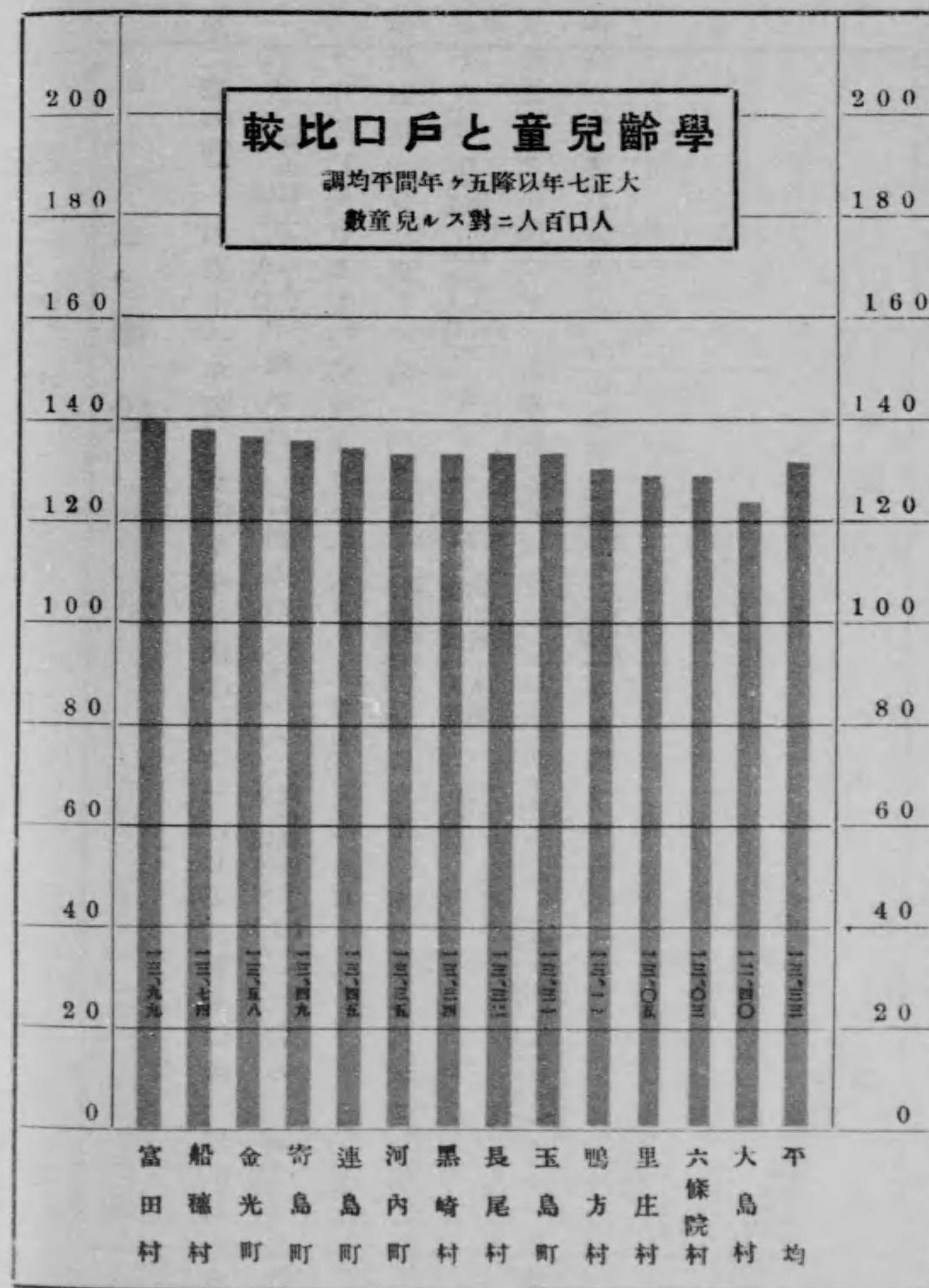
又最近五ヶ年間に於ける學齡兒童就學歩合は九九・七九人(全國八八・五八)なり。尙詳細は左記統計圖及「現今の教育」(自第一三二節)を参照すべし。

町村名	大正七年度	大正八年度	大正九年度	大正十年度	大正十一年度	平均
玉島町	一三、二七	一三、三三	一三、六二	一三、五三	一二、八三	一三、三一
連島町	一三、六三	一三、七二	一三、四八	一三、一五	一三、三〇	一三、四五
河内町	一三、〇四	一三、〇九	一三、六二	一三、〇一	一四、〇〇	一三、三五
船穂村	一二、七三	一三、二三	一三、八二	一五、〇五	一三、八七	一三、七四
長尾村	一三、四六	一三、四四	一三、二四	一四、五二	一一、九四	一三、三二
富田村	一四、五九	一四、〇六	一三、九七	一三、九五	一三、三八	一三、九九
金光町	一三、三一	一三、八五	一三、八三	一三、六三	一三、三一	一三、五八
鴨方村	一三、一〇	一三、一〇	一三、二〇	一三、一一	一二、九六	一三、一一
里庄村	一三、七二	一三、四四	一二、六二	一二、九一	一二、五八	一三、〇五
大島村	一一、八六	一二、三三	一一、八七	一二、五六	一二、四一	一二、四〇
寄島町	一三、〇三	一三、六一	一三、七一	一三、六五	一三、四五	一三、四九
六條院村	一三、一九	一三、二三	一三、二〇	一二、八七	一二、六八	一三、〇三
黒崎村	一三、七二	一三、五四	一三、三六	一三、二一	一二、八八	一三、三四
平均	一三、二八	一三、三八	一三、五〇	一三、四六	一三、〇四	一三、三三

二六五

参考)

對人口百に學齡兒童と戸口比較



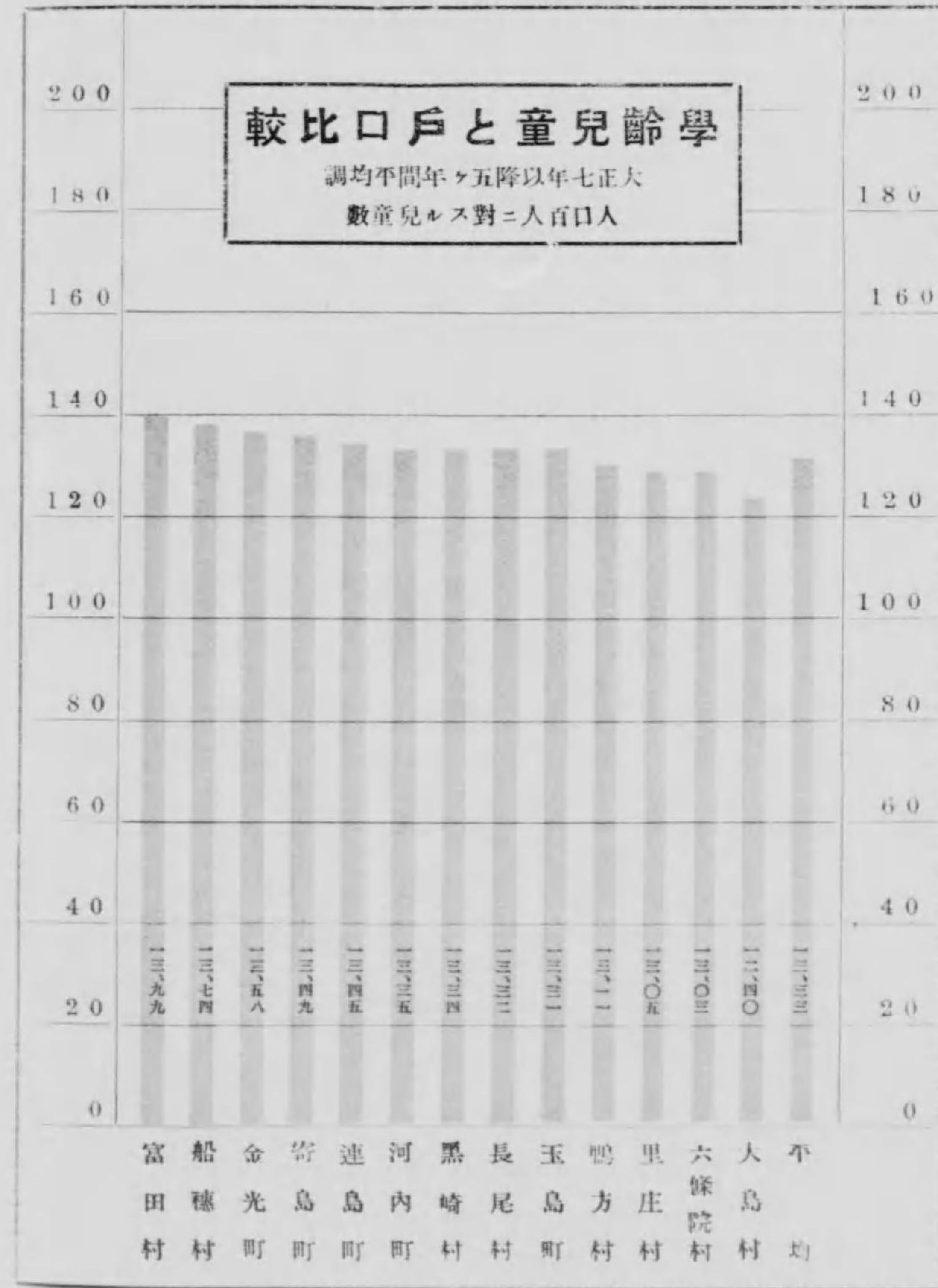
第二三節

二六四

町村名	大正七年度	大正八年度	大正九年度	大正十年度	大正十一年度	平均
玉島町	一三、二七	一三、三三	一三、六二	一三、五三	一二、八三	一三、三一
速島町	一三、六三	一三、七二	一三、四八	一三、一五	一三、三〇	一三、四五
河内町	一三、〇四	一三、〇九	一三、六二	一三、〇一	一四、〇〇	一三、三五
船穂村	一二、七三	一三、二三	一三、八二	一五、〇五	一三、八七	一三、七四
長尾村	一三、四六	一三、四四	一三、二四	一四、五二	一一、九四	一三、三二
富田村	一四、五九	一四、〇六	一三、九七	一三、九五	一三、三八	一三、九九
金光町	一三、三一	一三、八五	一三、八三	一三、六三	一三、三一	一三、五八
鴨方村	一三、一〇	一三、一〇	一三、二〇	一三、二一	一二、九六	一三、一一
里庄村	一三、七二	一三、四四	一二、六二	一二、九一	一二、五八	一三、〇五
大島村	一一、八六	一二、三三	一三、八七	一二、五六	一二、四一	一二、四〇
寄島町	一三、〇三	一三、六一	一三、七一	一三、六五	一二、四五	一三、四九
六條院村	一三、一九	一三、二三	一三、二〇	一二、八七	一二、六八	一三、〇三
黒崎村	一三、七二	一三、五四	一三、三六	一三、二一	一二、八八	一三、三四
平均	一三、二八	一三、三八	一三、五〇	一三、四六	一三、〇四	一三、三三

参考

對人口百に學齡兒童と戸口比較



第二三節

最近十年間の児童の増加

大正三年ヨリ同十二年ニ至ル

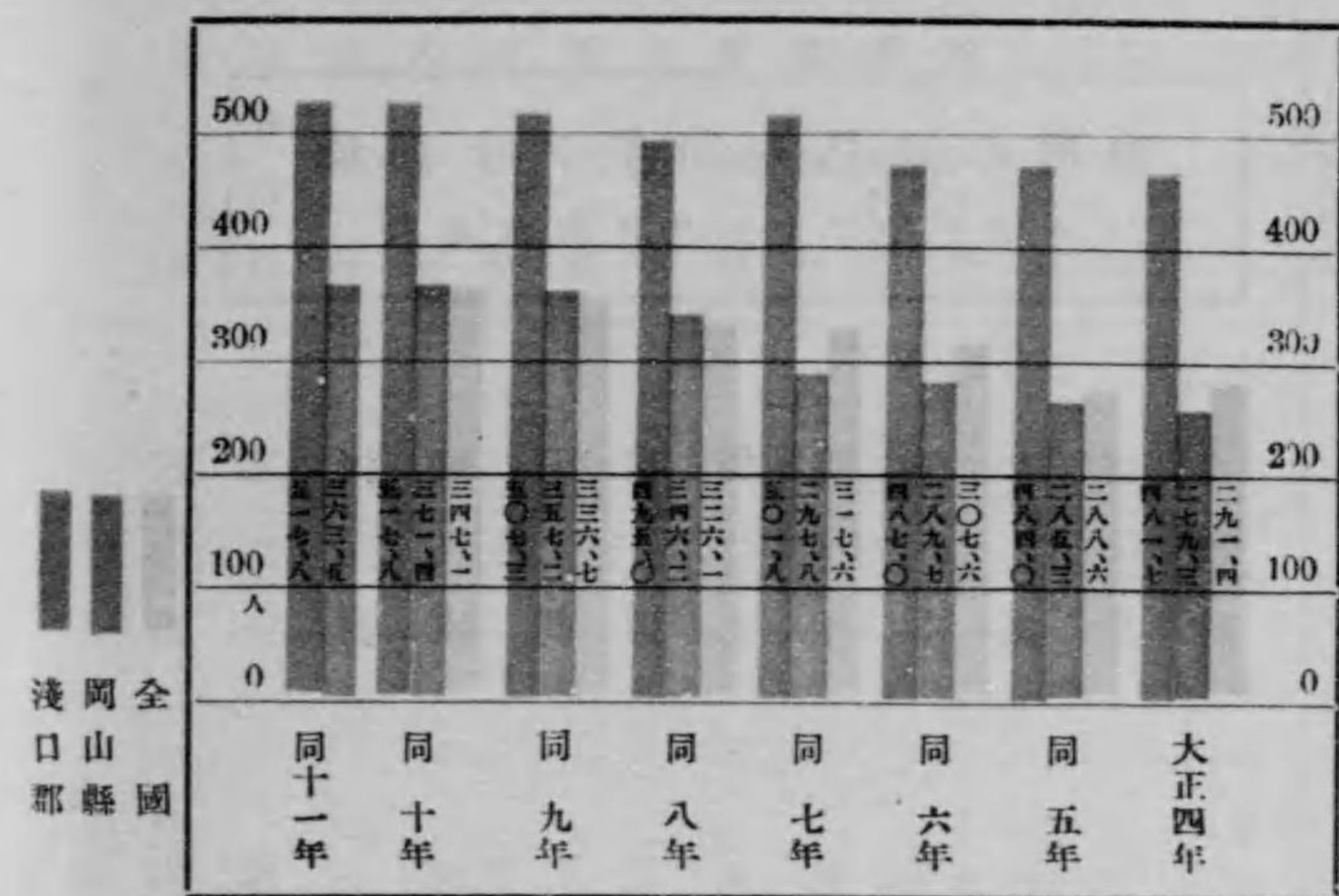
町名	増加總數	毎年平均増加數
玉島	二四五	二四・五
連島	四五	四五
河内	一一七	一一・七
船穂	一四五	一四・五
長尾	二二二	二二・二
富田	三六	三・六
金光	一九五	一九・五
鴨方	一五六	一五・六
里庄	三三	三・三
大島	一〇(減)	一・〇(減)
寄島	九一	九・一
六條院	一〇三	一〇・三
黒崎	二〇(減)	二・〇(減)
合計	一一五八	一一五・八

三、町村別小學校學級數

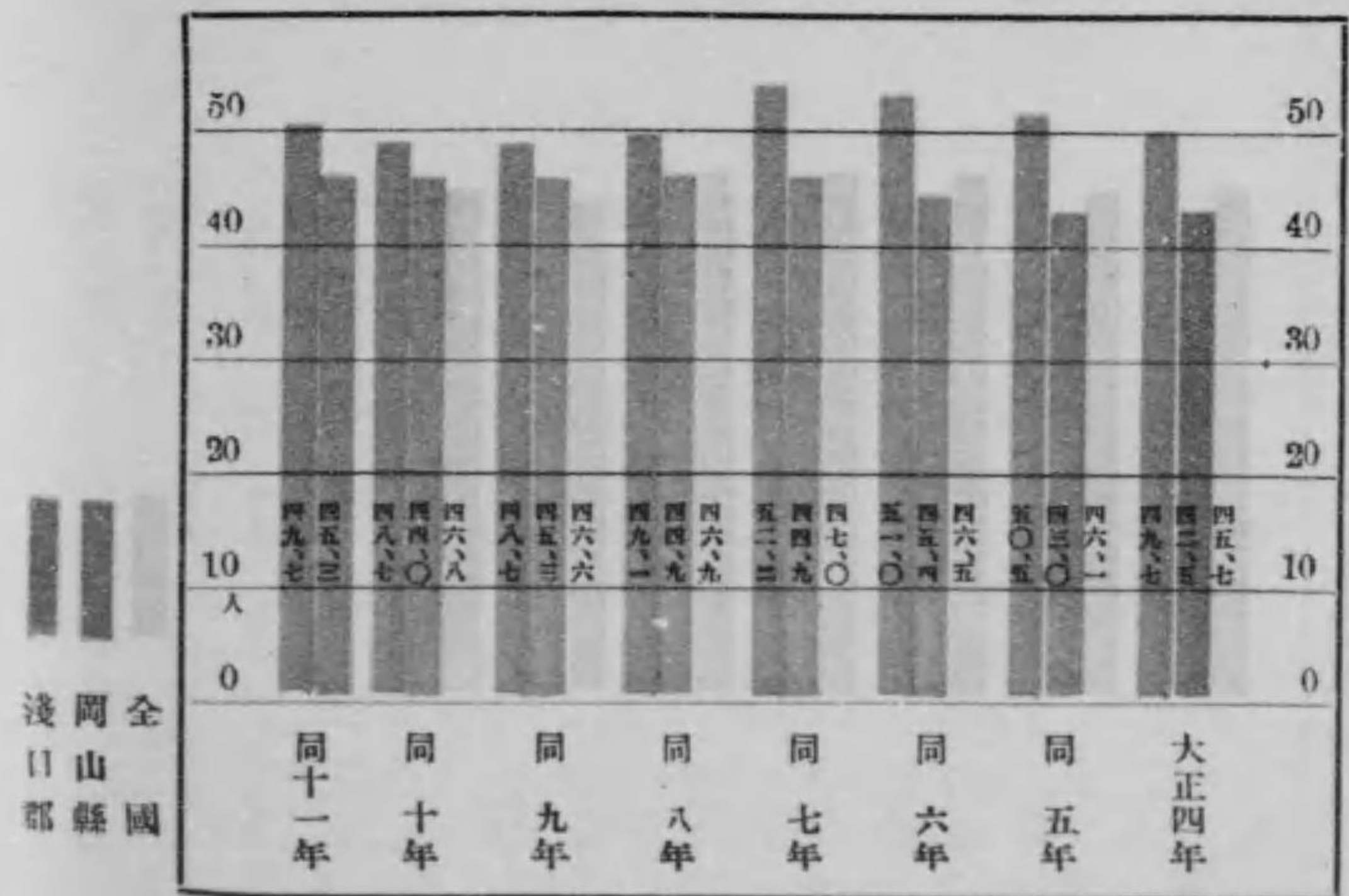
町名	大正七年度	同八年度	同九年度	同十年度	同十一年度
玉島	六一	六一	六一	六一	六一
連島	三四	三四	三五	三五	三五
河内	一二	一四	一四	一四	一四
船穂	一七	一七	一七	一八	一八
長尾	一二	二二	二二	二二	二二
富田	一六	一七	一八	一七	一七
金光	二二	二二	二二	二二	二二
鴨方	二四	二六	二七	二六	二六
里庄	二〇	二〇	二一	二〇	二〇
大島	二二	二二	二二	二二	二二
寄島	二五	二六	二七	二五	二五
六條院	一五	一五	一五	一五	一五
黒崎	二六	二五	二六	二五	二五
計	三〇五	三一	三一八	三二二	三二四

町村名	大正三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年
連島	五一〇	四六二	五二三	四九四	四五〇	四九六	五一四	四八五	五〇九
河内	四四九	四九一	五六五	五四四	六二一	五六六	五〇二	四八四	五〇四
船穂	四一〇	四五五	四七七	五九六	五八三	六一四	七〇八	六三九	五九一
玉島	四七八	四八四	四八九	四九二	四九〇	四八五	四七一	四八〇	四七二
長尾	五一一	四四〇	四九〇	四五三	四四六	四六八	四二五	四七一	四八七
富田	四二二	四八三	五七五	五三三	五四九	五〇二	五〇三	五一〇	五五九
金光	五八七	六三八	五八四	五七七	六〇五	五七五	五二八	五九〇	七二四
鴨方	四四九	四六四	四九五	五〇四	五四八	四六三	四四四	四四〇	四四〇
里庄	四七四	四五二	四七九	五四七	五六四	四八四	四四三	四二二	四〇九
大島	五三〇	四五〇	五一五	五二八	五二四	四六五	四八一	四一〇	四二〇
寄島	四六二	四九九	五四九	五四七	五四〇	四一五	四九〇	四八四	四八〇
六條院	五〇三	五一三	五二五	五二六	五九八	四五三	四四五	五六六	五〇四
黒崎	四四七	四五五	四〇〇	三八一	四六八	四六三	四三三	四四七	四九七
平均	四七八	四九七	五〇五	五一〇	五二二	四九一	四八七	四八七	四九七

(考參) 總教員一に付兒童數

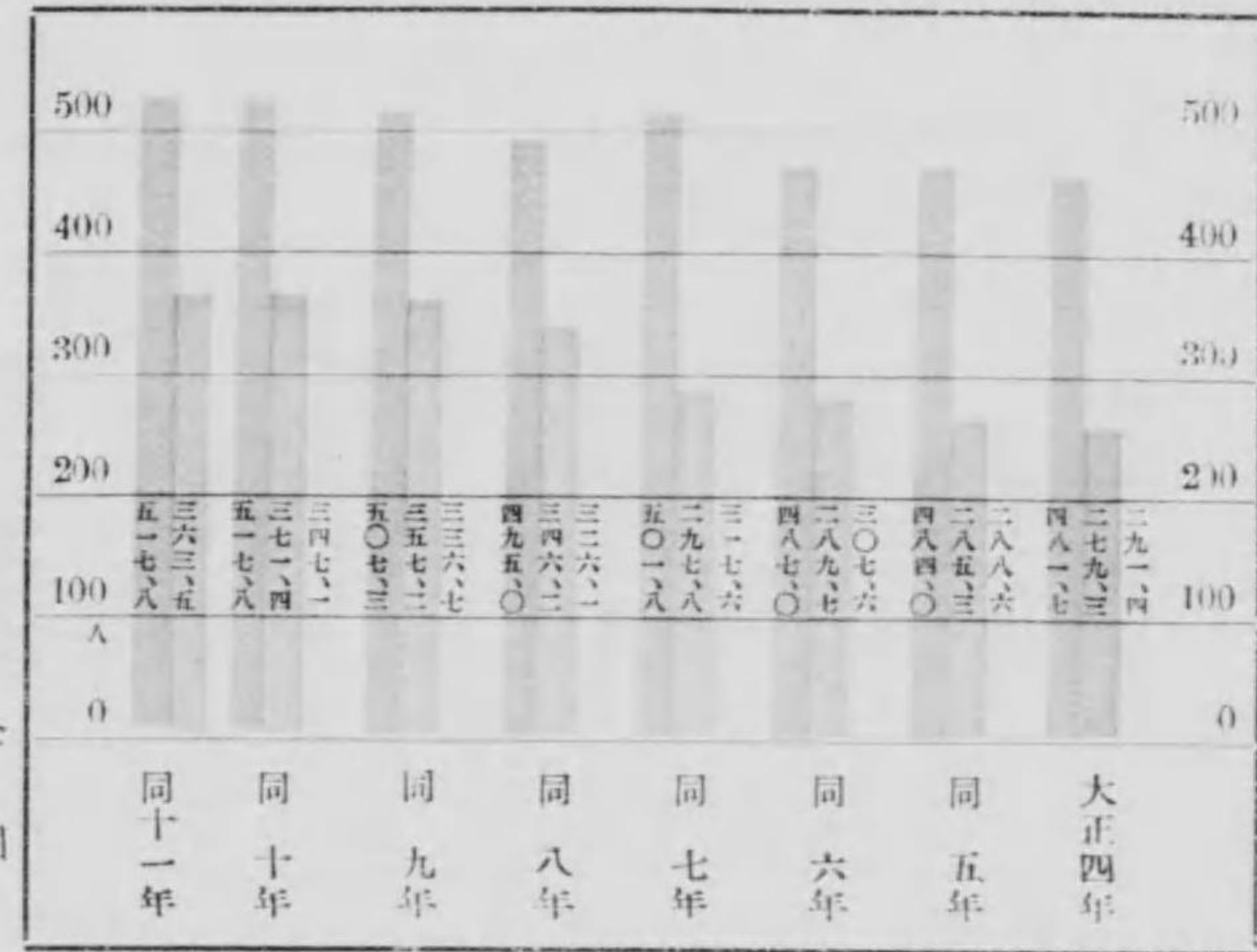


第二三節 甲、學校一に付兒童數

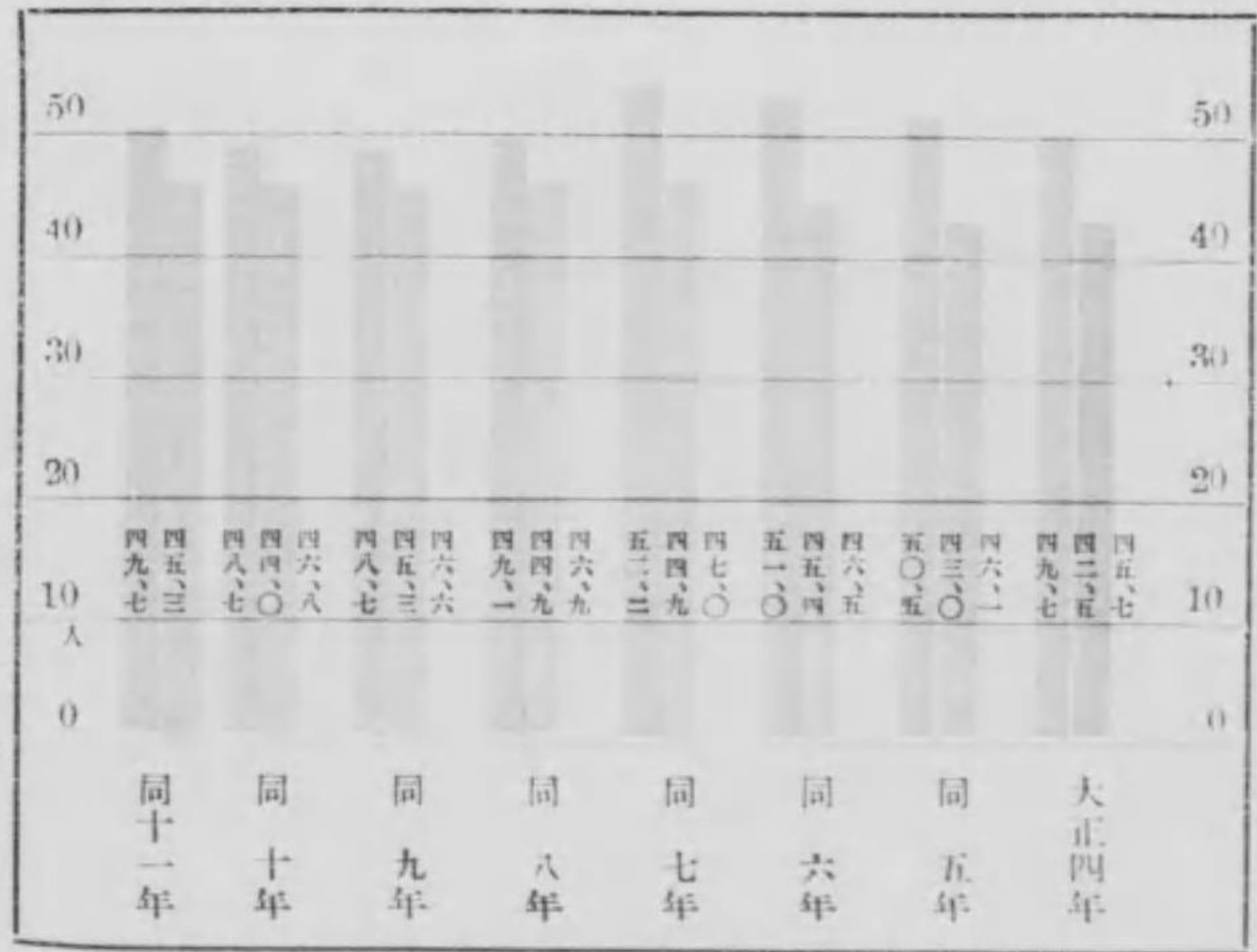


乙、總教員一に付兒童數

第二三節 甲、學校一に付兒童數



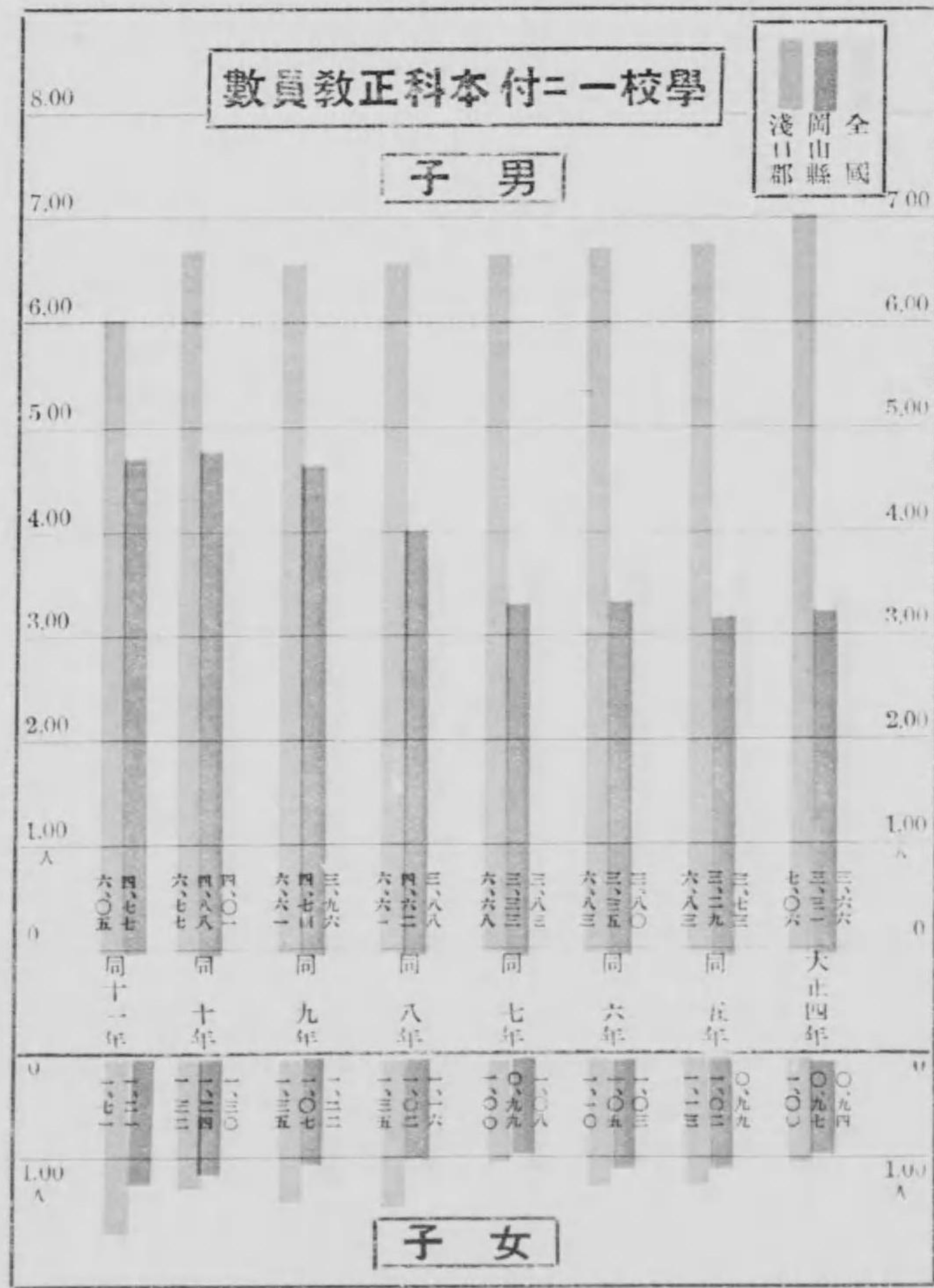
乙、總教員一に付兒童數



(参考) 總教員一に付兒童數

町村名	大正三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年
連島	五一〇	四六二	五二三	四九四	四五〇	四九六	五一四	四八五	五〇九
河内	四四九	四九一	五六五	五四四	六二一	五六六	五〇二	四八四	五〇四
船穂	四一〇	四五五	四七七	五九六	五八三	六一四	七〇八	六三九	五九一
玉島	四七八	四八四	四八七	四九二	四九〇	四八五	四七一	四八〇	四七二
長尾	五一一	四四〇	四九〇	四九三	四四六	四八八	四二五	四七一	四八七
富田	四二二	四八三	五七五	五三三	五四九	五〇二	五〇三	四七一	四八七
金光	五八七	六三八	五八四	五七七	六〇五	五七五	五二八	五九〇	七二四
鴨方	四四九	四六四	四九五	五〇四	五四八	四六三	四四四	四四〇	四四〇
里庄	四七四	四五二	四七九	五四七	五六四	四八四	四四三	四二二	四〇九
大島	五三〇	四五〇	五一五	五二八	五二四	四六五	四八一	四一〇	四二〇
寄島	四六二	四九九	五四九	五四七	五四四	四八四	四四三	四二二	四〇九
六條院	五〇三	五一三	五二五	五二六	五九八	四五三	四四五	五六六	五〇四
黒崎	四四七	四五五	四〇〇	三八一	四六八	四六三	四三三	四四七	四九七
平均	四七八	四九七	五〇五	五一〇	五二二	四九一	四八七	四八七	四九七

第二二五節



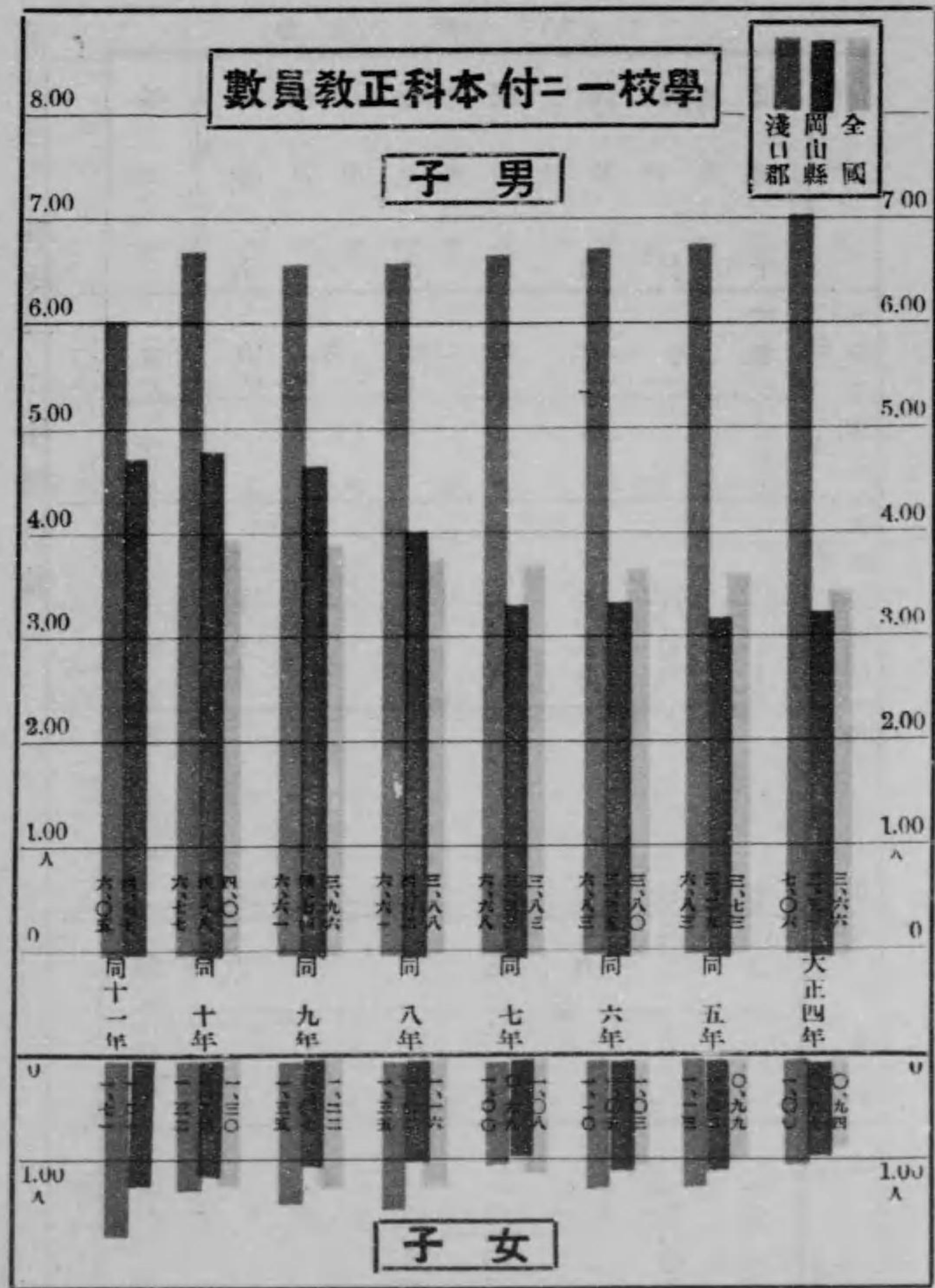
二七一

第二二四節 最近十ヶ年間町村別小學校児童數 (尋常高等男)

町村名	大正二年同	三年同	四年同	五年同	六年同	七年同	八年同	九年同	十年同	十一年同	平均
玉島町	3,011	3,000	3,053	3,043	3,099	3,194	3,153	3,161	3,267	3,256	二七
連島町	1,684	1,662	1,674	1,679	1,668	1,638	1,698	1,700	1,729	1,729	五
河内町	5,391	5,411	5,665	5,998	6,211	6,221	6,553	6,777	6,566	6,566	一三
船穂村	8,661	8,644	8,599	8,994	8,775	8,660	9,211	9,591	10,006	10,006	一六
長尾村	5,663	5,772	5,888	5,990	5,811	5,663	5,995	5,990	5,885	5,885	二
富田村	8,033	7,772	8,366	8,566	8,788	8,544	8,555	8,555	8,666	8,399	四
金光町	1,233	1,276	1,286	1,336	1,336	1,332	1,373	1,416	1,429	1,429	二二
鴨方村	1,688	1,201	1,189	1,211	1,262	1,251	1,287	1,322	1,322	1,322	一七
里庄村	9,499	9,500	9,599	9,851	10,171	10,171	10,171	10,171	10,171	10,171	三
大島村	1,061	1,035	1,030	1,004	9,995	9,995	10,171	10,171	10,171	10,171	一〇
寄島町	1,566	1,981	2,008	2,041	2,041	2,187	2,261	2,581	2,477	2,477	一〇
六條院村	7,044	7,188	7,400	7,377	7,777	7,777	8,021	7,933	8,007	8,007	一一
黒崎村	1,621	1,381	1,041	9,151	1,170	1,170	1,261	1,631	1,433	1,433	減
計	48,004	48,177	48,440	48,770	50,118	49,550	50,773	51,778	51,778	51,778	減

二七〇

第二二五節



二七一

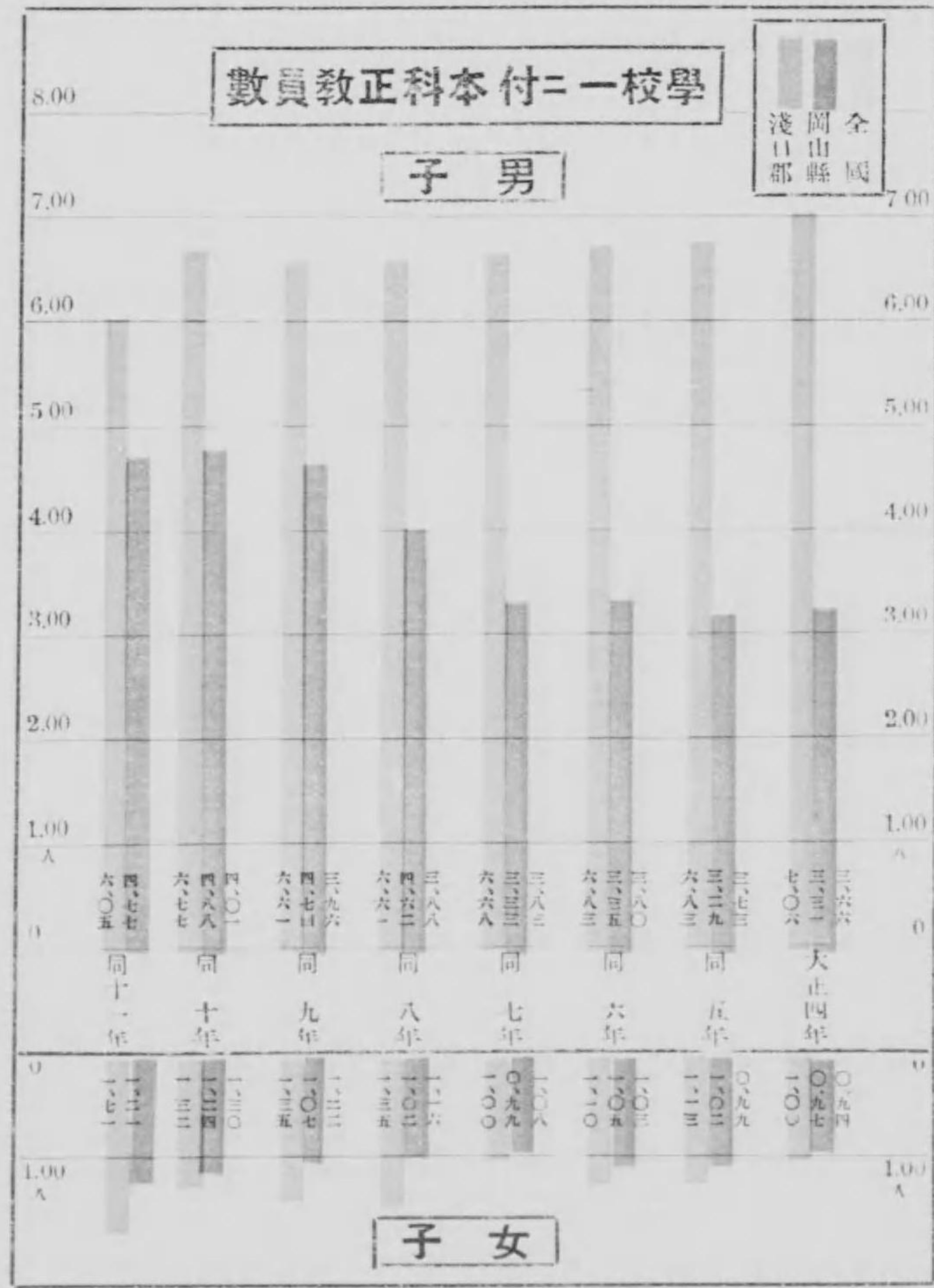
第二三四節 最近十ヶ年間町村別小學校児童數

(尋常高等男)
(女子含ム)

二七〇

町村名	大正二年同	三年同	四年同	五年同	六年同	七年同	八年同	九年同	十年同	十一年同	均毎年加
玉島町	301	300	305	304	309	314	315	316	326	326	二七
連島町	168	166	167	167	167	168	168	168	170	172	一三
河内町	539	541	541	565	598	621	622	653	677	677	一六
船穂村	861	864	864	859	894	875	860	921	959	1006	一六
長尾村	563	572	572	588	590	581	563	595	590	585	一四
富田村	803	772	772	836	856	878	854	855	866	839	一四
金光町	1233	1276	1286	1326	1332	1332	1332	1373	1416	1429	二二
鴨方村	168	170	170	189	190	195	195	197	197	197	一七
里庄村	949	950	950	959	985	1016	1017	1019	1015	982	三
大島村	1061	1035	1030	1030	1004	995	977	1000	1026	1051	(減)
寄島町	156	198	198	208	204	187	162	126	158	124	(減)
六條院村	704	718	740	740	737	777	770	802	793	807	一一
黒崎村	162	138	104	104	115	110	117	126	133	143	(減)
計	4804	4817	4840	4870	5018	4950	5073	5173	5278	5278	二二

第二二五節



二七一

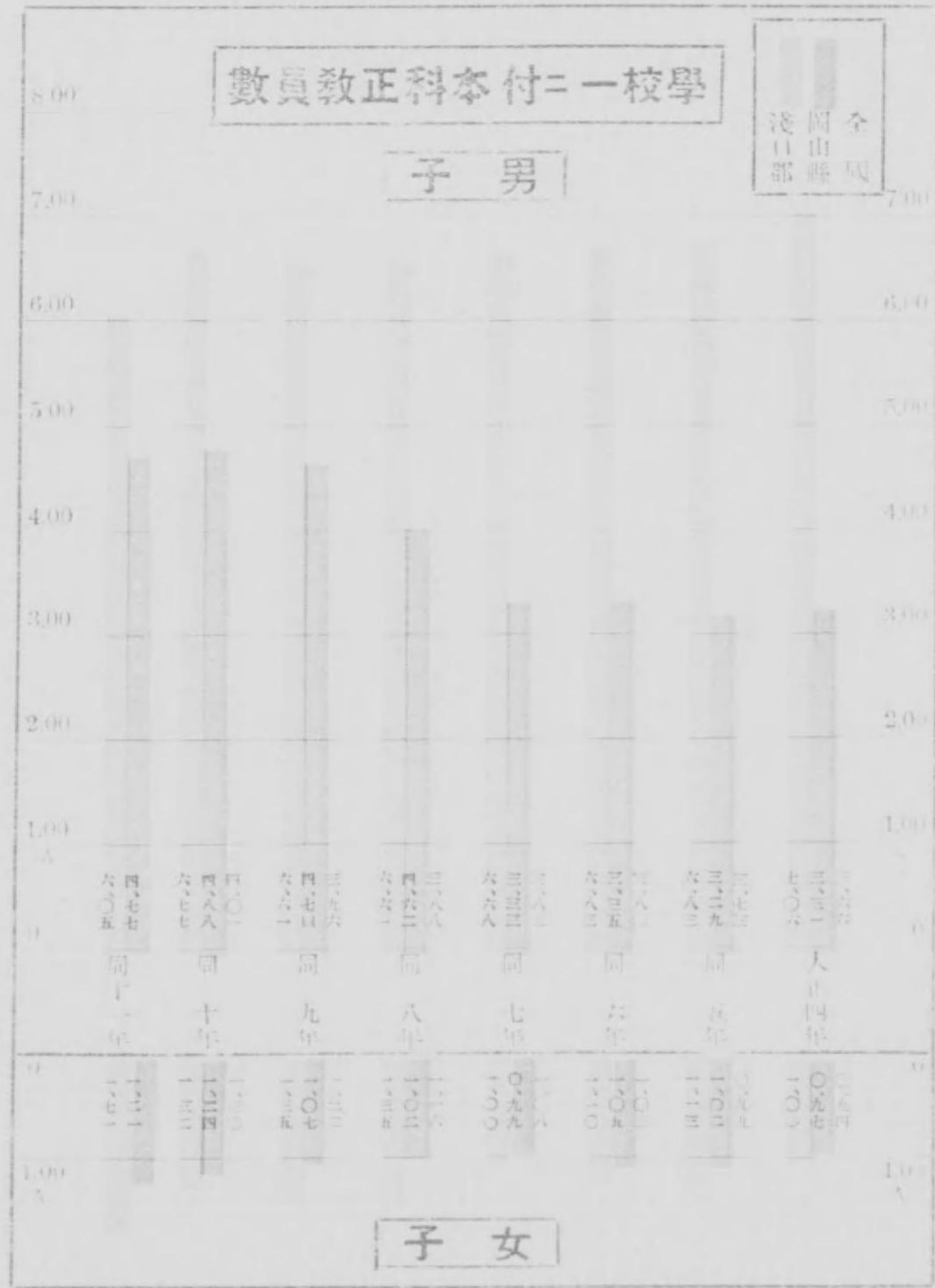
第二三四節 最近十ヶ年間町村別小學校兒童數

(尋常高等男)
(女子含)

二七〇

町村名	大正二年同	三年同	四年同	五年同	六年同	七年同	八年同	九年同	十年同	十一年同	平均増加
玉島町	3,011	3,005	3,030	3,043	3,099	3,194	3,153	3,161	3,267	3,256	二七
連島町	1,684	1,662	1,674	1,679	1,668	1,638	1,698	1,700	1,729	1,729	五
河内町	539	541	565	598	621	622	653	677	656	656	一三
船穂村	861	864	859	894	875	860	921	959	1,006	1,006	一六
長尾村	563	572	588	590	581	563	555	590	585	585	二
富田村	803	772	836	856	878	854	855	866	839	839	四
金光町	1,233	1,276	1,286	1,326	1,332	1,332	1,373	1,416	1,429	1,429	二二
鶴方村	1,681	1,601	1,891	1,911	1,911	1,911	1,911	1,911	1,911	1,911	一七
里庄村	949	950	959	985	1,016	1,016	1,016	1,016	1,016	1,016	三
大島村	1,061	1,035	1,030	1,004	995	977	977	977	977	977	一〇
寄島町	1,561	1,981	2,081	2,041	1,871	1,621	1,261	1,258	1,247	1,247	一〇
六條院村	704	718	740	737	777	777	777	777	777	777	一一
黒崎村	1,621	1,381	1,041	915	1,171	1,171	1,171	1,171	1,171	1,171	一一
計	48,044	48,187	48,480	48,700	50,118	49,500	50,700	51,780	51,780	51,780	二二八

第三二五節



(一七)

第三四節 最近十ヶ年間町村別小學校児童数 (尋常科算男)

町村名	大正二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	平均
王島町	301	301	301	301	301	301	301	301	301	301	301
藤島町	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168
河内町	539	539	539	539	539	539	539	539	539	539	539
豊後村	861	861	861	861	861	861	861	861	861	861	861
長尾村	563	563	563	563	563	563	563	563	563	563	563
富田村	803	803	803	803	803	803	803	803	803	803	803
金光村	1233	1233	1233	1233	1233	1233	1233	1233	1233	1233	1233
羽方村	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168
大島村	949	949	949	949	949	949	949	949	949	949	949
大島村	1061	1061	1061	1061	1061	1061	1061	1061	1061	1061	1061
大島村	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156
大島村	704	704	704	704	704	704	704	704	704	704	704
大島村	162	162	162	162	162	162	162	162	162	162	162
大島村	480	480	480	480	480	480	480	480	480	480	480

(一七)

第二二六節 小學校教員平均月俸 (其一)

種別	小本正		尋本正		尋正		代用	
	女	男	女	男	女	男	女	男
大正七年	二二,七六	一六,六三	一七,〇一	一三,三六	七,二八	一一,〇五	一一,八七	一〇,七五
同八年	二五,一五	二一,六八	二一,〇五	一六,四一	一六,二八	一一,二八	一一,六八	一三,三七
同九年	三九,〇五	三〇,八五	二九,二一	二三,二〇	一八,二〇	一六,六五	一九,一六	一七,九〇
同十年	六三,二六	四六,六〇	五〇,二八	三九,七三	二七,八三	三五,九二	三一,八三	三三,七〇
同十一年	六六,八六	四五,六八	五一,六四	三九,一八	二四,〇〇	三六,一九	三二,〇八	三三,二五

第二二七節 小學校教員平均月俸 (其二)

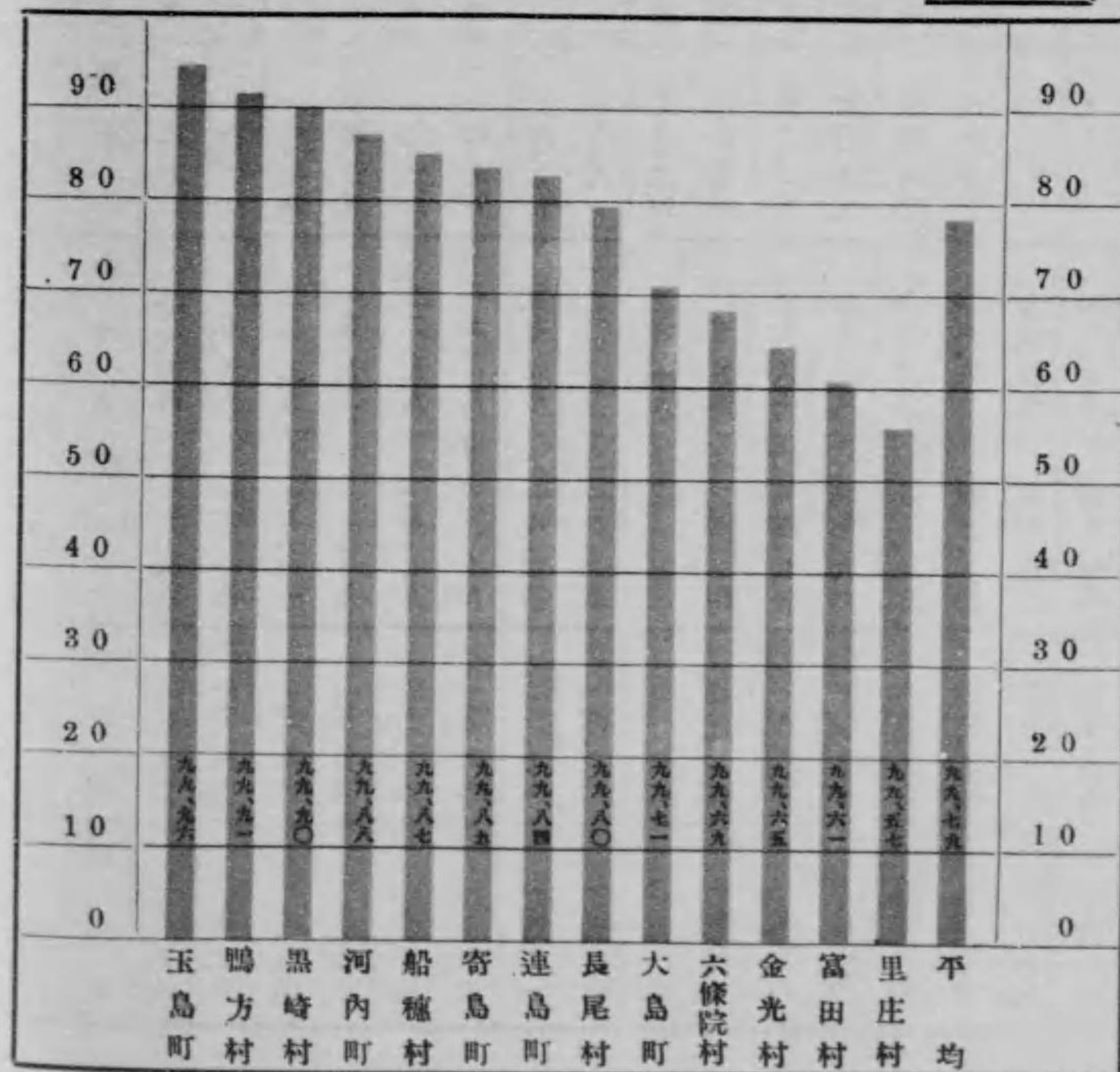
種別	大正四年		同五年		同六年		同七年		同八年		同九年		同十年		同十一年	
	女	男	男	女	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
全國	二二,九五	一六,五九	二四,二〇	一六,六八	二四,四一	一七,〇四	三一,四二	二一,七一	三六,一五	二五,三〇	六六,七三	四七,七三	六七,八八	四八,五〇		
關山縣	一八,六二	一四,二六	一八,七九	一四,三五	一九,二六	一四,七五	二四,五五	一八,八一	二八,二四	二一,七五	五二,一九	四〇,七九	五三,三〇	四一,七二		
淺口郡	二二,五四	一五,五九	二二,三九	一五,六二	二二,九九	一六,一八	三七,六九	二〇,〇〇	三九,一九	二五,五四	六七,八七	四八,一八	六九,二九	四六,八九	六七,四九	四九,七九
尋本正	一六,九八	一三,一七	一七,一一	一三,一九	一七,七五	一三,七五	一八,二〇	一六,二六	三二,三三	二四,三四	五四,五一	四七,九六	五二,八三	四三,三〇	四五,五八	
小本正	二二,八二	一五,五九	二三,四八	一五,五五	二三,三六	一五,八六	二三,七六	一六,六三	三六,八八	二一,六八	三九,〇五	三〇,八三	六三,二六	四六,六〇	四六,六八	四五,六八
尋本正	一五,八八	一三,二九	一五,九八	一三,四六	一六,五八	一三,六五	一七,〇一	一三,三六	二一,〇五	一六,四一	二九,二一	二二,二〇	五〇,二八	三九,七三	五一,六四	三九,一八

第二二八節

學齡兒童就學步合

自大正七年(五ヶ年平均)
至同十一年

同十一年	同十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同五年	大正四年	全 國
九九、七三	九九、七六	九九、七三	九九、七五	九九、七四	九九、七〇	九九、七二	九九、六八	國 岡 山 縣
九九、七三	九九、七六	九九、七三	九九、七五	九九、七四	九九、七〇	九九、七二	九九、六八	淺 口 郡



(参考)

學齡兒童就學步合比較

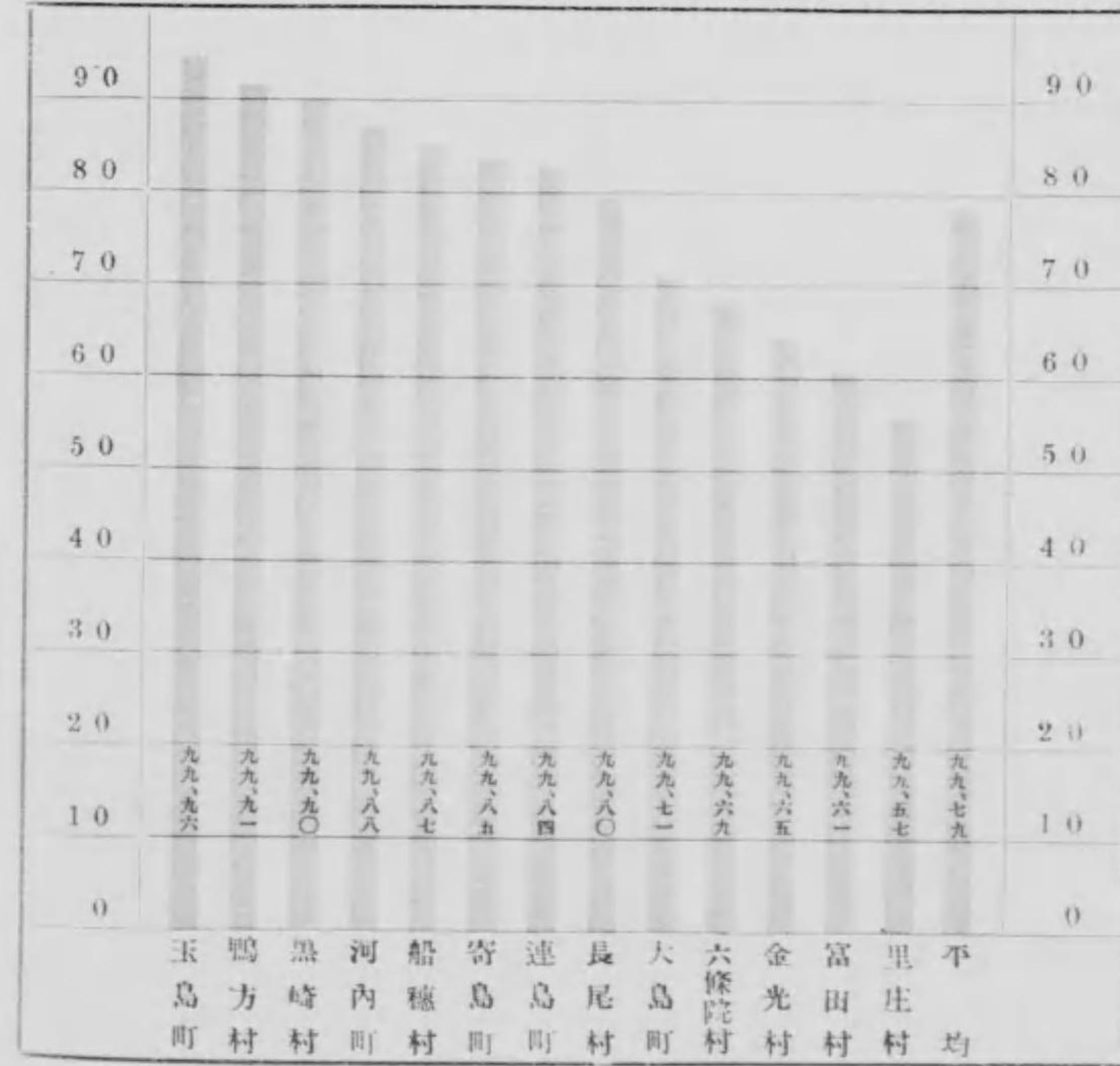
町 村 名	大正七年度	同八年度	同九年度	同十年度	同十一年度	平 均
玉島町	九九、八三	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	九九、八九	一〇〇、〇〇	九九、九六
連島町	九九、八四	九九、八九	九九、八四	九九、七九	九九、八四	九九、八四
河内町	九九、八五	九九、九八	九九、八六	九九、八六	九九、八六	九九、八八
船穂村	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	九九、七二	九九、六四	九九、八七
長尾村	九九、六一	九九、八五	九九、八五	九九、八六	九九、八五	九九、八〇
富田村	九九、七四	九九、八四	九九、五九	九九、五八	九九、二八	九九、六一
金光町	九九、五九	九九、七三	九九、八〇	九九、五六	九九、五八	九九、六五
鴨方村	九九、七八	九九、九〇	一〇〇、〇〇	九九、九三	九九、九三	九九、九一
里庄村	九九、四一	九九、二七	九九、六五	九九、七六	九九、七五	九九、五七
大島村	九九、八一	九九、九一	九九、六三	九九、七三	九九、四六	九九、七一
寄島町	九九、八三	九九、七〇	九九、九二	九九、九二	九九、八九	九九、八五
六條院村	九九、四一	九九、八二	九九、七〇	九九、七七	九九、七七	九九、六九
黒崎村	九九、七六	九九、八四	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	九九、九二	九九、九〇
平均	九九、七三	九九、八二	九九、八三	九九、八〇	九九、七五	九九、七九

第二二八節

學齡兒童就學歩合

自大正七年(五ヶ年平均)
至同十一年(五ヶ年平均)

同十一年	同十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同五年	大正四年	全國
九、九、七三	九、九、七六	九、九、七六	九、八、八二	九、九、七三	九、八、七〇	九、八、七一	九、九、六八	淺口郡
九、九、七三	九、九、七六	九、九、七六	九、八、八二	九、九、七三	九、八、七〇	九、八、七一	九、九、六八	



學齡兒童就學歩合比較

町村名	大正七年度	同八年度	同九年度	同十年度	同十一年度	平均
玉島町	九九、八三	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	九九、八九	一〇〇、〇〇	九九、九六
連島町	九九、八四	九九、八九	九九、八四	九九、七九	九九、八四	九九、八四
河内町	九九、八五	九九、九八	九九、八六	九九、八六	九九、八六	九九、八八
船穂村	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	九九、七二	九九、六四	九九、八七
長尾村	九九、六一	九九、八五	九九、八五	九九、八六	九九、八五	九九、八〇
富田村	九九、七四	九九、八四	九九、五九	九九、五八	九九、二八	九九、六一
金光町	九九、五九	九九、七三	九九、八〇	九九、五六	九九、五八	九九、六五
鴨方村	九九、七八	九九、九〇	九九、九〇	九九、九三	九九、九三	九九、九一
里庄村	九九、四一	九九、二七	九九、六五	九九、七六	九九、七五	九九、五七
大島村	九九、八一	九九、九一	九九、六三	九九、七三	九九、四六	九九、七一
寄島町	九九、八三	九九、七〇	九九、九二	九九、九二	九九、八九	九九、八五
六條院村	九九、四一	九九、八二	九九、七〇	九九、七七	九九、七七	九九、六九
黒崎村	九九、七六	九九、八四	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	九九、九二	九九、九〇
平均	九九、七三	九九、八二	九九、八三	九九、八〇	九九、七五	九九、七九